八尾市文化財調査報告 33
平成７年度国庫補助事業

# 八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告書Ⅰ

1996. 3

八尾市教育委員会

# はじめに

八尾市は旧河内国の範囲に含まれており、１７０４年に付け替えされるまでは大和川の主流である玉串川と平野川が市域を流れる水の豊かな、肥沃な土壌を有する土地でありました。このため古来より人々の足跡の絶えない場所であります。これまで八尾南遺跡では旧石器が出土していることからもそれは伺い知ることができます。このような歴史をもつ八尾市も近世には大半が耕作地として利用され、点在する村以外は一面に緑がひろがっていました。しかし、近年、都市郊外の住宅地として開発事業が盛んになり、水田や畑は宅地に変貌しています。

本書にはこのような開発事業に伴う平成７年度の遺構確認調査の報告をまとめてあり、市内における弥生時代から鎌倉時代の様相の一端をみることができます。今後こうして見つかった埋蔵文化財をどのように活用するのか、また市民の皆さんに埋蔵文化財を周知して頂き、埋蔵文化財の大切さを理解してもらうことが大きな課題であります。本報告書がの役割の一端を担うことができれば幸いであります。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた方々、関係者各位に感謝いたします。

平成八年三月

八尾市教育委員会
教育長　西谷信次

# 例　言

1、本書は、平成７年度に八尾市教育委員会が国庫補助事業として計画し、八尾市内で実施した遺構確認調査の報告書である。

2、調査は八尾市教育委員会文化財課（課長　溝川博由）が実施した。

3、調査は八尾市教育委員会文化財課技師米田敏幸、澁斎、吉田野乃が担当し調査にあたった。

4、本書には、巻末に記載した調査一覧表のうち、特に成果のあった調査について、その概要を収録した。

5、本書の作成にあたっては、米田、澁、吉田が執筆・編集を行い、文責は文末に記した。

6、調査一覧表、報告書抄録の作成は本課技師藤井淳弘、吉田珠己が行なった。

7、なお、本文中において、曙川小学校教諭　奥田尚氏より、玉稿を賜った。記して謝意を表したい。

# 本文目次


1．跡部遺跡（９５－０５９）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

2．恩智遺跡（９５－１９６）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

3．小阪合遺跡（９５－１０４）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

4．小阪合遺跡（９５－４５８）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

5．佐堂遺跡（９３－５３４）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27

6．高安古墳群（９４－７６７）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

7．竹渕遺跡（９５－３８）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

8・竹渕遺跡（９５－１７９）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

9．東郷遺跡（９５－７２７）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

10．東郷遺跡（９５－５０９）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37

11．東郷廃寺（９４－７３０）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

12．中田遺跡（９５－２６０）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46

13．中田遺跡（９５－１４９）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48

14．水越遺跡（９５－４５０）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・50

15．八尾南遺跡（９４－５７７）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52

16．八尾南遺跡（９５－２４８）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54

17．弓削遺跡（９３－６３１）の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57

# 図 版 目 次


| | | |
|---|---|---|
| 図版 1 | 恩智遺跡(95-196) | 第 3 調査区全景 |
| | | 第 2 調査区断面状況 |
| | | 第 3 調査区断面状況 |
| 図版 2 | 小阪合遺跡 (95-104) | 弥生時代末期遺構面 (北より) |
| | | SD 13 検出状況 (北西より) |
| | | 古墳時代中期遺構面Ⅱ (西から) |
| 図版 3 | 小阪合遺跡 (95-104) | 古墳時代中期遺構面Ⅱ遺構面, B･C 区(南より) |
| | | SD 9 上面検出状況 (北より) |
| | | SD 9 下面検出状況 (南より) |
| 図版 4 | 小阪合遺跡 (95-104) | 鎌倉時代Ⅱ遺構面(東南より) |
| | | 鎌倉時代Ⅰ遺構面(東南より) |
| | | 中近世遺構面(西より) |
| 図版 5 | 竹渕遺跡 (95-179) | 第 1 調査区調査状況 |
| | | 第 1 調査区全景 |
| | | 第 2 調査区全景 |
| 図版 6 | 東郷廃寺 (94-730) | 第 1 調査区遺構検出状況 (西より) |
| | | 第 3 調査区遺構面検出状況 (西より) |
| | | 第 5 調査区遺構検出状況 (東より) |
| 図版 7 | 中田遺跡 (95-149) | 第 1 調査区断面状況 |
| | | 第 2 調査区調査状況 |
| | | 第 2 調査区遺物出土状況 |
| 図版 8 | 水越遺跡 (95-450) | 第 1 調査区断面状況 |
| | | 第 2 調査区遺物取上げ状況 |
| | | 第 2 調査区遺物検出状況 |
| 図版 9 | 八尾南遺跡 (95-248) | 調査区遠景 (南より) |
| | | 遺構検出状況 (南より) |
| | 小阪合遺跡 (95-458) | 遺構検出状況 (北より) |
| 図版 10 | 八尾南遺跡 (94-577) | 調査地全景 |
| | | 第 1 調査区全景 |
| | | 第 2 調査区全景 |
| 図版 11 | 弓削遺跡 (94-631) | 遺物出土状況 |
| | 中田遺跡 (95-260) | 須恵器杯身出土状況 |
| 図版 12 | 小阪合遺跡 (95-104) | SD 13　出土弥生土器 |
| 図版 13 | 小阪合遺跡 (95-104) | 出土遺物 |
| 図版 14 | 小阪合遺跡 (95-104) | 出土遺物 |
| 図版 15 | 小阪合遺跡 (95-104) | 筒形器台 |
| | | 土師器 |
| 図版 16 | 弓削遺跡 (94-631) | 出土遺物 |
| 図版 17 | 弓削遺跡 (94-631) | 出土遺物 |

# 1．跡部遺跡（９４－０５９）の調査

1．調査地　　東太子１丁目３・１の一部

2．調査期間　　平成７年５月30日

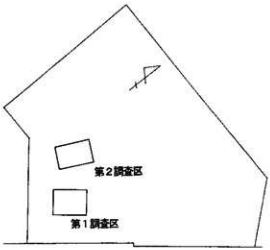
3．調査方法　　ガソリンタンク埋設部分に2.2ｍ×2.6ｍの調査区を２ヵ所設定し、地表下約３ｍまで重機と人力を用いて掘削した。

4．調査概要　　第１調査区　旧耕作土から0.65ｍの盛土を行っている。遺物は地表下1.3ｍの暗褐色粘質土に土師質の高杯、須恵器片を包蔵している。この下部地表下1.45ｍの乳灰褐色粘砂層では須恵器・土師器片とともに鉄滓が出土している。この層の上面には細砂が浅く溝状に堆積しており、遺構となる可能性がある。約0.55ｍの無遺物層を挟んで地表下2.2ｍの暗灰色粘土層からは古式土師器の壺・甕片や須恵器片が出土しており弥生後期から古墳時代中期の包含層とみられるが、下部の暗灰色微砂上面では遺構を検出できなかった。以下植物遺体を含む粘土層が確認でき、沼状の湿地であったことが推定される。

第２調査区　盛土層は約0.7ｍである。旧耕作土の床土である暗緑灰色粘砂を取り除くと暗緑灰色粘質土がある。この層中には多くの須恵器・土師器片が含まれており、下部の乳灰褐色粘砂上面では土坑やピットを検出した。検出面の時期であるが、土坑出土の須恵器から７世紀前半の遺構面と考えられる。また地表下1.75ｍの暗灰色粘土層中でも須恵器杯蓋片が出土しており、６世紀前半の遺物包含層と思われる。以下第１調査区と同様に地表下2.85ｍでは植物遺体を含む粘土層が堆積しているのが確認できた。

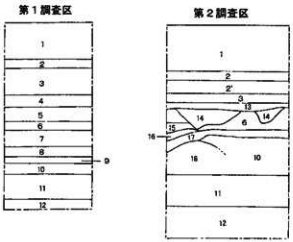
5．出土遺物　　１・２は第１調査区、３～５は第２調査区の土坑出土の遺物である。１は暗褐色

第１図　調査地周辺図（1/5000）




粘質土出土の須恵器無蓋高杯である。中空の脚部をもち口縁部は外上方に緩やかにひらく。回転ナデ調整。２は土師器甕口縁部で、頸部から外湾して上外方にのびる。３・４は須恵器杯身で、３は立ち上がりは内傾してのび端部は丸く、底体部も浅い。口径 12.8 ㎝。ＴＫ 209 に比定できる。４は立ち上がりは短く内傾し、端部は丸い。口径 11 ㎝で底体部は浅い。５は須恵器甕で頸部から外湾して外上方にのび、端部は内傾する平面を成している。口径 12.6 ㎝。６は須恵器甕体部で、球形を成し最大径は 28.6 ㎝。

第２図　調査区設定図（1/500）

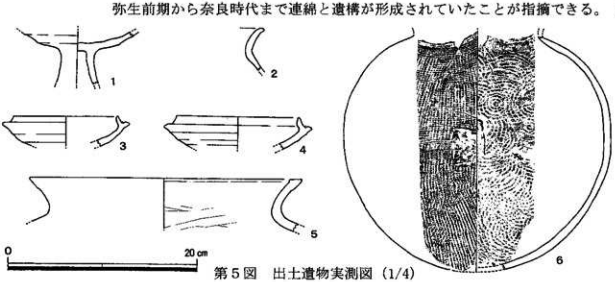



第３図　基本層序摸式図(1/60)

第４図　第２調査区遺構平面図(1/60)

6．備考

調査地の北 100 ｍでは弥生前期から古墳中期の遺構面を検出している。また南西 200 ｍでは古墳中後期の包含層や奈良～平安・鎌倉時代の遺構が確認されている。今回はこれまであまり見つかっていない７世紀前半の遺構面が検出されたことから弥生前期から奈良時代まで連綿と遺構が形成されていたことが指摘できる。（澁）




第５図　出土遺物実測図（1/4）

# 2．恩智遺跡（９５－１９６）の調査

１．調査地　　恩智中町３丁目

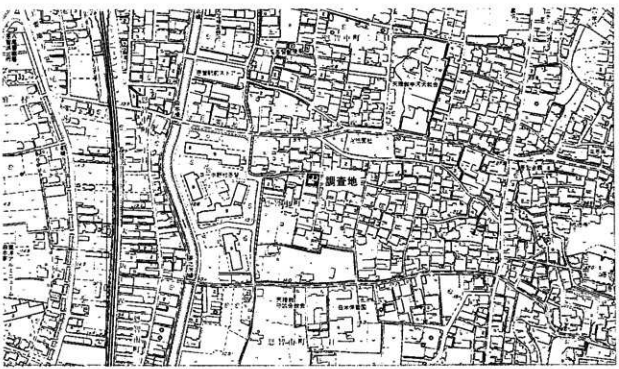
２．調査期間　　平成７年８月１日・８月７日

３．調査方法　　遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地内の建物予定地の浄化槽の設置計画部分を対象に２×１ｍ調査区を３箇所設定し、機械による掘削ののち、手掘作業による断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影及び断面実測等を行った。

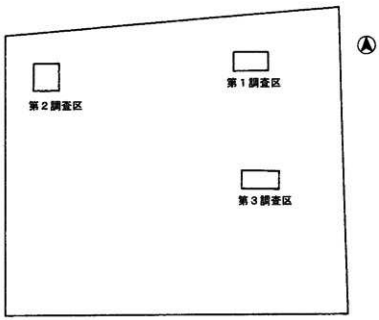
４．調査概要　　北東側に設定した第１調査区では、地表下１.４ｍまで掘削したが、調査区の殆どが攪乱された土層の堆積となっていた。しかし調査区の東壁付近１.２ｍ以下に包含層の残存を確認し、弥生式土器の器蓋（１）が出土したため、日を改めて第２、第３調査区の掘削を実施した。北西側の第２調査区では、地表下30cm以下約50cmの層厚の黒灰色粘質土を確認した。粘質土内には弥生式土器の砕片が混じるのみできわだった遺物の出土はなかったが、黄褐色砂質土をベースとする小穴状の落ち込みを検出した。また南側の第３調査区では、地表下30cm以下約40cmの層厚の包含層及び暗褐色砂質土をベースとする落ち込みを検出した。包含層からは須恵器片及び弥生式土器片が出土し、落ち込み状遺構からは弥生式土器や石器が多数出土した。

５．調査結果　　敷地内で確認した包含層及び遺構は弥生時代中期を主体とするもので、出土遺物もその殆どが畿内第三様式から第五様式前半までの範疇で捉えることができ、恩智遺跡の盛行期に重なる遺構と思われる。北50ｍの所には府の史跡指定地があり、付近の調査でもこの付近が弥生時代集落跡の中心部に位置していることが想定される。今後とも周辺の調査によって当遺跡内の状況を明らかにしていく必要があろう。

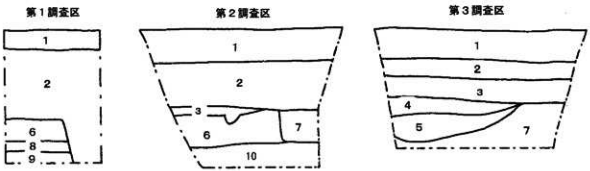
（米田）



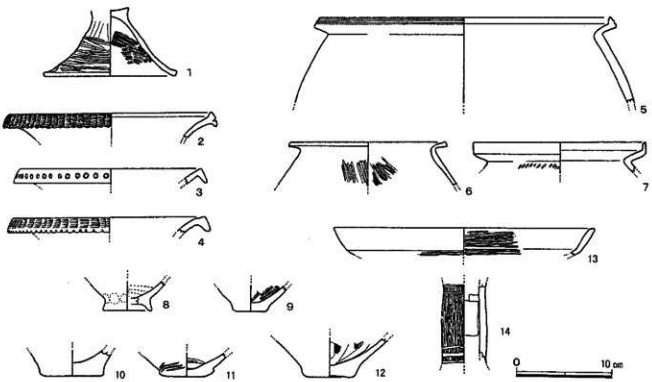

第６図　調査位置図



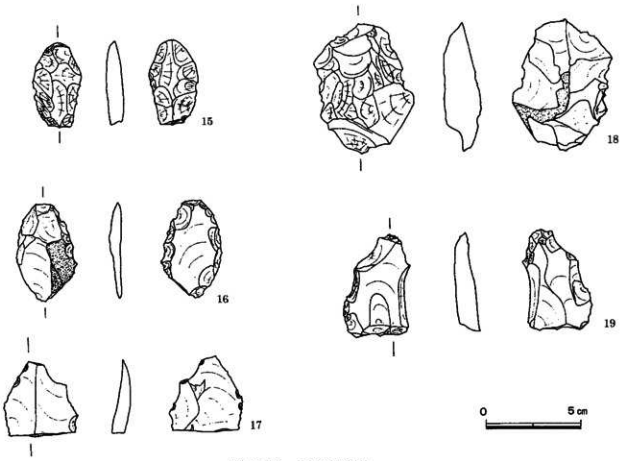

第７図　調査区設定図(1/200)




第８図　土層断面図(1/40)




第９図　土器実測図




第10図　石器実測図

| 番号 | 地点 | 種類 | 部位 | 法量(cm) | 調整の特徴 | 色調 | 胎土の特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1G | 器蓋 | 完形 | 口径13.8<br>高7.1 | 外面ヘラ磨き、内面ハケ | 暗橙褐色 | 石英長石雲母細粒を含む |
| 2 | 3G | 壺 | 口縁部 | 口径21.1 | 口縁端　簾状文＋刺突文 | 暗褐色 | 角閃石多く含む |
| 3 | 3G | 壺 | 口縁部 | 口径19.0 | 口縁端　竹管文 | 橙褐色 | 赤色酸化粒含む |
| 4 | 3G | 壺 | 口縁部 | 口径20.0 | 口縁端　簾状文＋刺突 | 暗褐色 | 閃緑岩角閃石含む |
| 5 | 3G | 甕 | 口縁部 | 口径30.3 | 口縁端　沈線文 | 暗褐色 | 角閃石多く含む |
| 6 | 3G | 甕 | 口縁部 | 口径16.4 | 外面ヘラ磨き、内面ハケ | 暗褐色 | 角閃石多く含む |
| 7 | 3G | 甕 | 口縁部 | 口径17.8 | 外面叩き目 | 暗褐色 | 閃緑岩片含む |
| 8 | 3G | | 底部 | 底径5.0 | 外面指頭圧、内面指ナデ | 暗橙褐色 | 花崗岩片含む |
| 9 | 3G | | 底部 | 底径3.6 | 外面ナデ　内面ハケ | 淡褐色 | 花崗岩片含む |
| 10 | 3G | | 底部 | 底径6.6 | 磨滅 | 暗褐色 | 閃緑岩片含む |
| 11 | 3G | | 底部 | 底径5.6 | 外面叩き　内面ナデ | 暗褐色 | 長石石英細粒含む |
| 12 | 3G | | 底部 | 底径5.2 | 外面不明　内面ヘラナデ | 淡褐色 | 長石の細粒含む |
| 13 | 3G | 高坏 | 杯部 | 口径27.0 | 内外面ヘラ磨き | 橙褐色 | 花崗岩チャート粒含む |
| 14 | 3G | 高坏 | 脚柱部 | 柱径4.6 | 外面ヘラ磨き内面ナデ | 橙褐色 | チャート粒含む |

恩智遺跡出土土器観察表

# 3．小阪合遺跡（９５－１０４）の調査

1．調査地　八尾市青山町１丁目 35-4. -5. -6. -7 の各一部及び 40-3 番地

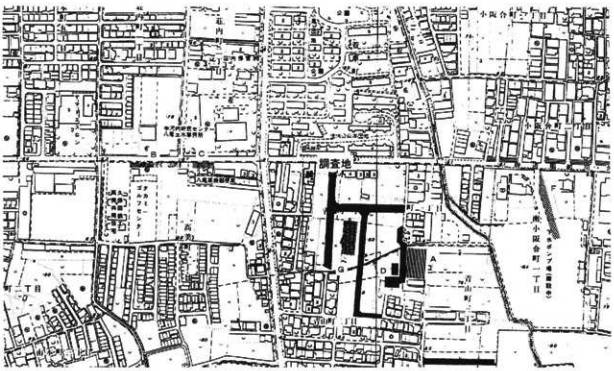
2．調査期間　平成７年６月６日、６月 22 日～７月 12 日（実働 10 日）

3．調査方法　本調査に先立ち行った試掘調査は事業計画地の北東部分と南西部分に 2.5×2.5 mの試掘孔を２ヵ所設けた。その結果南西部分において遺物・遺構が顕著に確認できたことから、この試掘孔を中心としてL字形の調査トレンチを設定しこれを３区に分け、それぞれをA，B，Cとした。掘削は地表下 1.1 m前後を重機、以下の 0.5 mを人力によって行った。なお調査開始後、大雨による調査トレンチの崩壊を防ぐため遺構がほとんどみられないA区のみ埋め戻しを行った。

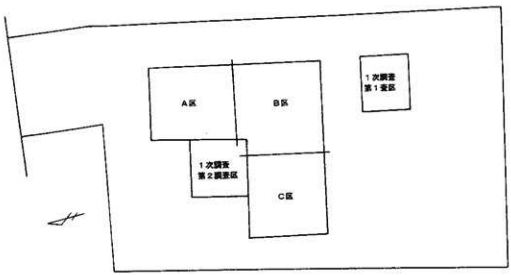
4．基本層序　調査地で検出した土層で特に遺構が集中して検出されたB・C区で摘出した次の９層を基本層序とした。

第１層　盛土　層厚 60～75 ㎝
第２層　旧耕作土　層厚 25 ㎝　建物建築以前の畑の畝
第３層　淡茶灰色粗砂混粘砂（層厚約 15 ㎝）　近世の遺物を含む
第４層　暗茶褐色小礫混粘砂（層厚約 15～19 ㎝）　中近世遺構面
第５層　淡黄灰色砂質土（層厚約 16～22 ㎝）　鎌倉時代Ⅰ遺構面
第６層　暗淡黄灰色微砂質土（層厚約 17～20 ㎝）　鎌倉時代Ⅱ遺構面
第７層　暗黄褐色微砂混粘砂（層厚約 15～20 ㎝）　古墳時代Ⅰ遺構面
第８層　淡灰黄色粗砂質土（層厚約 16～25 ㎝）　古墳時代Ⅱ遺構面
第９層　淡黄灰色シルト混微砂（層厚 25 ㎝以上）　弥生時代末期遺構面

地表下２m以下は褐色粘砂・暗青灰色粘土・暗灰色微砂を確認した。




第 11 図　調査地周辺図（1/5000）




第12図　調査区設定図（1/200）

5．検出遺構と遺物について

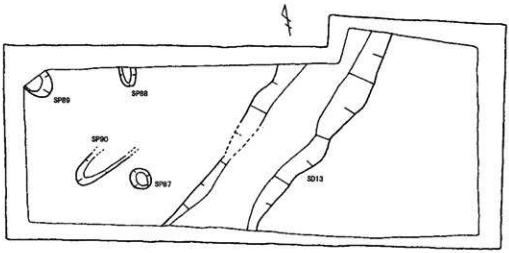
今回は４層上面が中近世遺構面、５層上面と６層上面で鎌倉時代遺構面を、７層上面と８層上面で古墳時代中期遺構面を、９層上面で弥生時代末期遺構面を検出した。このため鎌倉時代上層遺構をⅠ面、下層遺構をⅡ面とし、古墳時代中期遺構面においても同様にⅠ面、Ⅱ面とした。

《弥生時代末期遺構面》

地表下 1.7～1.8 m（TP＋6.4～6.5 m）の９層上面で、溝１条（ＳＤ 13）・ピット（SP80～86）を検出した。各遺構については表１にまとめた。

| 遺構番号 | 種　土 | 形　態 | 長径×短径×深さ | 出　土　遺　物 | 遺構番号 | 種　土 | 形　態 | 長径×短径×深さ | 出　土　遺　物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ピット | SP－87 | 灰色粗砂混粘砂 | 円形 | 3.6×2.6×6 | 溝 | SD－13 | 灰色粗色粘質土<br>暗灰色粗砂混粘砂<br>暗灰色粗砂混粘砂<br>暗灰色粘質ソフト | ―― | 410 ×150 ×2.5 | 弥生土器多数 |
| | SP－88 | 灰褐色粘砂 | ? | (30)×(27)×9 | | | | | |
| | SP－89 | 灰色砂混粘質土 | ? | (45)×(45)×10 | | | | | |
| | SP－90 | 灰褐色粗砂混粘砂 | ? | (85)×(28)×6 | | | | | |

第１表　弥生時代末期遺構面検出遺構一覧　＊(溝・土抗は検出長×最大幅×最深部)




第13図　弥生時代末期遺構面平面図（1/60）

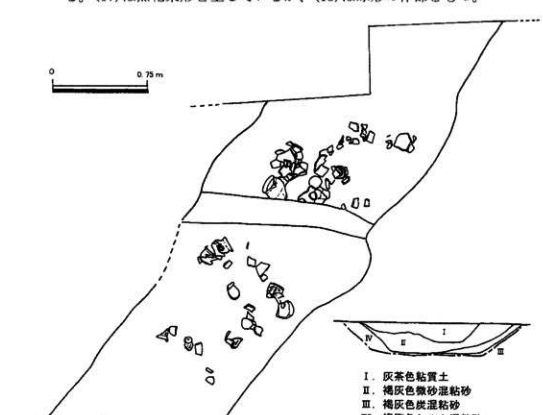
この弥生時代末期遺構面では特に遺物が多く出土した溝（ＳＤ13）について詳細を述べていく。

［ＳＤ１３］

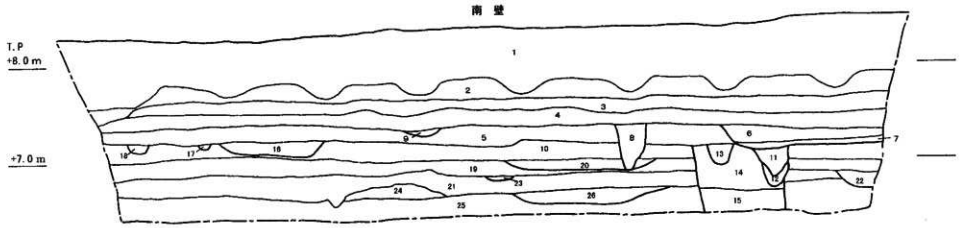
調査区のＢ・Ｃ地区で検出した。北北東から南南西にのびるもので、検出長 4.1 m、幅 1.5 m、深さは北側が深く 0.25 m、南側は浅くなっており 0.16 mを測る。埋土は灰茶色粘質土、褐灰色微砂混粘砂、褐灰色炭混粘砂、褐灰色シルト混粘砂の４層である。遺物は河内の土器編年で西ノ辻Ｉ地点～上六万寺式に併行するものとみられる土器が出土しているが、完形品あるいはそれに近いものが多いことが特徴的である。これは土器が溝に投機されたのは近辺であることを示している。また甕、広口壺のみで高杯は１点も含まれておらず、鉢に復元できるものもみられない。

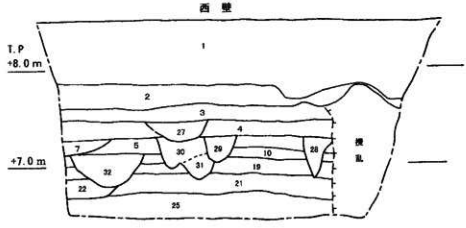
図示できたのは 18 点（第 22 図１～18）である。土器の詳細については遺物観察表を参照してもらい、ここでは概観のみ記しておこう。甕（１～14）は(1)・(2)・(14)を除いてすべて外面にタタキを施している。内面はハケを使用しているものが大半を占める。器高が 20 ㎝前後の小型品ばかりである。体部最大径は中位以上にあり、球形化は進んでいない。(4)のみが僅かに球形化への指向を伺うことができる。口縁部では(5)・(6)が端部に内傾する面をもっている。また頸部付近のタタキが目立つことから口縁叩き出し技法を採用しているとみられるものある。底部は突出した平底は(1・2)のみで大方は底部と体部の明瞭な区別のつかない平底である。タタキも底部にまでおよぶものも多い。

広口壺（15～18）は外面にヘラミガキを施し、内面はハケ・イタナデを用いている。(17)は無花果形を呈しているが、(18)は球形の体部をもつ。




第 14 図　ＳＤ１３平面及び断面図（1/30）




1．盛土(基本層序1)
2．灰黒色砂混粘砂(旧耕作土)(基本層序2)
3．淡茶灰色微砂混粘砂(基本層序3)
4．暗茶褐色小礫混粘砂(基本層序4)
5．淡黄灰色砂質土(基本層序5)
6．暗茶灰色粗砂混粘質土
7．暗灰色粗砂質土　SK2 埋土
8．暗淡黄灰色微砂質土(ﾋﾞｯﾄ埋土)
9．茶灰色粘砂(SD2 埋土)
10．暗淡黄灰色微砂質土(基本層序6)
11．暗灰色炭混粘質土(ﾋﾞｯﾄ埋土)
12．淡灰色微砂混粘質土(ﾋﾞｯﾄ埋土)
13．暗灰色粘土(ﾋﾞｯﾄ埋土)
14．灰色粘砂
15．暗灰色粘質土　井戸埋土
16．暗茶灰色微砂質土(SD3 埋土)
17．灰褐色粘砂(SD4 埋土)
18．灰茶色粘質土(SD5 埋土)
19．暗黄褐色微砂質土(基本層序7)
20．暗茶褐色粘質土(SD9 埋土)
21．淡黄灰色微砂質土(基本層序8)
22．暗灰茶色微砂混粘砂(SD10 埋土)
23．暗灰茶色微砂混粘質土(SD11 埋土)
24．灰白色微砂質土
25．暗茶灰色砂混粘砂(基本層序9)
26．褐灰色微砂混粘砂(SD13 埋土)
27．暗灰茶色炭混粘砂(ﾋﾞｯﾄ埋土)
28．暗灰黄色粘砂(ﾋﾞｯﾄ埋土)
29．淡黄灰色砂混粘砂＋灰色粘砂(ﾋﾞｯﾄ埋土)
30．暗茶灰色微砂混粘砂(ﾋﾞｯﾄ埋土)
31．淡灰色粘質土(ﾋﾞｯﾄ埋土)
32．灰色粘質土(ﾋﾞｯﾄ埋土)

第15図　南壁及び西壁土層断面（1/20）

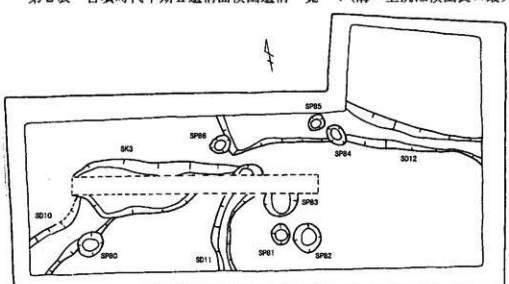
《古墳時代中期Ⅱ遺構面》

地表下1.55m（TP+6.85m）の8層上面で、溝3条（SD10～12）・土坑（SK3）・ピット（SP80～86）を検出した。

| 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|
| ピット | SP-80 | 暗褐色砂質土 | 円形 | 35×36×8 | 土師器片・須恵器片 |
| | SP-81 | 灰色砂質土 | 円形 | 34×34×19 | |
| | SP-82 | 暗色混砂質土<br>暗灰褐色砂質粘砂 | 円形 | 45×40×22 | |
| | SP-83 | 暗灰茶色混砂質土 | ? | (54)×(32)×11 | |
| | SP-84 | 暗褐色粘砂<br>暗灰色粘質土 | 長円形 | 36×27×23 | 土師器片 |
| | SP-85 | 暗褐色粘質土<br>暗灰色混砂質土 | 円形 | 31×28×21 | 土師器片・須恵器片 |
| | SP-86 | 灰色粘質土 | 楕円形 | 35×25×11 | |

| 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 溝 | SD-10 | 暗灰茶色混砂質粘砂 | — | 110×5.8×8 | 土師器・須恵器 |
| | SD-11 | 暗灰茶色混砂質粘質土 | — | 118×2.8×9 | |
| | SD-12 | 灰茶色混砂質粘質土 | — | (23)×9.2×11 | 須恵器・土師器 |
| 土坑 | SK-3 | 暗黄茶色粘砂 | 不定形 | 270×90×(20) | 須恵器多数 |

第2表　古墳時代中期Ⅱ遺構面検出遺構一覧　＊（溝・土坑は検出長×最大幅×最深部）




第16図　古墳時代中期Ⅱ遺構面平面図（1/60）

［SK3］

C区で検出した。東西に長い不定形の土坑である。SD10を切り、SD11に切られる関係にあることから、あるいは1本の溝の可能性がある。検出長2.7m、最大幅0.9m、深さ約0.2mで、埋土は暗黄灰色粘砂である。なお上層より断ち割りトレンチを掘削したため、遺構中央部は不明。

遺物は須恵器を主として出土しており、土師器も数点含まれる。図示できた7点（第22図19～25）について概観していく。(19)は土師器小型壺は頸部が鋭く屈曲したのち外反する口縁をもつものである。杯蓋（20～22）はやや平らで、口縁はほぼ垂直に下り、端部に内傾する面をもつ。(21)は稜も鋭く下方に明瞭な沈線がめぐる。杯身(25)は受部が水平にのび端部は丸い。立ち上りは内傾しながらのび、端部は内傾する凹面を成す。有蓋高杯(24.25)は脚部に円孔を4方に穿ち、裾部に断面三角の凸帯を巡らす(24)と台形の透かしを3方に配する低脚の(25)がある。(24)は受部は断面三角形を呈し、口縁は内傾して真っ直ぐにのびる。

これらの土器のうち、特に杯蓋をみると鋭い稜をもち、口縁端部に内傾する凹面をもつなどの特徴から概ね陶邑編年のTK23型式の範疇におさまるものとみられ、この土坑は5世紀後半に位置づけることができる。

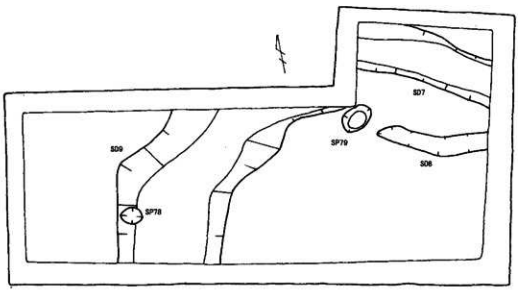
《古墳時代中期Ⅰ遺構面》

地表下1.3～1.4m（TP+6.9～7m）の7層上面で、溝3条（SD7～9）・ピット1基（SP79）を検出した。

| 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|
| ピット | SP-78 | 暗灰褐色粘砂 | 円形 | 30×25×7 | ――― |
| | SP-79 | 暗黒灰色粘質土 | 楕円形 | 52×26×8 | ――― |

| 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|
| 溝 | SD-7 | 灰褐色砂混粘質土 | ―― | 215×88×17 | 須恵器・土師器 |
| | SD-8 | 暗黄灰色粘砂 | ―― | 180×36×5 | ――― |
| | SD-9 | 暗茶褐色粘質土 | ―― | 200×270×10 | 須恵器・土師器 |

第3表　古墳時代中期Ⅰ検出遺構一覧　＊（溝・土坑は検出長×最大幅×最深部）




第17図　古墳時代中期Ⅰ遺構面平面図（1/60）

［SD9］

C地区で検出した。北東から南にのびるもので、検出長約2.7m、幅約2.2m、最も深い位置で0.17mを測る。埋土は暗茶褐色粘質土である。

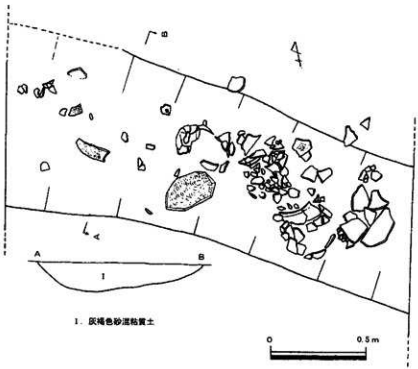
(26)長胴の土師器甕は、外面は体部から口縁部まで縦方向のハケを、内面は横方向ハケを口縁端部まで施している。須恵器杯蓋(27,28)はいずれも稜が突出しており、端部は鋭い。(27)の口縁端部は外反し、凹面を成している。(28)は口縁部が2.5cmと長く、端部は内傾する面を作っている。無蓋高杯(29)は体部の深いもので、凸帯を3条巡らせ、間に波状文を施している。口縁端部は薄く、鋭い。(45)は器台の脚部で三角形の透かしが上下で交互に配されている。

なお包含層出土遺物である(第24図54～61)は一部このSD9の遺物の可能性があるが、詳細は後にゆずる。しかし、これらの土器を交えてSD9の時期を考えてみると陶邑編年のTK47を下ることはないみられ、6世紀の初頭に位置づけることができよう。

［SD7］

A～B地区で検出した。東西方向にのびるもので、検出長2.25m、幅0.85m、深さ0.18mを測る。埋土は灰褐色砂混粘質土である。

遺物は多くの須恵器、土師器が出土しているが、ここでは16点（第23図30～44・46～48）を図示している。土師器甕（30～32）は体部外面は縦方向のハケ、内面は横方向の




第18図　ＳＤ７平面図および断面図（1/20）

ハケを施す。底部は丸みをもつ。口縁端部は外上方にのび丸くおさめるもの(30)、上外方にのびた後外反し、僅かにつまみ上げるもの(31)、平面をつくるもの(32)がある。釜(33, 34)は河内Ａ型に分類されるもので、長胴の砲弾形の体部と「く」の字に外反する口縁をもつ。外面はナデ、内面は口縁部にハケがみられる。壺(35～37)は「く」の字状に短く屈曲する口縁をもつ。外面にハケを施す。高杯は(38)は中空の脚柱部で、体部は浅い塊形で内面に暗文を施す。

須恵器杯蓋(39)の口縁は垂直にくだり、端部は内傾する段を成す。稜は鈍い。(40)は凹状のつまみを持つ杯蓋。杯身(41)は丸い体部で、立ち上りは短く端部は内傾する面を成す。甕(42)は体部に刺突文を施し、文様帯状に円孔を穿つ。口頸部は広く波状文を巡らしている。(43)は壺底部・(44)は甕体部である。

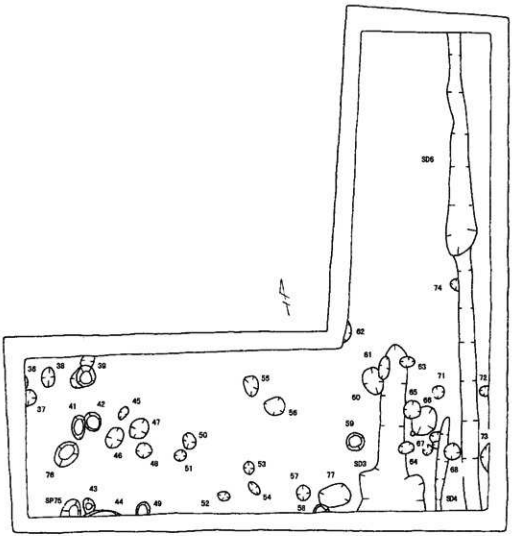
これらを須恵器の編年で概ねＴＫ47に比定でき、ＳＤ７も６世紀初頭に位置づけることができる。

［ＳＰ78］

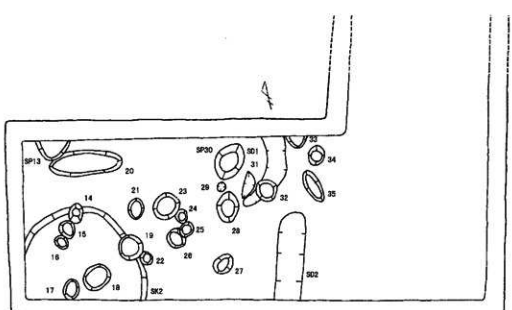
Ｃ地区で検出したＳＤ９を切っている円形のピットである。ここからは土師器の小型壺(46)と杯蓋(47)が出土している。小型壺は体部が球形で体部外面に太めのハケ、内面にやや細いハケを行う。杯蓋は丸みをもつ体部で、短い口縁が垂下し、端部は内傾する面を成している。

《鎌倉時代Ⅱ遺構面》

地表下1.2ｍ（TP+7.15ｍ）の６層上面で、溝３条（ＳＤ３～６）・ピット42基（ＳＰ36～77）を検出した。また、Ｃ地区南壁では素堀りの井戸状遺構が確認できた。この面では多くのピットを検出しており、ＳＰ77・66・62・56あるいはＳＰ77・66・62・55・50、ＳＰ60・66・73・77等の組み合わせで建物棟を想定することができる。しかし、確実な建物棟の構成を把握することはできなかった。




第 19 図　鎌倉時代Ⅰ遺構面平面図（1/60）




第 20 図　鎌倉時代Ⅱ遺構面平面図（1/60）

ピットのなかで、ＳＰ 71 は埋土中に製作途中の玉が出土している（第 23 図 48）。ＳＰ 44 からは鉄滓が出土していることが注目される。第５層掘削中にも鉄滓が見つかっており、鉄製作を行っていたことが推定される。また、南壁断面で確認できた素堀りの井戸状遺構からは瓦器皿(49)が出土していることから、概ね 13 世紀前半に比定できると考えられる。

| | 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| ピット | SP－36 | 暗茶灰色粘砂 | ？ | (20)×(6)×12 | ―― |
| ピット | SP－37 | 暗灰色粘砂 | ？ | (20)×(18)×13 | 土師器片 |
| ピット | SP－38 | 暗黄灰色粘砂 | 円形 | 32×28×15 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－39 | 灰褐色粘砂 | 円形 | 24×22×11 | ―― |
| ピット | SP－40 | 暗黄褐色～暗灰色炭混粘砂 | 楕円形 | 41×30×36 | ―― |
| ピット | SP－41 | 暗黄灰色粘砂 | 楕円形 | 39×27×22 | 瓦器・土師器・須恵器片 砥石 |
| ピット | SP－42 | 暗褐灰色粘砂 | 円形 | 30×23×14 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－43 | 灰黒色粘砂 | 円形 | 20×20×9 | 土師器片 |
| ピット | SP－44 | 暗灰色粘砂 | ？ | (31)×(11)×24 | 鉄滓・瓦器片・土師器片 |
| ピット | SP－45 | 暗黄褐色粘砂 | 楕円形 | 22×18×16 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－46 | 灰褐色粘砂 | 円形 | 36×32×31 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－47 | 黄灰色～暗灰色粘砂 | 円形 | 36×34×29 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－48 | 暗灰色粘砂 | 円形 | 26×28×27 | 土師器・須恵器・瓦器片 |
| ピット | SP－49 | 暗灰色粘砂 | 円形？ | (24)×20×13 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－50 | 暗灰色～褐灰色粘砂 | 円形 | 25×25×22 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－51 | 灰色～褐灰色粘砂 | 円形 | 23×20×16 | ―― |
| ピット | SP－52 | 暗灰色粘砂 | 円形 | 26×23×15 | ―― |
| ピット | SP－53 | 暗灰色粘砂 | 円形 | 24×22×19 | ―― |
| ピット | SP－54 | 褐灰色粘砂 | 円形 | 23×18×14 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－55 | 暗灰色粘砂 | 楕円形 | 32×26×10 | 土師器片 |
| ピット | SP－56 | 灰黄色粘砂 | 円形 | 32×30×11 | ―― |
| ピット | SP－57 | 暗黄褐色粘砂 | 円形 | 24×21×22 | ―― |
| ピット | SP－58 | 暗黄褐色粘砂 | ？ | (23)×(10)×8 | ―― |
| ピット | SP－59 | 暗灰色粘砂 | 円形 | 29×27×8 | 土師器片 |
| ピット | SP－60 | 暗灰色粘砂 | 長円形 | 42×26×18 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－61 | 灰褐色シルト混粘砂 | 長円形 | 34×20×15 | 土師器片 |
| ピット | SP－62 | 淡黄灰色シルト混粘砂 | ？ | (27)×(14)×7 | ―― |
| ピット | SP－63 | 淡灰褐色シルト混粘砂 | 長円形 | 24×17×18 | 土師器片 |
| ピット | SP－64 | 淡灰褐色粘砂 | 円形 | 25×18×25 | 弥生土器片 |
| ピット | SP－65 | 暗灰褐色粘砂 | 円形 | 28×25×22 | 土師器片 |
| ピット | SP－66 | 暗灰褐色シルト混粘砂～黄褐色粗砂質土 | 楕円形 | 47×36×23 | 羽釜片・土師器片 |
| ピット | SP－67 | 暗灰褐色粘砂 | 円形 | 16×14×12 | ―― |
| ピット | SP－68 | 茶灰色粗砂質土 | 円形 | 28×25×18 | ―― |
| ピット | SP－69 | 暗灰色粘質土 | 円形 | 14×12×13 | ―― |
| ピット | SP－70 | 暗茶灰色粘砂 | ？ | 18×(12)×20 | ―― |
| ピット | SP－71 | 淡灰褐色粘砂 | 円形 | 18×18×10 | 石製品 |
| ピット | SP－72 | 灰褐色粘質土 | ？ | (16)×(12)×14 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－73 | 灰茶色粗砂質土 | ？ | (43)×(13)×5 | ―― |
| ピット | SP－74 | 暗灰褐色砂質土 | ？ | (16)×(15)×4 | ―― |
| ピット | SP－75 | 灰黄色粗砂質土・灰色砂混粘砂 | ？ | (34)×(28)×28 | 土師皿 |
| ピット | SP－76 | 暗灰褐色粘砂・暗灰色粘砂 | 楕円形 | 46×33×13 | 土師器杯 |
| ピット | SP－77 | 暗茶灰色粘砂 | 楕円形 | 42×36×8 | 羽釜口縁・瓦器・土師器 |
| 溝 | SD－3 | 暗茶灰色粗砂質土 | ―― | 242×100×9 | 須恵器片・土師器片・弥生土器片 |
| 溝 | SD－4 | 灰褐色粘砂 | ―― | 148×42×5 | ―― |
| 溝 | SD－5 | 灰茶色粘質土 | ―― | 407×28×6 | 土師器片 |
| 溝 | SD－6 | 暗青灰色シルト | ―― | 356×48×15 | ―― |

第４表　鎌倉時代Ⅱ遺構面検出遺構一覧　＊(溝・土抗は検出長×最大幅×最深部)

《鎌倉時代Ｉ遺構面》

Ｃ・Ｂ地区を中心に地表下 1.05 m（TP＋7.35 m）の５層上面でピット２３基（ＳＰ 13～35）、土坑１基（ＳＫ２）、溝２条（ＳＤ１・２）を検出した。ピット数の割りに調査区が小さいため明確な建物棟を検出できなかったがＳＰ 18・19・23・27・30 やＳＰ 27・28・30・34 あるいはＳＰ 25・28・32・34 など建物を構成する可能性はいくつか考えられる。とくにピットの埋土に炭を含むＳＰ 14・18・27・28・30 があり、焼失家屋の存在が推定される。また、ＳＫ２の下層には炭化物が多くかたまっていることからその可能性は高い。

| | 遺構番号 | 埋土 | 形態 | 長径×短径×深さ | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|
| ピット | SP－13 | 灰色粘砂 | ？ | (54)×(33)×(20) | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－14 | 暗灰色炭混粘砂 | 円形 | (32)×(24)×8 | 羽釜口縁・瓦器・土師器 |
| ピット | SP－15 | 灰色粘質土 | 円形 | 34×26×5 | 土師器片 |
| ピット | SP－16 | 灰黄色粘砂 | 円形 | 25×22×15 | ―― |
| ピット | SP－17 | 灰色砂礫粘砂 | ？ | 29×(28)×8 | 土師器高台部・瓦器 |
| ピット | SP－18 | 灰黒色粘砂 | 円形 | 48×36×13 | 白磁片・瓦器片・土師器 |
| ピット | SP－19 | 暗灰黄色粘質 | 円形 | 44×43×13 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－20 | 淡褐灰色粘砂 | 長円形 | 118×37×20 | 瓦器・土師器・須恵器片 |
| ピット | SP－21 | 灰褐色粘砂 | 円形 | 26×25×6 | 瓦器・土師器・須恵器片 |
| ピット | SP－22 | 灰色粘砂 | 円形 | 23×(20)×6 | 土師器片 |
| ピット | SP－23 | 灰茶色粘砂 | 円形 | 40×40×14 | 土師器片 |
| ピット | SP－24 | 暗灰黄色粘砂 | 円形 | 20×17×8 | 土師器片 |
| ピット | SP－25 | 暗灰黄色粘砂 | 円形 | 24×24×11 | 土師器片・須恵器片 |
| ピット | SP－26 | 褐灰色粘質土 | 円形 | 34×(28)×7 | 須恵器片・土師器片 |
| ピット | SP－27 | 灰黒色粘砂 | 円形 | 36×28×24 | 白磁片・瓦器・土師器片 |
| ピット | SP－28 | 灰色炭混粘質土 | 楕円形 | 50×36×44 | 土師皿・瓦器・土師器片 |
| ピット | SP－29 | 淡灰黄色粘砂 | 円形 | 15×14×7 | ―― |
| ピット | SP－30 | 灰色炭混粘質土 | 楕円形 | 66×44×22 | 須恵器片・土師器片 |
| ピット | SP－31 | 灰黄色粘砂 | 円形 | 20×16×6 | 瓦器片・土師器片 |
| ピット | SP－32 | 黄灰色粘砂 | 円形 | 37×30×14 | 瓦器片・土師器片 |
| ピット | SP－33 | 黄灰色粘砂 | ？ | (32)×(19)×8 | 土師皿 |
| ピット | SP－34 | 暗黄灰色粘砂 | 円形 | 33×26×10 | 土師器杯 |
| ピット | SP－35 | 暗灰色炭混粘砂 | 長円形 | 54×26×13 | 羽釜口縁・瓦器・土師器 |
| 溝 | SD－1 | 灰色炭混粘砂 | ―― | 128×36×6 | 瓦器片・土師器片 |
| 溝 | SD－2 | 茶灰色粘砂 | ―― | 140×41×4 | ―― |
| 土坑 | SK－2 | 暗茶灰色粗砂混粘質土 暗灰色粗砂質土 | ？ | 174×146×24 | 白磁片・土師皿・瓦器椀 瓦器皿・羽釜片・瓦片 |

第５表　鎌倉時代Ｉ遺構面検出遺構一覧　＊(溝・土抗は検出長×最大幅×最深部)

［ＳＰ33］

Ｂ地区北端で検出した。半分が側溝に切られており、全容は不明である。埋土中より、土師器皿(50)が出土している。口径12.7㎝，深さ2.4㎝である。

［ＳＫ２］

Ｃ地区南西部で検出した。円形を呈すると考えられるが、プランの半分が調査区外にのびるため全容は不明である。検出長径1.74ｍ、短径1.46ｍ、最も深い位置で0.24ｍを測る。埋土は上層に灰黄色粘砂、下層に暗灰色粗砂質土で炭化物が充満していた。埋土を取り除くとピット４基が確認できた。このＳＫ２からは土師器小皿(51)が出土している。口径9.2㎝、深さ1.3㎝である。

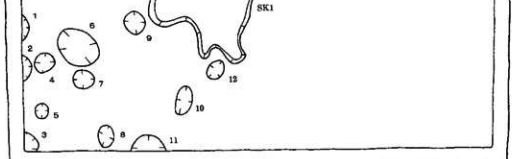
《中近世遺構面》

Ｃ地区のみに集中して地表下0.9ｍ(TP+7.5ｍ）の４層上面でピット12基、土坑１基を検出した。包含層および遺構出土遺物は多時期にわたっており、近世陶磁器も含むことから中近世の遺構と考えられる。ＳＰ11からは瓦器塊(51)が、ＳＫ１からは瓦器小皿(52)が出土している。Ａ地区は土壌がグライ化しており、耕作地であったと思われる。

| 遺構番号 | 埋　土 | 形　態 | 長径×短径×深さ | 出　土　遺　物 |
|---|---|---|---|---|
| ピット | SP－1 | 暗褐灰色粘砂 | ？ | (30)×(12)×16 | 土師器片 |
| | SP－2 | 灰黄灰色粘砂 | ？ | (35)×(18)×7 | 須恵口縁・土師器片 |
| | SP－3 | 暗灰灰色粘砂 | ？ | (50)×(20)×(12) | 台質片・瓦器片・土師器 |
| | SP－4 | 灰茶色粘砂 | 円形 | 34×30×8 | 土師器片・瓦器混合 |
| | SP－5 | 暗灰色砂質粘砂 | 円形 | 22×22×12 | 土師器片 |
| | SP－6 | 暗灰色粘砂 | 長円形 | 85×54×17 | 土師器片多数・礫石 |
| 土坑 | SK－1 | 暗茶灰色粘砂 | 不定形 | (175)×(23)×8 | 瓦器皿・須恵器片・土師器片・瓦器片 |

| 遺構番号 | 埋　土 | 形　態 | 長径×短径×深さ | 出　土　遺　物 |
|---|---|---|---|---|
| ピット | SP－7 | 暗灰灰色粘砂 | 円形 | 34×29×11 | 台質片・土師器片・瓦器 |
| | SP－8 | 暗灰色砂質粘砂 | 長円形 | 33×24×5 | 土師器片 |
| | SP－9 | 灰黄茶色粘砂 | 円形 | 40×38×15 | 土師器片・須恵器片 |
| | SP－10 | 灰茶色粘砂 | 楕円形 | 48×25×10 | 瓦器片・土師器片 |
| | SP－11 | 灰黄茶色粘砂 | ？ | (48)×(22)×13 | 瓦器片・土師器片 |
| | SP－12 | 暗灰灰色粘砂 | 円形 | 30×26×13 | 瓦器片・土師器片 |

第６表　中近世遺構面検出遺構一覧表　＊(溝・土坑は検出長×最大幅×最深部)




第21図　中近世遺構面平面図（1/60）

〔包含層出土遺物〕

(54～61) は6層出土の土器ではあるが、溝であるSD9の出土遺物の可能性がある。土師器甕(54)は体部外面に縦ハケを施す。須恵器杯蓋 (55・56) はいずれも稜は鋭く、(56)は天井部がやや平らで口縁部は2.5㎝前後ある。杯身(57)は受部は外上方にのび端部は丸い。立ち上がりは約2㎝と長い。有蓋高杯の杯部(58)は長方形透かしをもつ。(59)は甕口縁で下方にやや肥厚し、断面三角の突帯を巡らし、波状文を施している。(60)は筒形器台の台部で1条の凸帯の上に波状文を1条巡らし、断面三角の2条の突帯の上にも波状文を施す、口縁端部は下方に肥厚し、外傾する平面を成す。筒形器台の脚部(61)は外下方に緩やかに下り、端部は内外に肥厚し、端面は水平な面を成している。4ヵ所に等間隔に各2条の突線を巡らし、その間に波状文を配し、千鳥状に3段の方形透かしが穿たれる。

(62～64) は西壁側溝の南端で出土しており、SD 10からの出土遺物の可能性をもっている。土師器甕(62)は長胴の体部をもち、くの字状に屈曲する頸部から口縁はやや鋭い端部を作っている。杯蓋 (63・64) は端部が外反し、(63)は水平な凹面を成している。

(65・66) は西壁側溝の北側から出土した。(66)の土師器甕はやや球形の体部をもち、くの字に屈曲し端部は内傾する平面を成している。

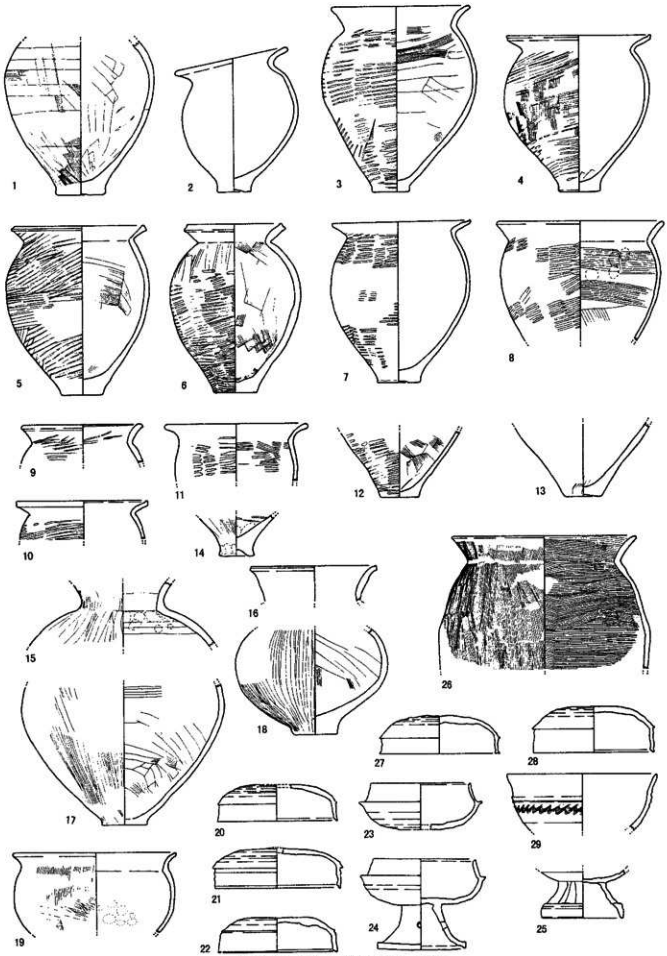
(67～70) はC地区側溝から出土した。羽釜(69)は「く」の字状に鋭く屈曲する口縁をもち、森島氏によってA型式として分類されているもので、12世紀中葉に位置づけられている。

(71～77)は鎌倉時代Ⅰ・Ⅱ遺構面の包含層から出土したもので、土師皿(71, 74) 、杯(72)、須恵器短頸壺(73)、瓦器埦(75)、石錘(76)や石製品(77)が出土している。

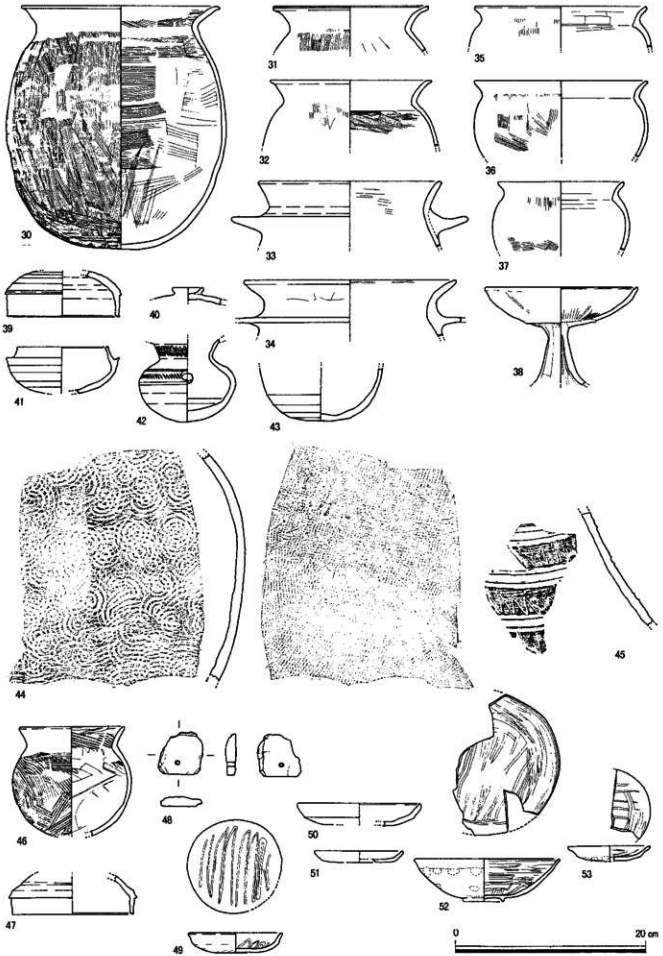
(78～85) は第1次の遺構確認調査の際に第2グリットより出土したものである。(78～81) の土師器小型壺、甕、弥生甕底部、有孔土錘は地表下1.3ｍの溝状遺構から、(82)の須恵器甕はピットから見つかっている。(83～85) は包含層より出土している。

6．まとめ　　小阪合遺跡は、東は旧大和川の主流である玉串川の自然堤防となっており、南は中田遺跡、北西は東郷遺跡、西は成法寺遺跡、南西は矢作遺跡に接している。これらの遺跡は行政区画によって分けられており、とくに今回のように東郷遺跡と成法寺遺跡の接点付近に位置している調査地は小阪合遺跡としてより、近辺の検出遺構との関係によって集落の拡がりを検討すべきである。それ故に、ここでは本調査地と同時期の遺構が検出している調査を概略的に挙げていくことでまとめにかえたいと思う。

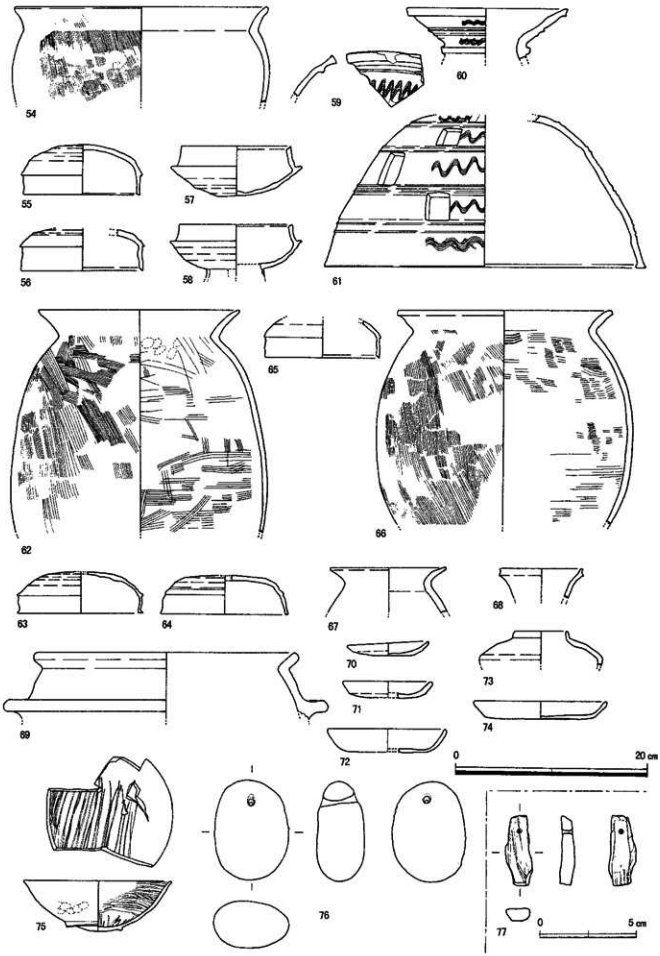
周辺で最も時期的に逆上るものは弥生時代中期（Ⅱ様式）の井戸、溝、落ち込み、ピットで、北東約180ｍの地点で検出されており(A)、土器の他に獣骨、貝殻、植物遺体とともに多量のサヌカイト剥片が出土している。これに続くものに成法寺遺跡で検出された中期（Ⅳ様式）の方形周溝墓(B)がある。これらの時期の遺構は今回は掘削深度の関係（ＴＰ＋6.4～5ｍ）もあり、見つかっていない。後期になると検出例は増加する。とくに顕著な例として、西約110ｍで行われた成法寺遺跡内で行われた調査(C)がある。溝、土坑、ピットが検出されているが、なかでもSD505は検出長4m, 溝幅1m、深さ0.7mで北島池下層式から上田町1・2式とみられる完形遺物が80～90固体出土している。遺物は甕を中心に壺、高杯、手焙り形土器が見つかっているが、溝の性格は判明していない。遺構面は標高7ｍで、当調査地との比



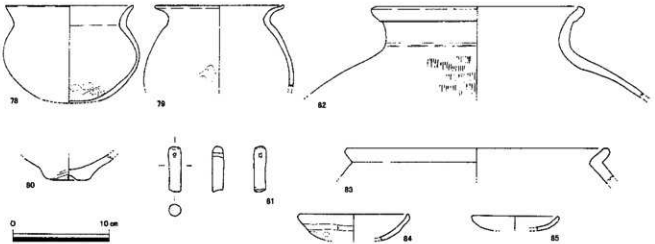

第 22 図　出土遺物実測図（1/4）




第 23 図　出土遺物実測図（1/4）（48 のみ 1/2）




第 24 図　出土遺物実測図（1/4）（77 のみ 1/2）




第25図　出土遺物実測図（1/4）

高差は0.5ｍあり、灰黄褐色系粘土をベースとする等から、SD13とはやや時期差がある。しかし、弥生末期という範疇で考えると連続した遺構面として捉えることができよう。庄内～布留式期になると検出例は爆発的に増加するが、本調査地では検出できなかった。これは上述の成法寺例(C)とも一致する。しかし、この西側で行われた調査(B)では竪穴住居址８棟が見つかっており、弥生後期の居住域西端が限定できる。この時期の特徴的な遺物として河川から出土した横櫛(D)がある。表面に黒漆が施され、最古の横櫛のひとつである。

古墳時代中期では当遺跡から中田遺跡にかけて、さらに東郷遺跡の東南側、成法寺遺跡の東側で検出例が多い。調査地近辺では成法寺例(C)で今回の調査と同時期である TK23 に比定される竪穴住居址が検出され、土坑内より装飾付器台片が出土している。小阪合遺跡内では(G)で TK47 に比定される土坑が見つかっており、中田遺跡に近い地点(E)で住居址の可能性をもつ土坑が検出されており、また(F)〔第区外〕溝内より土師器、韓式土器が出土している。墓域は東端(F)で埴輪円筒棺が出土している。

平安から鎌倉時代にかけては遺跡内のほぼ全域で遺構・遺物が見つかっており、住居に伴うピットや井戸、溝は相当数検出されている。ここでは調査地の東南約60ｍで行われた区画整理に伴う調査(E)とその横で行われた調査(G)をあげておこう。いずれも井戸、土坑、ピットなど住居に関係する遺構が見つかっており、当調査地との関連が考えられる。

以上、概略的に調査地周辺の状況をみてきた。特に弥生後期末と古墳時代中期においては成法寺例(C)でも同時期の遺構が検出されており、その関連性は注目されるところである。ともに弥生後期末の溝では投機された遺物がみつかっており、古墳時代中期では器台という祭祀に伴うとみられる遺物が出土している点は同一遺構面の可能性が考えられよう。また鎌倉時代で本調査では77基のピットや土坑、井戸が見つかっているが、完形の遺物が少なく、時期的にはやや不明瞭ではあるが、井戸の遺物より13世紀前半と考えられ、小阪合遺跡における当時期の集落の拡がりを示すものである。　（渕）

| 番号 | 調査主体 | 文　　献 | 発行 |
|---|---|---|---|
| (A) | 八尾市文化財調査研究会(18 次) | 八尾市文化財調査研究会年報平成元年度 | 1990 |
| (B) | 大阪府教育委員会 | 成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅳ | 1989 |
| (C) | 大阪府教育委員会 | 成法寺遺跡発掘調査概要・Ⅴ | 1990 |
| (D) | 八尾市文化財調査研究会(20 次) | 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ | 1993 |
| (E) | 八尾市文化財調査研究会 | 小阪合遺跡〈８次・10・13次・16次〉 | 1990 |
| (F) | 八尾市文化財調査研究会 | 小阪合遺跡〈昭和59年度　４次〉 | 1989 |
| (G) | 八尾市文化財調査研究会(26 次) | 平成５年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告 | 1993 |

# 出土遺物観察表（1）

| 遺物番号 | 器種<br>部位 | (cm) 口径<br>法量器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層・遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>弥生土器 | 甕<br>体～底部 | <br>残16.0 | 平底をもち、体部最大径は中位以上。外面はタタキ、内面はイタナデ | 暗茶褐色 | 黒雲母、角閃石、石英、他 | 良 | SD－13 | 粘土紐痕跡明瞭 |
| 2<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 12.0<br>15.0 | 突出しているドーナツ状平底をもつ。体部は歪む。口縁ナデ、体部調整は不明。 | 暗橙褐色 | 長石、黒雲母<br>チャート、角閃石 | 良 | 〃 | |
| 3<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 14.6<br>19.3 | 僅かに突出する平底をもつ。外面のタタキは体部から底部におよぶ。内面は体部ハケ口縁内外面はナデ。 | 暗茶褐色 | 黒雲母、角閃石、石英、長石 | 良 | 〃 | |
| 4<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 15.0<br>16.3 | やや突出する平底をもち、体部最大径は中位以上。体部外面はタタキの後ハケ。内面底部はイタナデ、体部はナデ。 | 淡茶褐色 | チャート、石英、金雲母、 | 良 | 〃 | |
| 5<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 14.0<br>17.7 | やや突出する平底をもち、体部最大径は中位以上。口縁端部に面をもつ。外面のタタキは頸部にまでおよぶ。内面ハケ。 | 暗茶褐色 | 長石、石英、金雲母 | 良 | 〃 | |
| 6<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 10.6<br>17.6 | 平底の底部で、体部最大径が中位以上。外面底部から体部にかけてタタキ、肩部はイタナデ。体部内面はハケ。口縁はナデ。 | 乳灰色 | 金雲母、長石石英、角閃石 | 良 | 〃 | 底部に木の葉痕跡 |
| 7<br>弥生土器 | 甕<br>完形 | 14.7<br>16.9 | ドーナツ状の平底から斜め上方にのびる体部をもち、体部最大径は中位以上。外面体部～頸部はタタキ、内面はナデ。 | 淡茶褐色 | 長石、金雲母石英 | 良 | 〃 | |
| 8<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 17.2<br>残12.5 | 体部外面はタタキ。内面はハケ後ナデで、一部に指頭痕が残る。 | 暗褐色 | 金雲母、石英角閃石、長石 | 良 | 〃 | |
| 9<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 12.6<br>残 4.1 | 外面口縁ナデ、体部タタキ。内面イタナデ | 明茶褐色 | 角閃石、石英金雲母 | 良 | 〃 | |
| 10<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 13.6<br>残 4.0 | 体部外面ナデ。口縁部内外面と体部外面はナデ。 | 暗茶褐色 | 長石、石英、金雲母 | 良 | 〃 | |
| 11<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 15.0<br>残 6.0 | 口縁部叩き出し成形。体部外面タタキ、内面はナデ。口縁部は内外面ナデ。 | 暗橙褐色 | 角閃石、チャート金雲母 | 良 | 〃 | |
| 12<br>弥生土器 | 甕<br>体～底部 | <br>残 4.0 | 平底から斜め上方にのびる体部をもつ。外面タタキ。内面ハケ。 | 暗茶褐色 | 金雲母、角閃石、長石 | 良 | 〃 | |
| 13<br>弥生土器 | 甕<br>体～底部 | <br>残 7.7 | 平底から外上方にのびる体部をもつ。外面はハケ、内面は不明。 | 明茶褐色 | 長石、金雲母石英、角閃石 | 良 | 〃 | |
| 14<br>弥生土器 | 甕<br>体～底部 | <br>残 4.3 | 上げ底の底部から、外上方にのびる。底部と内面に指頭痕、外面はハケ。 | 明茶褐色 | 石英、長石、金雲母 | 良 | 〃 | |
| 15<br>弥生土器 | 壺<br>頸～体部 | <br>残 6.9 | 体部外面イタナデ、頸部ハケ。体部から頸部にかけて内面に指頭痕が残る。 | 暗茶褐色 | 金雲母、長石角閃石 | 良 | 〃 | |
| 16<br>弥生土器 | 壺<br>口縁部 | 13.6<br>残 3.7 | 口縁外面はナデ、一部にイタナデ。内面はイタナデ。端部に段を有する。 | 明茶褐色 | 角閃石、チャート金雲母 | 良 | 〃 | |
| 17<br>弥生土器 | 壺<br>体～底部 | <br>残14.7 | やや突出する平底にほぼ球形の体部をもつ外面体部から底部はヘラミガキ。内面はハケ。 | 暗茶褐色 | 長石、角閃石金雲母 | 良 | 〃 | |
| 18<br>弥生土器 | 壺 | <br>残11.0 | 突出する平底からのびる球形の体部をもつ外面ヘラミガキ、内面ナデ。 | 暗茶褐色 | 金雲母、チャート石英 | 良 | 〃 | |
| 19<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 17.0<br>残 8.1 | 口縁内外面ナデ。体部外面不明、内面ナデで、下部に指頭痕。 | 淡橙褐色 | 精良（石英、金雲母） | 良 | SK－3 | |
| 20<br>須恵器 | 杯蓋 | 12.6<br>3.8 | 口縁は下外方に下り、端部は内傾する面を成す。稜はやや鈍い。 | 黒灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 21<br>須恵器 | 杯蓋 | 13.0<br>4.3 | 口縁はほぼ垂直に下った後短く外反し、端部は内傾する面を成す。稜は鈍く下方に沈線が巡る。天井はやや凹状である。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |

# 出土遺物観察表（2）

| 遺物番号<br>図版番号 | 器種 | (cm) 口径<br>法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層・遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 22<br>須恵器 | 杯蓋<br>完形 | 12．3<br>3．7 | 口縁はやや下外方に下り、端部は内傾する平面を成す。稜は鈍く下方に沈線が巡る。 | 灰色 | 精良 | 良 | SK－3 | |
| 23<br>須恵器 | 杯身<br>完形 | 10．4<br>4．9 | 立上がりは内傾してのび端部は内傾する平面を成す。体底部は丸みをもつ。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 24<br>須恵器 | 有蓋高杯<br>完形 | 11．0<br>9．2 | 立上がりはやや内傾してのび、端部は内傾する面を成す。受部は水平に鋭くのびる。脚部は下外方に下り、外端面は垂直な平面を成す。円孔を4方に穿つ。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 25<br>須恵器 | 有蓋高杯<br>脚部 | 残 8．3 | 基部は太く、下外方に下り、外端は内傾する凸状を形成する。三方に台形透かし。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 26<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 19．2<br>残13．9 | 体部から口縁にかけて外面は縦ハケ。内面は横ハケ。 | 淡橙褐色 | 石英、長石 | 良 | SD－9 | |
| 27<br>須恵器 | 杯蓋<br>完形 | 12．6<br>4．3 | 口縁は垂直に下った後外反し、端部は浅い凹面を成す。稜は鋭く天井はやや丸い。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 28<br>須恵器 | 杯蓋<br>完形 | 12．5<br>4．8 | 口縁はほぼ垂直に下り、端部は内傾する凹面をもつ。稜は鋭く、天井は丸みをもつ。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 29<br>須恵器 | 高杯<br>杯部 | 15．5<br>残 5．7 | 内湾しながら外上方にのびた後、短く外反し、口縁端部は丸い。2/3 位に2条の凸線を施し、間に波状文を巡らす。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 30<br>土師器 | 甕<br>完形 | 20．6<br>25．7 | 外面は口縁部はナデ、体部はタテハケ。内面は口縁部～体部はハケ | 橙褐色 | 精良 | 良 | SD－7 | 焼成痕跡 |
| 31<br>土師器 | 甕<br>口～頸部 | 16．4<br>残 4．8 | 口縁内外面はナデ。体部外面はハケ、内面はイタナデ。 | 橙褐色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 32<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 17．0<br>残 6．9 | 口縁内外面はナデ。体部内外面はハケ。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 33<br>土師器 | 長胴甕<br>口～頸部 | 19．2<br>残 6．9 | 口縁外面はイタナデ、鍔ナデ。内面ハケ。 | 暗茶褐色 | 金雲母、長石<br>石英、角閃石 | 良 | 〃 | |
| 34<br>土師器 | 長胴甕<br>口～頸部 | 22．4<br>残 5．9 | 口縁外面はイタナデ、鍔ナデ。内面ハケ。 | 暗橙褐色 | 角閃石、石英<br>長石、金雲母 | 良 | 〃 | |
| 35<br>土師器 | 甕<br>口～頸部 | 18．0<br>残 4．3 | 口縁外面ナデ、体部ハケ。口縁内面イタナデ、体部は剥離のため不明。 | 暗橙褐色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 36<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 18．0<br>残 7．8 | 口縁内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ナデ | 淡橙褐色 | 精良（石英） | 良 | 〃 | |
| 37<br>土師器 | 甕 | 13．2<br>残 7．2 | 口縁内外面はナデ。体部外面はハケ。内面は剥離のため不明。 | 橙褐色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 38<br>土師器 | 高杯<br>杯～脚部 | 16．0<br>残10．3 | 外面はイタナデ、内面受部～口縁部はヘラミガキで放射線状に暗文を施す。脚部内面はシボリメで指頭痕を残す。 | 淡橙褐色 | 精良（石英、チャート） | 良 | 〃 | |
| 39<br>須恵器 | 杯蓋 | 10．6<br>残 4．7 | 口縁は垂直に下った後短く外反し、端部は内傾する浅い凹面を成す。稜は短い。 | 明灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 40<br>須恵器 | 杯蓋 | 残 1．8 | 上面凹状の低いつまみがつく。 | 明灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 41<br>須恵器 | 杯身 | 9．5<br>残 4．9 | 立上がりは内傾してのび、端部は浅い凹面を成す。受部は鋭く外上方にのびる。 | 明灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 42<br>須恵器 | 壺<br>頸～体部 | 残 8．7 | 体部は偏球部を呈し、底部はやや尖り気味で、頸部に波状文、体部に列点文を施す。 | 青灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 43<br>須恵器 | 壺<br>底部 | 残 5．5 | やや丸い底部から体部にいたる。外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ。 | 明灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |

# 出土遺物観察表（3）

| 遺物番号<br>図版番号 | 器種<br>部位 | (cm) 口径<br>法量器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層・遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 44<br>須恵器 | 甕<br>体部 | <br>残２３．６ | 外面はタタキ、ハケ。内面は同心円文。 | 明灰色 | 精良 | 良 | ＳＤ－７ | |
| 45<br>須恵器 | 器台<br>脚部 | <br>残１３．４ | ２条の突帯を巡らし、その間に１条の波状文を施す。三角形の透かしは上下で交互に配する。 | 暗青灰色 | 精良 | 良 | ＳＤ－９ | |
| 46<br>土師器 | 壺<br>口～体部 | １１．０<br>残１１．４ | 球形の体部から上方にのびる口縁をもつ。口縁外面ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ハケおよびイタナデ | 暗橙褐色 | 精良 | 良 | ＳＰ－７７ | |
| 47<br>須恵器 | 杯蓋 | １２．６<br>残　４．１ | 口縁は垂直に下った後外反し、端部は内傾する浅い凹面を成す。稜はやや鈍い。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 48<br>石製品 | 玉未製品<br>滑石 | 縦　２．２<br>横　２．２ | 平たい石に１穴を穿つ。 | 暗緑色 | 産地－和歌山県喜志川、兵庫県養父町 | | ＳＰ－７１ | |
| 49<br>瓦器 | 皿<br>完形 | １０．０<br>２．１ | 口縁部内外面ナデ。外面底部に指頭痕跡。 | 暗灰色 | 精良 | 良 | 南壁　井戸 | |
| 50<br>土師器 | 皿<br>口～体部 | １３．０<br>２．３ | 手づくね。１段ナデ。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | ＳＰ－３３ | |
| 51<br>土師器 | 皿<br>口～体部 | ９．３<br>１．２ | 手づくね。内面は布状品を使用したナデ痕跡。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | ＳＫ－２ | |
| 52<br>瓦器 | 椀<br>口～体部 | １５．２<br>４．５ | 外面上部に僅かにミガキ、下半部に指頭痕跡。見込みは平行線状暗文。 | 黒灰色 | 精良 | 良 | ＳＰ－１１ | |
| 53<br>瓦器 | 皿<br>口～体部 | ８．６<br>１．６ | 底部外面に指頭痕。１段ナデ。内面に平行線状暗文。 | 黒灰色 | 精良 | 良 | ＳＫ－１ | |
| 54<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | ２６．４<br>残１０．０ | 口縁外面ハケ、内面ナデ。体部外面縦ハケ内面不明。 | 乳褐色 | 石英、長石、金雲母 | 良 | C地区<br>暗褐黄灰色微砂質土 | |
| 55<br>須恵器 | 杯蓋<br>完形 | １２．０<br>５．２ | 口縁は垂直に下った後短く外反し、端部は内傾する浅い凹面を成す。稜は鋭く、天井部は高く丸い。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 56<br>須恵器 | 杯蓋 | １２．６<br>残　４．３ | 口縁はほぼ垂直に下り、端部は内傾する段を成す。稜は鋭い。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 57<br>須恵器 | 杯身 | １１．６<br>５．３ | 立上がりはやや内傾してのび、端部は内傾する面を成す。受部は丸く、外上方にのびる。体底部はやや浅く、丸みをもつ。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 58<br>須恵器 | 有蓋高杯<br>杯～脚部 | １１．８<br>残　６．７ | 立上がりは内傾したのち直立し、端部は内傾する凹面を成す。受部は鋭くほぼ水平にのびる。底体部はやや浅く丸みをもつ。脚基部は細い。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 59<br>須恵器 | 甕<br>口縁部 | <br>残　５．５ | 端部は上下に短く肥厚し、外端面は垂直な面を成す。 | 灰白色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 60<br>須恵器 | 筒形器台<br>杯部 | １６．８<br>残　５．４ | １条の突帯から口縁は外上方にのび、端部は下方に肥厚し、外端面は外傾寸平面を成す。口縁約 1/2 に２条の凸線を巡らす。 | 灰緑色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 61<br>須恵器 | 筒形器台<br>脚部 | 底径 33.6<br>残１５．９ | 上部から外下方に内湾しながら下る。端部は内に肥厚し、平面を成す。２条の凸線を４条巡らし、その間に波状文を施す。透かしは方形で、上下の段で千鳥状に配する。 | 灰白色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 62<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | ２０．０<br>残２３．５ | 長胴の体部から頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁内外面ナデ。体部縦ハケ。 | 淡灰褐色 | チャート、長石、黒雲母、 | | C地区　西壁南側 | |
| 63<br>須恵器 | 杯蓋 | １２．８<br>４．４ | 口縁は内傾して下った後外反し、端部は水平な凹面を成す。稜は鈍く、天井は高く丸みをもつ。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |

# 出土遺物観察表 (4)

| 遺物番号 | 器種 | (cm) 口径<br>法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 出土層・遺構 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 64<br>須恵器 | 杯蓋 | 13.4<br>4.0 | 口縁は下外方に下った後短く外反し、端部は浅い凹面を成す。稜は丸く下方に浅い沈線を巡らす。天井は平らに近い。 | 明灰色 | 精良 | 良 | C地区 西壁南側 | |
| 65<br>須恵器 | 杯蓋 | 12.0<br>残 3.9 | 口縁はほぼ垂直に下り、端部は内傾する平面を成す。稜は鋭い。 | 灰色 | 精良 | 良 | C地区西側北溝 | |
| 66<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 22.6<br>残22.3 | 口縁内外面ナデ。体部縦ハケ。内面横ハケ口縁端部は内傾する面をもつ。 | 明茶褐色 | 石英、金雲母<br>長石 | 良 | 〃 | |
| 67<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 12.2<br>残 4.7 | 体部外面の調整は不明。口縁内面イタナデ、体部ナデ。 | 暗茶褐色 | 石英、角閃石<br>黒雲母、長石 | 良 | C地区南側溝 | |
| 68<br>須恵器 | 壺 | 8.5 | 口縁は外上方にのびて外反し、端部は外傾する平面を成す。 | 灰白色 | 精良 | 良 | 暗茶褐色小礫混粘砂 | |
| 69<br>土師器 | 羽釜 | 27.6<br>残 7.0 | 水平にのびる短い鍔、「く」の字状に屈曲する口縁をもつ。 | 淡茶褐色 | 石英、長石、<br>チャート | 良 | C地区西側溝 | |
| 70<br>土師器 | 皿 | 8.5<br>1.5 | 手づくね。底部にヘラ起こし痕。1段ナデ | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | C地区側溝 | |
| 71<br>土師器 | 皿 | 9.4<br>1.7 | 手づくね。1段ナデ。 | 淡茶褐色 | 精良（金雲母） | 良 | 淡黄灰色砂質土 | |
| 72<br>土師器 | 杯 | 12.6<br>4.6 | 手づくね。内外面ナデ。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 73<br>須恵器 | 短頸壺<br>口～体部 | 5.4<br>残 3.6 | 口縁部は短く垂直してのび、端部は丸い。肩部は下外方に へ張り出す。 | 灰色 | 精良 | 良 | 〃 | |
| 74<br>土師器 | 皿 | 14.0<br>2.0 | 手づくね。布状品を使用した痕跡。2段ナデ。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | C地区 明灰茶色粘砂 | |
| 75<br>瓦器 | 椀 | 15.4<br>5.3 | 外面に指頭痕が顕著に残る。見込みは平行線状暗文。底部は高台部より突出する。 | 黒灰色 | 精良 | 良 | 淡黄灰色砂質土 | |
| 76<br>石製品 | 石鍾<br>玄武岩 | 縦10.6<br>横 7.7 | 長円形の石の端部に1孔を穿つ。 | 灰白色 | 産地－山陰地方 | | 暗茶褐色小礫混粘砂 | |
| 77<br>石製品 | 玉未製品<br>滑石 | 縦 2.7<br>横 1.5 | 長円形気味の石に1孔を穿つ。 | 暗緑色 | 産地－和歌山県喜志川、兵庫県養父町 | | 暗茶褐色小礫混粘砂 | |
| 78<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 13.3<br>残10.0 | 算盤玉形の体部から口縁は上外方にのび、端部は丸い。内面イタナデ、底部は指頭痕 | 橙褐色 | 精良 | 良 | 遺構<br>第2調査区 | 遺構確認調査 |
| 79<br>土師器 | 甕<br>口～体部 | 13.6<br>残 8.6 | 下膨れの体部から口縁は外湾して上外方にのびる。体部外面はナデで一部イタナデ。 | 明茶褐色 | 精良 | 良 | 遺構<br>第2調査区 | 〃 |
| 80<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径 4.7<br>残 2.3 | 上げ底の底部で、外面にイタナデが残る。 | 淡橙褐色 | 精良 | 良 | 遺構<br>第2調査区 | 〃 |
| 81<br>土師器 | 有孔土鍾 | 縦 4.7<br>横 1.3 | ナデ成形。1孔を穿つ。 | 淡茶褐色 | 精良 | 良 | 遺構<br>第2調査区 | 〃 |
| 82<br>須恵器 | 甕<br>口～頸部 | 22.4<br>残 9.6 | 体部から短く直立した後外上方にひらく。端部は外方に肥厚して断面長方形を呈し、上端面は内傾する平面を成し、内方にゆるい稜を有す。 | 灰褐色 | 精良 | 良 | ピット<br>第2調査区 | 〃 |
| 83<br>土師器 | 羽釜<br>口縁部 | 27.5<br>残4.0 | 「く」の字状に屈曲する口縁部 | 淡茶褐色 | | 良 | 暗灰色粘質土<br>第2調査区 | 〃 |
| 84<br>土師器 | 杯 | 14.3<br>残 2.8 | 外面底部に指頭痕。口縁部ナデ。 | 淡茶褐色 | 精良（金雲母） | 良 | 暗灰色粘質土<br>第2調査区 | 〃 |
| 85<br>土師器 | 皿 | 9.2<br>残 1.5 | 手づくね。ナデ。 | 淡灰褐色 | | 良 | 暗灰色粘質土<br>第2調査区 | 〃 |

# 4．小阪合遺跡（９５－４５８）の調査

1．調査地　　八尾市南小阪合１丁目21

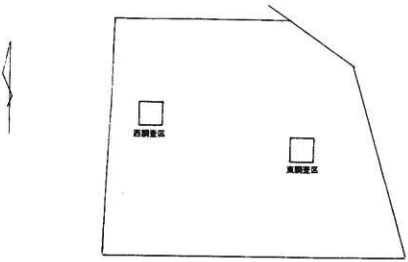
2．調査日　　平成７年11月21日

3．調査方法　　施工予定地の東と西と中央に2.5ｍ四方の調査区を設定し、地表下点2.5～2.7ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削を行った。

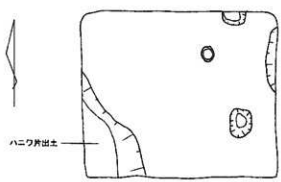
4．調査概要　　東側調査区では地表下1.7ｍ前後の茶灰色粘砂層上面で瓦器片、土師器片などを含むピット等を検出した。また、調査区の狭小で平面において確認できず、断面確認となってしまったが茶灰色粘砂層上面より切り込む曲物井戸を検出した。この井戸は径0.25ｍ前後、深さ0.9前後を測り、埋土は暗灰色～灰色粘土層である。埋土内より平安時代前後の土器片が出土した。さらに地表下1.9ｍ前後の褐灰色砂質土層上面で、埴輪片のみを含み、褐色砂質土・褐色斑灰色粘砂層を埋土とする遺構を検出した。埴輪片は川西編年のⅣ期に位置付けられるものである。この遺構は調査区の南西壁にかかる状況であったため性格は不明であるが、確認した範囲では埴輪片のみを含むものであることから、古墳時代中期後半の遺構である可能性が高い。西調査区では地表下1.7ｍで東調査区の褐灰色砂質土層と対応する可能性のある褐灰色微砂質粘砂層を確認した。付近の調査においても古墳時代の埴輪棺等が出土しており、今回検出した古墳時代の遺構面はこれと密な関係をもつものであろう。

（吉田）

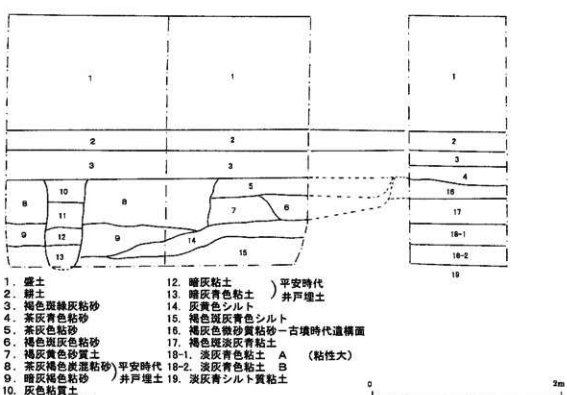
第26図　調査地周辺図（1/5000）




第 27 図　調査区設定図




第 28 図　調査区平面図(1/40)




1．盛土
2．耕土
3．褐色斑緑灰粘砂
4．茶灰青色粘砂
5．茶灰色粘砂
6．褐色斑灰色粘砂
7．褐灰黄色砂質土
8．茶灰褐色炭混粘砂　平安時代
9．暗灰褐色粘砂　井戸埋土
10．灰色粘質土
11．暗茶灰色粘質土
12．暗灰粘土　平安時代
13．暗灰青色粘土　井戸埋土
14．灰黄色シルト
15．褐色斑灰青色シルト
16．褐灰色砂質粘砂ー古墳時代遺構面
17．褐色斑淡灰青粘土
18-1．淡灰青色粘土　A　（粘性大）
18-2．淡灰青色粘土　B
19．淡灰青シルト質粘土

第 29 図　調査区土層断面図（1/40）

# 5．佐堂遺跡（９３－５３４）の調査

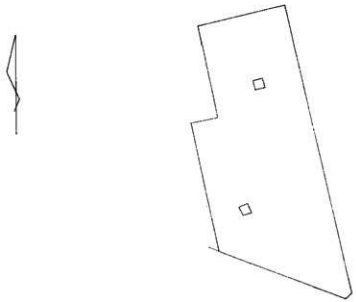
1．調査地　八尾市佐堂１丁目50－１～７

2．調査期間　平成７年３月１日

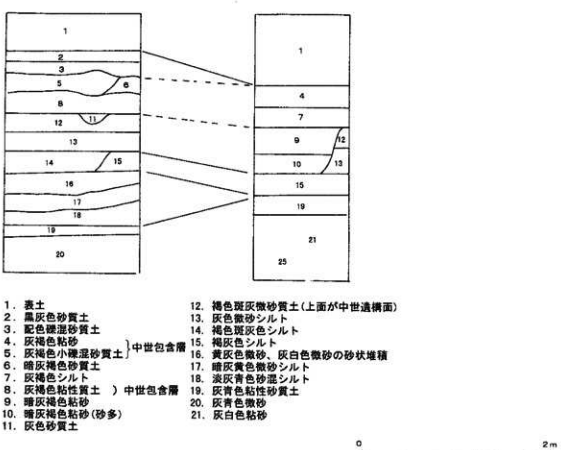
3．調査方法　施工予定地の北と南に２m四方の調査区を２ヶ所設定し、地表下2.8m前後まで重機と人力を併用して掘削を行った。

4．調査概要　北側調査区では地表下0.75～1.2m前後で土師器片・瓦器片を含む灰褐色粘砂層を確認した。さらにその下の面で遺構状の切り込みを確認した。この下では地表下2.8mまで確認したが、地表下2.1m以下で灰白色粗砂層を確認するに留まった。南側調査区では地表下0.6～1.0m前後で土師器片・瓦器片を含む灰褐色粘性砂質土層を確認した。さらにこの直下でピット状の遺構の切り込む褐色斑灰色微砂質土を検出した。これは北調査区の鎌倉時代の遺構面に対応するものと思われる。さらにその下の地表下1.4mの褐灰色シルト層上面にも遺構状の切り込みがみられた。南調査区では地表下2.7m前後まで確認したが、地表下2.1m以下で灰青色微砂層を確認するに留まった。本調査地では鎌倉時代頃の遺構面が複数面存在する可能性が高い　（吉田）

第30図　調査地周辺図（１／5000）



第31図　調査区設定図




1．表土
2．黒灰色砂質土
3．配色礫混砂質土
4．灰褐色粘砂
5．灰褐色小礫混砂質土　}中世包含層
6．暗灰褐色砂質土
7．灰褐色シルト
8．灰褐色粘性質土　）中世包含層
9．暗灰褐色粘砂
10．暗灰褐色粘砂(砂多)
11．灰色砂質土
12．褐色斑灰微砂質土(上面が中世遺構面)
13．灰色微砂シルト
14．褐色斑灰色シルト
15．褐灰色シルト
16．黄灰色微砂、灰白色微砂の砂状堆積
17．暗灰黄色微砂シルト
18．淡灰青色砂混シルト
19．灰青色粘性砂質土
20．灰青色微砂
21．灰白色粘砂

第32図　調査区土層断面図（1/40）

# 6．高安古墳群（９４－７６７）の調査

1．調査地　　山畑 134

2．調査期間　　平成７年４月 18 日・５月 11 日

3．調査方法　　当初切土を行うガレージ建築部分に 2.5 m×2.5 mの調査区を設定し、地表下２mまで重機と人力を用いて掘削した。この結果中世以降の遺物包含層を確認した。また包含層検出深度直上まで地盤改良を行うため作業中に立会いを行い土層の観察を行った。なお最初の調査を第１区とし、立会い部分を第２区として記述する。

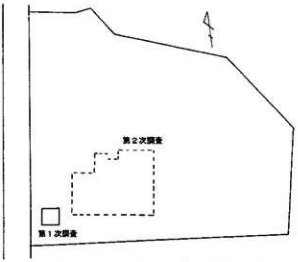
4．調査概要　　調査地は高安山の傾斜地に開かれた住宅地であり、第１区は谷側に、第２区は山手に位置している。

第１区は道路に面しており、道路面より 1.5 mの比高差があり、地表下約 0.4～0.8 mまでは盛土がされていた。遺物の出土は地表下 1.5 mの灰色粘砂から確認されるが、1.8 mの灰茶色砂混粘砂と灰茶色粘砂で顕著であった。しかし、遺物は土師器・瓦器・須恵器・埴輪などの中世以降の包含層で明確な時期は決められず、また遺構面を検出することはできなかった。

第２区では現地表下 0.95 mの淡茶灰色粘砂に土師器が含まれており、地表下 1.3 mの淡茶灰色礫混微砂質土上面で土師皿が完形で見つかっている。また淡灰茶色粘砂を埋土とする深さ約 0.17 mの土坑状の落ち込みが確認できたことから中世以降の遺構面となる可能性がある。ただし谷側に近い部分では地表下 1.5 m前後で第１区と同様に瓦器などの細片がみられた。

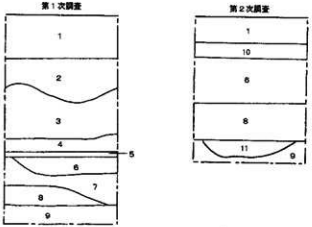
5．出土遺物　　遺物は埴輪片や瓦器といった古墳時代から中世にいたるものが出土しているが、細片が多く図示できたものは第１区灰茶色砂混粘砂出土の１～９である。

第 33 図　調査地周辺図（1/5000）




第34図　調査区設定図（1/600）

１・２は土師器杯である。１は口径19.6㎝・器高3.6㎝で、外面にヘラミガキ、内面に放射線状のミガキを施す。２は口径16㎝・器高3.8㎝調整は不明。３・４は須恵器杯で、３は口径16㎝・器高４㎝。高台端部は内傾する浅い凹面を成す。４は底部から内湾気味にのびる体部をもつ杯で、底部は回転ヘラ削りを行っている。５の甕口縁の端部は内傾する平坦面をつくる。６・７は小型土師皿。８は瓦器塊で高台部分は僅かに残存しているものである。

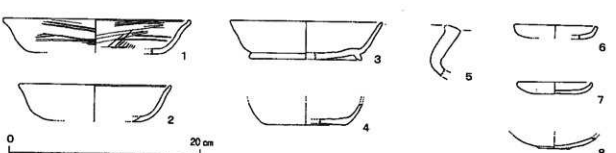



第35図　基本層序摸式図（1/40）

６．備考

今回は明確な遺構面は検出できなかったが８世紀中葉の土師器杯の出土から付近に同時代の人為的な施設があったことが伺われる。また瓦器塊を含む包含層からみて13世紀中頃以降に耕作あるいは居住に伴うなう整地を行ったことが推測される。

（濱）




第36図　出土遺物実測図（1/4）

# 7．竹渕遺跡（９５－３８）の調査

1．調査地　八尾市竹渕１丁目223－１、224－１、225－１、226－１

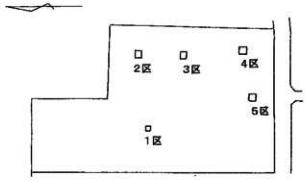
2．調査期間　平成７年４月25～26日

3．調査方法　施工予定地内に２～３m四方の調査区を５ヶ所設定し、重機と人力を併用して掘削を行った

4．調査概要　西側に設定した第１～第３調査区では、地表下2.8～3.3mまで確認したが旧平野川の氾濫によるものと思われる黄灰色～灰色の砂層を確認したのみで、遺構面は確認できなかった。東側の第４・第５調査区では土層の様相は全く異なり、河川による堆積とみられる砂層は確認できなかった。第４調査区では地表下3.2～3.6mの白色斑黒灰色粘土層で古墳時代前期の土器を多数確認した。さらにその西側の第５調査区においても地表下3.5～3.8mで同層を確認した。この層の下には第４調査区では灰緑色シルト層が、第５調査区では灰緑色粘土が堆積し、これが古墳時代の遺構面となる可能性があるが、この面は東側の第４調査区の方が高い。このことから、古墳などたかまりをもつ遺構の存在する可能性がある。当調査地の南に隣接する調査地においても古墳時代前期の土器を密に含む層が確認されており、本調査成果と密な関係をもつものであろう。また、今回の調査においては、旧平野川の氾濫の南限の１点を確認することができ、この意味でも意義深い。

（吉田）

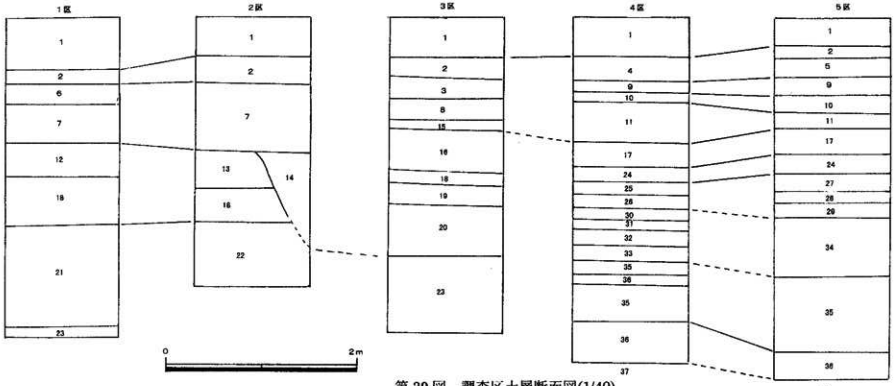
第37図　調査地周辺図（１／5000）




1．盛土
2．茶灰色砂質土
3．明灰茶色シルト
4．茶灰青色粘砂
5．灰緑色粘性砂
6．明灰茶色砂質土
7．明灰茶色微砂
8．明灰茶色砂質シルト
9．茶黄灰色粘砂
10．明茶灰色粘砂
11．茶灰色粘砂
12．茶灰褐色シルト
13．茶灰色砂質土
14．灰茶色粘砂
15．明灰茶色粘質土
16．灰茶色シルト
17．茶灰色粘性シルト
18．明灰黄褐色シルト
19．褐色斑灰白色粘土
20．灰青シルトと褐色粗砂の互層
21．黄灰色粗砂（互層）
22．褐灰色粗砂と灰色粘砂の互層
23．灰白色粗砂
24．茶灰色粘質土
25．茶灰色シルト
26．黄灰色シルト
27．茶褐色斑灰色粘土
28．茶褐色斑灰青色粘土
29．灰青色粘砂
30．灰緑青色シルト
31．灰緑微砂
32．灰白微砂
33．灰緑色シルト
34．暗灰青色シルト
35．白色斑暗灰色有機物混粘土
36．白色斑黒灰色粘土
37．灰緑色シルト
38．灰緑色粘土

古墳時代
前期包含層

第 38 図　調査区設定図




第 39 図　調査区土層断面図(1/40)

# 8．竹渕遺跡（９５－１７９）の調査

１．調査地　　竹渕４丁目３３－１の一部

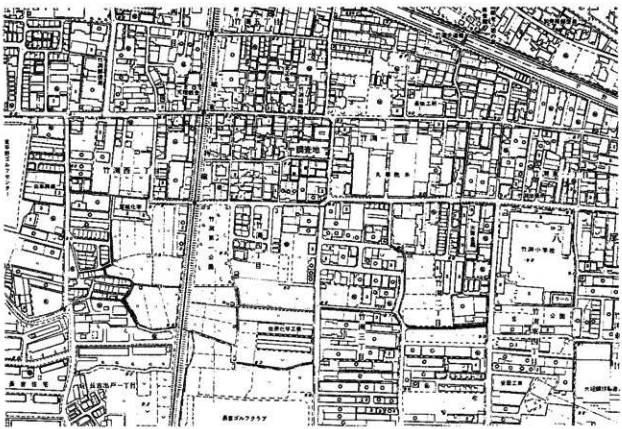
２．調査期間　　平成７年８月 18 日

３．調査方法　　遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地内の東西に、３×３ｍの調査区を２箇所設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影・実測等を行うことにした。

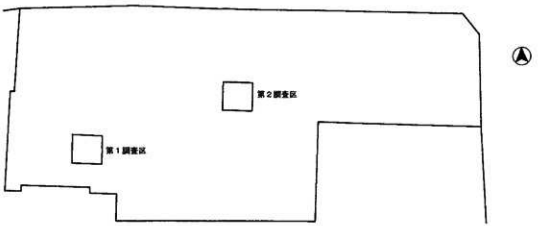
４．調査概要　　西側の第１調査区では、耕土以下地表下 2.7ｍまでに砂質土からシルト、砂、粘土が堆積しており地表下 2.7ｍ以下約 30cm の厚みで堆積する黒灰色砂質粘土から、古墳時代中期～後期の須恵器片、土師器片、製塩土器、韓式系土器（甑底部片か）等を含む包含層を検出した。

東側の第２調査区でも、西側とほぼ同様の堆積状況を示していたが、地表下 2.5ｍで、包含層（黒灰色砂質粘土）を検出し、須恵器片、土師器片、製塩土器等古墳時代の遺物の包含状況を確認した。包含層の厚みは 40cm であろうと思われ、包含層を抜いた地表下３ｍ以下には、灰色細砂層を検出している。

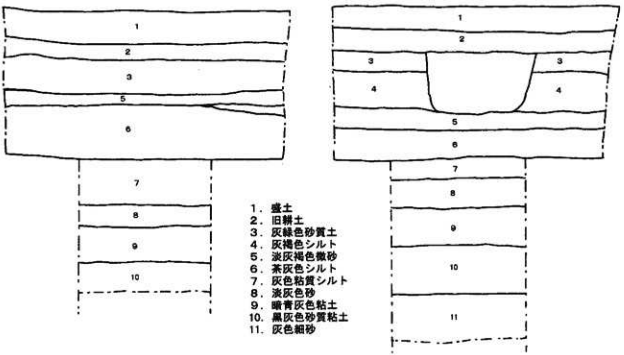
５．調査結果　　敷地東西で確認した包含層は５世紀～６世紀のもので、層位、深さも対応することから敷地全体にわたり何らかの遺構の存在する可能性が考えられる。また、付近の調査でも４世紀代の古墳時代の遺構が存在するのを確認しており、当調査地で確認した包含層もこれらに後続する遺構が存在するものと想定され、事業の実施にあたっては遺構の状況の確認が必要である。　　（米田）



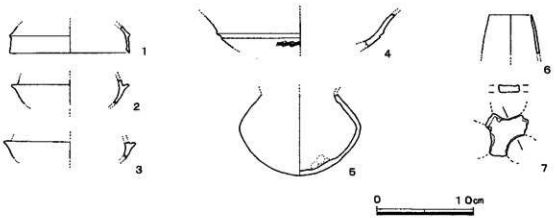

第 40 図　調査地周辺図




第 41 図　調査区設定図(1/400)




第 42 図　土層断面図(1/40)




第 43 図　遺物実測図

# 9．東郷遺跡（94－727）の調査

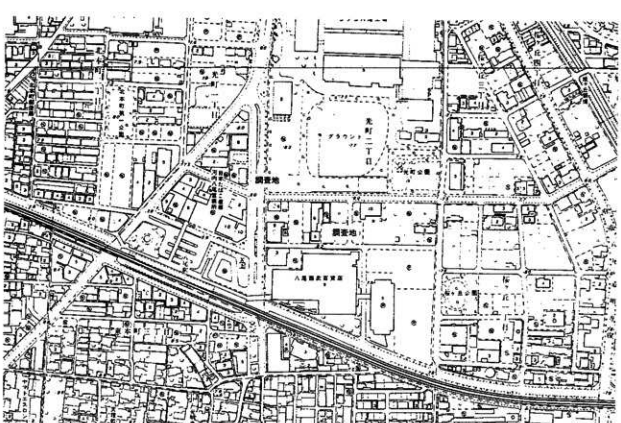
1．調査地　　八尾市光町20、22番地

2．調査期間　　平成7年3月13日

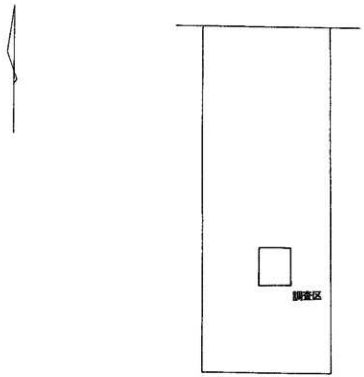
3．調査方法　　施工予定地の中央に2.5ｍ四方の調査区を1ヶ所設定し、地表下3.0ｍまで重機と人力を併用して掘削を行った。

4．調査概要　　地表下2.1ｍ前後の灰褐色シルト層上面で、溝の肩部かと思われる遺構を検出した。この遺構の埋土は上層が茶褐色斑灰色粘砂層、下層が暗灰色炭混シルト質粘砂層である。埋土からは古墳時代前期の土師器片が出土した。この溝の肩部と思われる遺構は北西から南東方向に続いている。これより下はシルト層の堆積が続き、地表下2.8ｍ以下で灰白色粗砂層の堆積がみられたが、遺構・遺物は確認できなかった。今回検出した古墳時代前期の遺構は、近隣の調査で確認されている古墳時代前期の集落を構成する遺構群と密な関係をもつものであり、重要である。

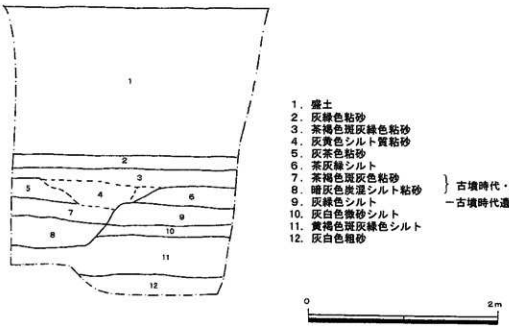
（吉田）




第44図　調査地周辺図（1/5000）




第 45 図　調査区設定図




第 46 図　調査区土層断面図（1/40）

# １０．東郷遺跡（９５－５０９）の調査

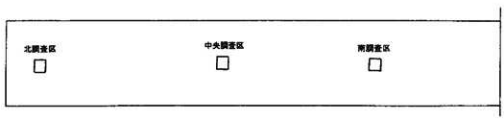
１．調査地　　八尾市荘内町１丁目36－１・37

２．調査期間　　平成７年11月27日

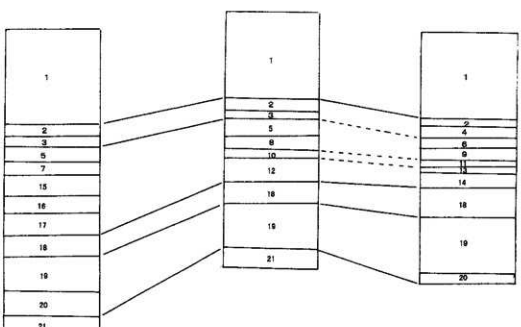
３．調査方法　　施工予定地の北と南と中央に２ｍ四方の調査区を３ヶ所設定し、地表下2.6～3.0ｍ前後まで重機と人力を併用して掘削を行った。

４．調査概要　　北側調査区では地表下3.0ｍ前後まで確認したが、シルト・粘砂層の堆積を確認したのみで、遺構・遺物は認められなかった。中央調査区では地表下1.55～1.8ｍで紫褐色炭混粘砂層を確認した。また、この層には庄内式土器小片が多く含まれていた。南調査区では地表下1.44ｍの灰紫褐色粘砂層上面で溝状の遺構を確認したが、埋土内には遺物は含まれていなかった。中央調査区で検出した庄内式土器小片を含む層は遺構の埋土である可能性があり、本調査地では南側を中心に地表下1.5ｍ前後に庄内期の遺構面の存在する可能性が高い。下層においては北側調査区では地表下3.0ｍ以下で、中央調査区では地表下2.4ｍ以下で、南側調査区では地表下2.6ｍ以下で灰青色粗砂層を確認するに留まった。　　（吉田）

第47図　調査地周辺図（１／5000）




第 48 図　調査区設定図（1/800）



1．灰黄色砂質土
2．暗灰色粘砂
3．暗青灰色粘砂
4．緑灰色粘砂
5．灰茶色粘砂
6．灰茶色粘質土
7．青灰色粘砂
8．褐灰色砂混粘砂
9．褐灰色粘性砂質土
10．褐灰色粘砂
11．褐灰色粘土
12．灰黒褐色炭混粘砂（古墳時代前期包含層）
13．灰紫褐色粘砂
14．褐灰茶色粘砂
15．灰茶色シルト質粘砂
16．黄褐色粘性シルト
17．灰白褐色微砂混粘土
18．灰白褐色粘土
19．淡灰緑色粘土
20．淡灰緑色シルト
21．灰青色細砂

第 49 図　調査区設定図（1/40）

# １１．東郷廃寺（９４－７３０）の調査

１．調査地　　桜ヶ丘２丁目206，207

２．調査期間　　平成７年３月23・24日

３．調査方法　　店舗建築に伴う調査で約２×２ｍの調査区を５ヵ所設定した。なお事業計画地の南隣に東郷廃寺跡として平成３年度に調査を行っており、遺跡の範囲を確認するため一部地表下1.5～2.5ｍまで掘削を実施した。

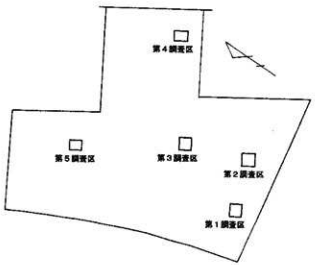
４．調査概要　　第１調査区－地表下1.2ｍの暗茶灰色砂質土から遺物はみられるが、瓦器片等も含まれており中世以降の遺物層である。７～８世紀の包含層は地表下1.4ｍ前後の褐灰色粘質土であり、土師器・須恵器に混じって綾杉叩きの平瓦が出土している。そして下部層である淡黄灰色粘砂上面（TP＋6.64 m)がベースとなってピト４基（ＳＰ１～４）と土坑２基（ＳＫ１・２）と溝（ＳＤ１）を検出した。

以下、検出遺構を表１にまとめた。（ＳＫ１とＳＤ１は検出長）

| 遺　構 | 埋　　土 | 長径×短径×深さcm | 出土遺物 |
|---|---|---|---|
| ＳＰ１ | 暗灰黄色粘質土 | 32×26×８ | 土師器甕片 |
| ＳＰ２ | 暗灰黄色粘質土 | 40×35×５ | 丸瓦、土師器杯 |
| ＳＰ３ | 暗淡灰色粘砂 | 42×22×９ | ――― |
| ＳＰ４ | 暗淡灰色粘砂 | 48×22×12 | ――― |
| ＳＫ１ | 暗淡灰色粘砂 | 112×86×10 | 土師器杯底部・口縁、丸瓦 |
| ＳＫ２ | 淡灰黒色粘質土 | 77×48×15 | 土師器杯口縁、甕、平瓦 |
| ＳＤ１ | 暗灰色粘質土 | 115×58×９ | 土師器杯底部・口縁、平瓦 |

第１表　第１調査区検出遺構

第50図　調査地周辺図（1/5000）




第51図　調査区設定図(1/800)

第2調査区－地表下1.7mの褐灰色粘質土が7～8世紀の包含層であり、多くの瓦・土器片が出土している。しかし、この下部層である地表下1.85mの暗黄灰茶色粘質土上面では遺構は検出されなかったが、またこの層は古墳時代の包含層となっており、多くの土師器片が出土している。そして地表下2.05mの淡茶灰色粘砂上面(TP+6.12m)で土坑（ＳＫ３）を検出した。土坑は淡灰茶色粘質土を埋土とし、検出長1.05m×短径0.67m×深さ0.18mを測り、布留甕が出土している。

第3調査区－第2区と5区との間に設定した調査区である。地表下1.5mで包含層を確認できる。下部の12層では遺構は見られなかったが、地表下1.75m前後の13層上面で土坑（ＳＫ４）を検出した。深さ11cmの不定形の遺構で、埋土である暗灰色炭混粘質土に製塩土器、須恵器、土師器片を含み、古墳時代中期の遺構面と推定される。

第4調査区－事業計画地の北端に設定した調査区である。いずれの層でも遺構・遺物が検出されなかったが、地表下1.95mで第1調査区で検出した遺構面を確認した。遺物、遺構を見いだせなかったため、寺域から外れることも想定できる。

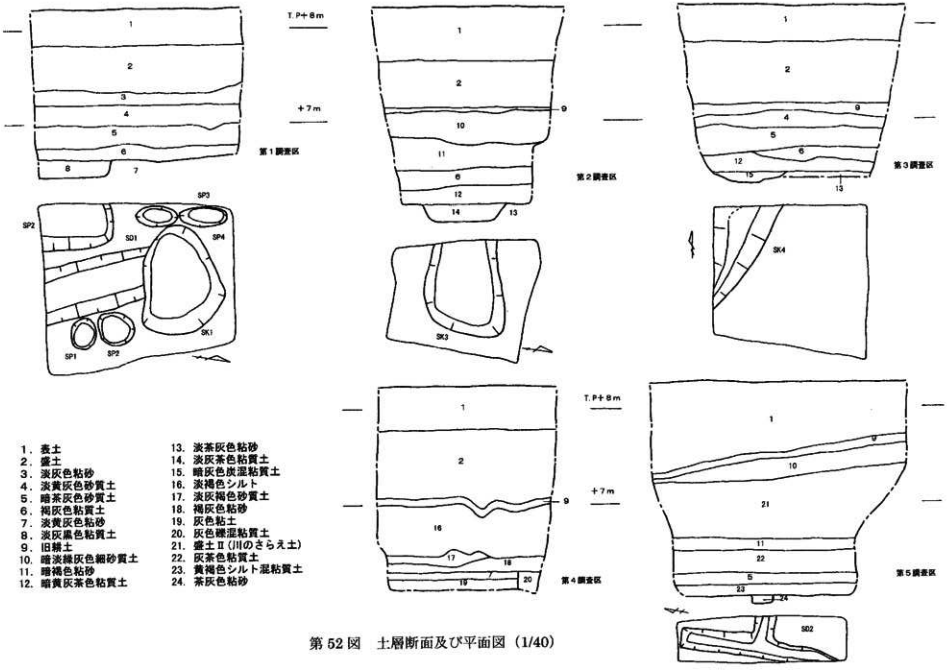
第5調査区－最も東寄りであり、かつ現状の楠根川に近い位置に設定した調査区である。地表下1.65m前後まで盛土であり、特に1m以下の盛土層Ⅱは川のさらえ土が入れられている。地表下2m付近から土師器片が若干確認でき、地表下2.2mで溝状遺構が検出できた。溝は深さ9～15cmで、茶灰色粘砂を埋土するが遺物は出土していないため、時期は不明。

6．出土遺物

遺物はいずれも砕片が多く土器では次の17点を挙げておく。(1～9)は第1調査区、(10～13)は第2調査区、(14～17)は第3調査区から出土したものである。

(1)はＳＰ２出土の土師器杯で口径14.2cm、器高3.3cm。やや丸みを帯びた平底をもち、ナデ調整を行う。(2)はＳＰ４出土の土師器杯で、全体に剥離が著しいが外面下部に僅かにハケ痕が残り、内面はナデ調整。口径13cm・器高3.7cm。(3)はＳＫ１出土の土師器甕でやや垂直に立ち上がった体部から大きく外反する頸部を成す。調整は不明。(4・5)はＳＫ２出土の土師器で、(4)は口径13.6cm・器高2.4cmの皿で、内外面はナデ調整を行う。(5)高杯脚部で内面にシボリメを残す。(6)はＳＤ１出土の土師器杯で口径17.2cm・器高3.2cm。口縁端部は巻き込んでおり、内面に沈線が巡る。また内面に放射線状ミガキを施す。(7～9)は6層出土の須恵器で、(7・8)は壺底部で体部は回転ナデ、高台部はヘラケズリを残し、高台端部は水平な凹面を成す。(9)は杯底部とみられ、高台端部は水平な面を成す。

(10～13)は6層出土遺物である。(10)は土師器甕で口径18cm、強いナデ調整により、体部と頸部の段を有する。内面にイタナデが残る。(11)は土師質釜で口径23cm、内面は不明だが外面ナデ調整を行う。色調は暗茶褐色を呈す。砲弾形の体部をもつとみられる。(12)は須恵器杯で、底部は平底で回転ヘラケズリを行う。体部は




第52図　土層断面及び平面図（1/40）

回転ナデ。(13)須恵器壺の体部は回転ナデ調整を行う。

(14,15) はＳＫ５出土。(14)は土師器高杯の体底部で外面にハケを行う。(15)は須恵器無蓋高杯の体～口縁部で、口径 16 ㎝。２条の凸線を巡らし、その下部に波状文を施す。(16～18)は６層出土。(16)は土師器甕で体部から短く外反する口頸部をもち内外面ナデを行う。(17)は土師器高杯の体底部で外面にハケで整えている。(18)は須恵器高杯の脚裾部である。下外方に下った後ラッパ状にひらき、円孔を四方に穿っている。

次に瓦について述べていく。軒丸瓦および軒平瓦は無く、平瓦と丸瓦のみである。いずれも細片ばかりで、全体がわかるものは無い。このためそのなかでも残りのよいものを図示しておく。

(19,20)は第１調査区ＳＫ１から出土したものである。(19)は凸面に横位の有軸綾杉文叩き、凹面に細かい布目をもつ須恵質の平瓦で、凹面には幅約 3.2 ㎝の桶痕跡がみられる。(20)は凸面に縄目ナデ消し、凹面に布目をもつ土師質の平瓦で、側縁を面取りしている。(21)は包含層出土の凸面有軸綾杉文叩きの須恵質の平瓦で、凹面にはやはり幅約 3.3 ㎝の桶痕跡が残る。端部には桶綴じ紐の痕跡もみられる。縁側は明瞭な分割破面を残す。

(22～24)は第２調査区包含層から出土したものである。(22)は凸面に縄目叩き、凹面に布目をもつ軟質の須恵質の平瓦で、軟質のため縄目叩きが磨滅している。側縁は内傾する面取りを行っているが、一部に破面状を呈しており、あるいは一枚作りの可能性も考えられる。凹面には粘土を補った跡がみられる。(23)は凸面に布目、凹面に丁寧なナデを施しており、凸面布目瓦と考えられる。凸面端部は強いナデをしており、砂粒の動きが観察される。また布目がみられない部分もあり、これはナデによるものか、あるいは布に接地していなかったか等が考えられるが、明確には判らない。須恵質。(24)は丸瓦玉縁部分で、(22)と同じく軟質の須恵質である。

**７．東郷廃寺に関わる問題点**

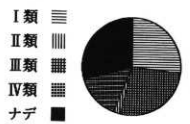
前回行った調査地から北へ 35 ｍの地点での調査であり、関連資料の出土は勿論あるいは遺構検出の期待もあったが果たせなかった。しかし、遺跡の北限が確認できたことは成果のひとつである。また出土資料も多く、ここでは瓦について得られた新知見を中心に述べていきたい。

前回の調査では瓦片は約 850 点が出土し、軒丸瓦３型式と行基式・玉縁式の２種の丸瓦、そして７型式 12 種の平瓦が確認できた。本調査では 114 点の瓦片が出土しているが、11 点の丸瓦片を除きすべて平瓦で軒丸瓦はみられなかった。丸瓦は玉縁及び取り付け部分が４点あったが、行基式は無かった。

平瓦片は凸面のタタキによって分類を行った。総数 103 点のうち凸面の不明なものは 60 点で、残り 43 点を以下のように分類した。Ⅰ類（綾杉文）11 点、Ⅱ類（縄目）11 点、Ⅳ類（縄目消）８点、ナデ 12 点、凸面布目瓦１点である。これをまとめたものが表２である。

これをみる限りはⅠ類と３類は 25%と同率である。しかし、問題はナデを施す瓦である。ナデ 12 点中表面が滑らかなものが７点含まれている。Ⅰ類は桶巻き造りであり、凸面全体にタタキを施すのではなく、狭端側はタタキがみられない。このため７点はこの部分にあたる可能性が高い。また内１点は側縁に分割破面が確認され、

明らかにⅠ類と考えられる。このようにみるとⅠ類は42%にもおよぶ。前回の調査時の統計ではナデの瓦を除いた数字はⅠ類12%、Ⅱ類20%であったが今回は同率あるいは逆転する可能性がでてきた。もっともこれは建物によって使用瓦の比率が異なっていることも考えられ、全てに適用できるとは言えない。その可能性を指摘するに留めておく。なおⅠ類の出土数が最も多かったのは第1調査区で5点、(滑らかなナデ3点)、次いで第3調査区の3点(同ナデ1点)、第2調査区1点(同ナデ2点)で、第4・5調査区では瓦は出土しなかった。



第2表　出土平瓦比率

また凸面布目瓦(23)についても少し触れておきたい。前回Ⅱ類として分類した凸面布目瓦は凹面に綾杉タタキをもつものであったが、本資料は前述しているように凹面はナデ、凸面の布目は消している部分もある。このようなことからⅡ類とは異なる要素をもつが、東郷廃寺の凸面布目瓦の全容が不明な現在は新たな分類は行わずⅡ類に含めておきたいと思う。

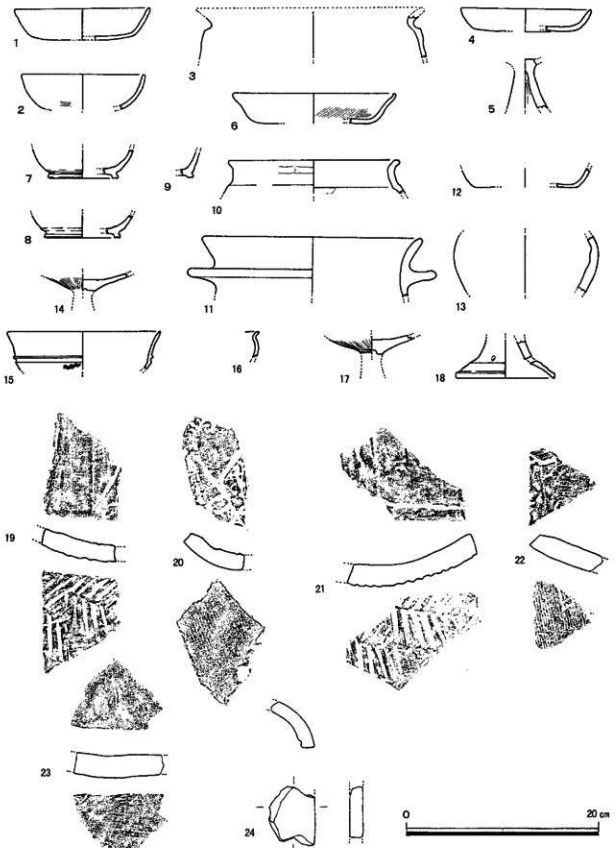
次に前回の報告以後にわかった幾つかの事実について補足しておこう。前報告では原山廃寺式軒丸瓦とⅠ類有軸綾杉タタキ平瓦が密接な関係にあることを指摘し、原山廃寺式軒丸瓦採用寺院11ケ寺、有軸綾杉タタキ平瓦採用寺院10ケ寺と記したが、前者に若江郡西郡廃寺、後者に渋川郡渋川廃寺が含まれることが判明した。とくに西郡廃寺では有軸綾杉タタキ平瓦を使用していることがわかっていたので、これで原山廃寺式軒丸瓦採用寺院 12 ケ寺中有軸綾杉タタキ平瓦採用寺院9ケ寺となった。前回の表に付け加えたものが第3表である。

最後に東郷廃寺C型式軒丸瓦について詳細は未確認ながら東大阪市の若江寺出土複弁蓮華文軒丸瓦との類似性を指摘しておく。C型式は周縁のみであるが、三角縁で幅線文あるいは雷文が施され下部に1条の凸面を持っている。若江寺出土複弁蓮華文軒丸瓦は三角縁にやや太い線を用いて雷文が施され、下部に1条の凸面を持つ。実見では雷文を構成する線の太さが同じものと思われ、今後東郷廃寺でも若江寺出土の複弁蓮華文軒丸瓦と同種のものが出土する可能性がある。

以上、現時点での資料を基に幾つかの報告を行った。寺院に関する遺構自体未確認のため多くの仮説を重ねる結果となってしまった。寺域の中心と推定される部分は既に宅地化してしまっており、今後も直ぐに調査されることは無く、乏しい資料で仮説を導き出すしか今は東郷廃寺の姿は見えない。このため周辺地域のわずかな調査が新たな知識を得る手段となる。今後も注意が必要である。　(渭)

| | 西琳寺式軒丸瓦 | 原山廃寺式軒丸瓦<br>重弁形式（種類） | 山田寺式軒丸瓦 | 難波宮式軒瓦 | 青谷廃寺式軒瓦 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大県郡 | 山下廃寺<br>智識寺 | 山下廃寺（1）<br>鳥坂寺（5）<br>智識寺（3）<br>家原寺（1） | 山下廃寺<br>鳥坂寺<br>智識寺<br>家原寺 | | |
| 志紀郡 | 葛井寺<br>土師寺<br>船橋廃寺 | 衣縫廃寺（1）<br>葛井寺（1）<br>拝志廃寺（2） | 衣縫廃寺<br>土師寺 | 衣縫廃寺<br>葛井寺<br>拝志廃寺<br>船橋廃寺 | 衣縫廃寺<br>葛井寺<br>土師寺<br>拝志廃寺<br>船橋廃寺 |
| 安宿郡 | | 原山廃寺（4）<br>五十村廃寺（1） | 原山廃寺<br>五十村廃寺 | | |
| 高安郡 | 教興寺<br>高麗廃寺 | 教興寺（1） | | | 教興寺 |
| 若江郡 | | 東郷廃寺（1）<br>西郡廃寺（1） | 東郷廃寺<br>西郡廃寺 | 東郷廃寺 | 東郷廃寺 |
| 古市郡 | 西琳寺 | | | 西琳寺 | 西琳寺 |
| 渋川郡 | | | 渋川廃寺 | | |

第3表　大和川周辺の綾杉叩き平瓦採用寺院一覧




第 53 図　出土遺物実測図（1/4）

# １２．中田遺跡（９５－２６０）の調査

１．調査地　　中田４丁目 117－４

２．調査期間　　平成７年７月 31 日

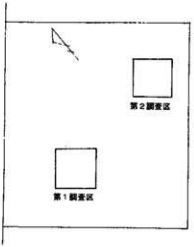
３．調査方法　　住宅建設予定地に２ｍ×２ｍの調査区を２ヵ所設定し、各々２ｍまでを重機と人力を用いて掘削した。

４．調査概要　　現況は区画整理の際 0.8 ｍ前後の盛土が行われているが、旧耕作土と床土を取り除いた地表下 1.15 ｍから遺物片がみられることから、密な遺物包含層の存在が予想された。

第１調査区－５層灰茶色粘砂以下で土師器片、須恵器片が確認されるが、遺物包含層とみられるのは地表下 1.65 ｍの７層淡灰白色粗砂質土中に土師器甕口縁や塊形の杯部に放射線状暗文を施す高杯等とともに須恵器杯身が完形で出土した。この包含層の下部である８層灰黒色粘土の上面は炭化物に覆われ、その中に土師器片が含まれ、８層は遺構面と推定されるが、完形の遺物が出土していることから土坑状を呈する遺構内を掘削していた可能性もある。地表下 1.9 ｍ以下では淡灰色粘質土がみられ遺物は確認できなかった。

第２調査区－第１調査区と異なり、地表下 1.2 ｍ以下では微砂～細砂が混じる土質である。11 層灰色微砂混粘砂には土師器・須恵器片が包蔵され、明確な時期は不明だが６世紀以降の包含層とみられる。1.7 ｍ以下では 0.5 ｍの粘質土を挟んで砂層の堆積となる。なお２ｍ前後の 15 層暗黄灰色礫混粗砂上面では外面ハケ調整を施し、内面ヘラケズリ・底部に指頭痕を残す布留甕の破片が出土しており、須恵器導入以前の遺構面と推定される。

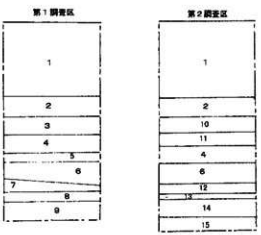
第 54 図　調査地周辺図（1/5000）



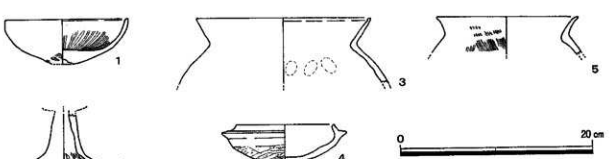

第55図　調査区設定図(1/200)

5．出土遺物　　遺物は(1)～(4)が第1調査区7層、(5)は8層から出土したものである。

(1)土師質の高杯塊部分で口縁は外上方に内湾しながらのび直立し、端部は丸くおさめる。内面には放射線状の暗文を施す。口径12.7cm。(2)土師質の高杯脚部は淡橙褐色を呈し、裾部内面にしぼりめを残す。(3)布留甕口頸部。磨耗のため外面調整は不明、内面には指頭痕が見られる。口径18.1cm。(4)須恵器杯身は立ち上がりは低く内傾しており、受部との境に浅い沈線がめぐる。底部外面には静止ヘラケズリが施されている。口径10.2cm、器高4cm。TK209。(5)土師質の甕は体部外面から頸部にかけてタタキが施した後ナデ消している。内面は口縁部はヨコナデ、頸部はナデを行う。口径14.8cm




第56図　基本層序摸式図(1/40)




第57図　出土遺物実測図(1/4)

6．備考　　今回の調査では6世紀後半とみられる遺物包含層を確認し、遺構面あるいは遺構を検出した。6世紀代の遺構は中田では数地点で確認されているが、集落という単位で捉えられることはできていない。これは調査区が古墳時代以降の整地や耕作による削平、あるいは調査区が小さいことなどを挙げることができる。また第2調査区では砂層の上面で古式土師器片が見つかっているが、中田遺跡では砂層上に遺構面が構築されていることがあり、注意を要する。　　(清)

# １３．中田遺跡（９５－１４９）の調査

１．調査地　　刑部１丁目 183.184

２．調査期間　　平成７年 10 月 18 日

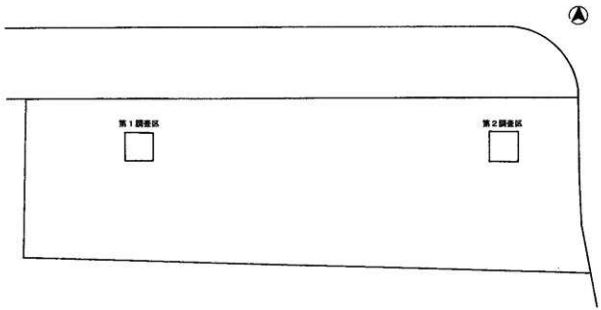
３．調査方法　　遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地内の建物予定地の東西に３×３ｍ調査区を２箇所設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影・実測等を行うことにした。

４．調査概要　　西側の第１調査区では、耕土以下地表下 1.6ｍ以下約 30㎝の間の暗灰色粘質土に若干の弥生時代～古墳時代の土器片を含む土層を確認した。そこで、東側の第２調査区において、地表下 1.6ｍ以下の土層を注意深く掘り進めると、弥生時代後期の土器を含む集積状の包含層及び土器が入った小穴状の遺構を検出した。集積状の包含層からは、弥生時代後期前半の甕や高坏片が出土し、小穴状の遺構からは、大型の壺と思われる土器の体部片を検出している。それより下層はシルト層、粘土層が厚く堆積する。

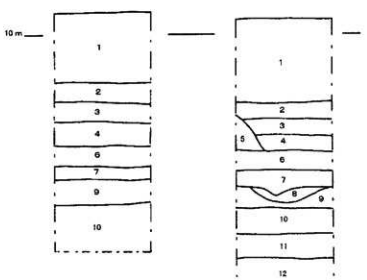
５．調査結果　　敷地東西で確認した包含層は弥生時代～古墳時代のものではあるが、少なくとも弥生時代後期前半の包含層の広がりが存在することを明らかにできた。

付近の下水道やマンション建設に伴う発掘調査や試掘調査でも同時代の遺構が確認されており、当該地もこれら中田遺跡弥生集落の一角に位置することは確実であると想定され、今後本格的な発掘調査によりこの時期の遺構の状況を確認することが必要である。　　（米田）

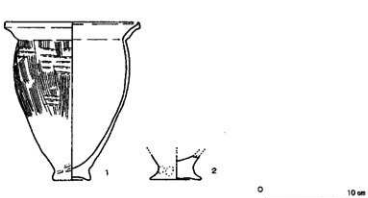
第 58 図　調査地周辺図（1/5000）




第 59 図　調査区設定図(1/400)




第 60 図　土層断面図(1/40)




第 61 図　遺物実測図

# １４．水越遺跡（９５－４５０）の調査

１．調査地　　服部川５丁目７番地～12番地

２．調査期間　　平成７年10月30日

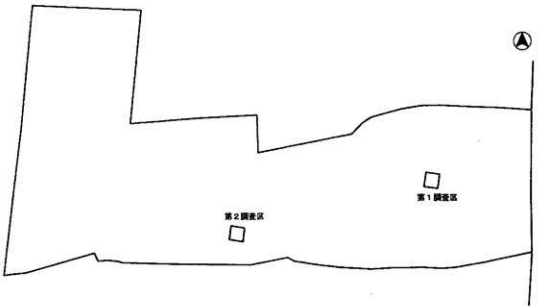
３．調査方法　　遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地内の建物予定地の東西に３×３ｍ調査区を２箇所設定し、機械による掘削ののち、手作業による断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影・実測等を行った。

４．調査概要　　東側の第１調査区では、表土以下地表下0.6ｍ以下約30cmの間に存在する黒褐色の粘砂質土に弥生時代の土器片を含むのを確認し、それ以下は砂の堆積となっていた。さらに西側の第２調査区において、地表下0.7ｍ以下の黒灰色の粘質土層を手掘りにより掘り進めると、弥生時代後期の土器を多く含む集積状の箇所を検出し、そこが溝状の遺構となっているのを確認した。溝状の遺構からは、甕や高坏等の土器がまとまって出土している。それより下層は砂質土、粘土が堆積し、２ｍ付近で岩盤に達した。

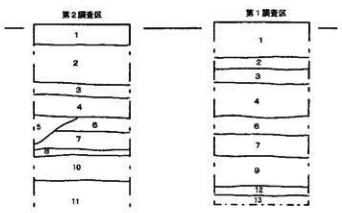
５．調査結果　　敷地東西で確認した包含層は弥生時代後期のものと考えられ、当該地より近鉄信貴山線の線路を挟んだ南方約200ｍの地点と100ｍの地点でも発掘調査を実施しており、平成２年と３年に同時期の遺構、遺物が確認されている。

このように付近の調査でもこの付近が弥生時代後期の集落跡の一角に位置していることが想定され、当調査区周辺においては何らかの弥生時代の遺構の存在が想定される。今後当該地において、包含層を対象とする部分の発掘調査を実施することにより、遺構の状況の確認が必要である。　　（米田）

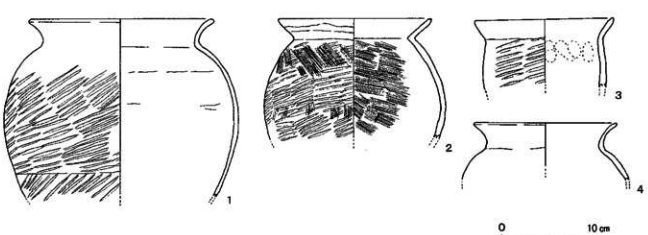
第62図　調査地周辺図（1/5000）




第 63 図　調査区設定図(1/800)




第 64 図　土層断面図(1/40)




第 65 図　遺物実測図

# １５．八尾南遺跡（９４－５７７）の調査

１．調査地　　西木の本１丁目１

２．調査期間　　平成７年２月７日

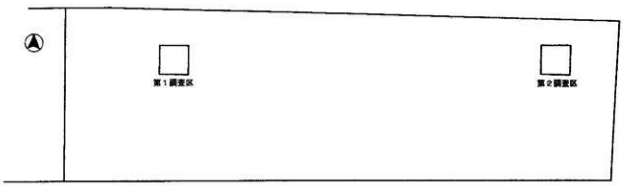
３．調査方法　　遺構、遺物の有無を確認する目的で、事業計画地内の東西に、３×３ｍの調査区を２箇所設定し、機械による掘削ののち、手作業により断面精査及び包含層の掘削を実施し、写真撮影・実測等を行うことにした。

４．調査概要　　西側の第１調査区では耕土以下淡茶灰色～淡灰色の砂層や粘砂が堆積し、地表下1.3ｍで厚い粘土層に達する。この粘土層中の地表下１.７ｍ以下０.４ｍが暗灰色～黒灰色の粘土となり、ここに弥生時代末～古墳時代中期の土師器、須恵器を含む包含層が顕著にみられた。

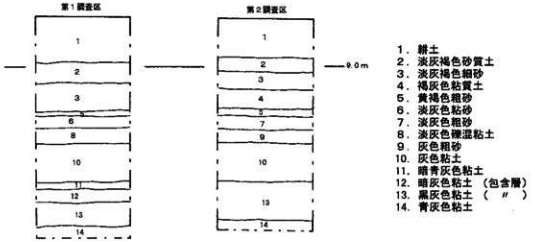
東側の第２調査区では耕土以下淡茶灰色～灰色の砂層と粘質土が交互に堆積し、地表下1.3ｍで厚い粘土層に達する。この粘土層中の地表下１.７ｍ以下０.４ｍが黒灰色の粘土となり、ここに第１調査区同様の土師器、須恵器を多数含む包含層が確認できた。

５．調査結果　　敷地東西で確認した包含層は同時代のもので、同じ深さにあることから敷地全体にわたり何らかの遺構の存在が想起させられる。当該地南方100ｍの地点で昭和63年度に調査され、弥生時代後期の遺構、遺物が検出され、昭和59年度に調査された南西200ｍの地点でも古墳時代の遺構が確認されている。当調査地の包含層もこれらの遺構群に連なるものと想定され、遺構の状況の確認が急務である。（米田）

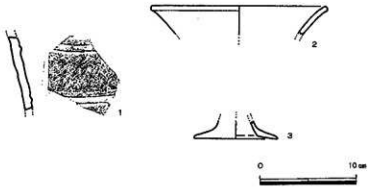
第66図　調査地周辺図（1/5000）




第 67 図　調査区設定図(1/400)




第 68 図　土層断面図(1/40)




第 69 図　遺物実測図

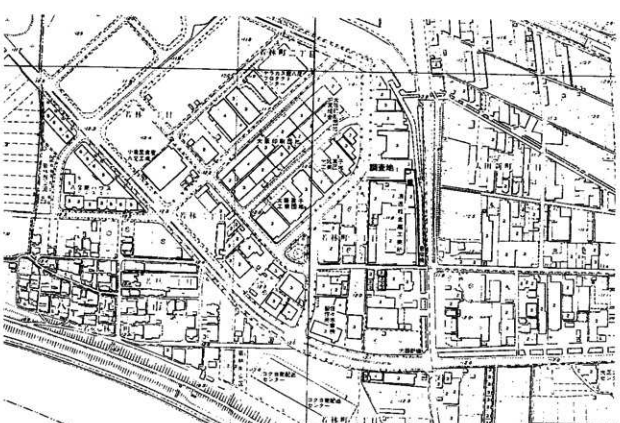
# １６．八尾南遺跡（９５－２４８）の調査

１．調査地　八尾市若林町２丁目 10･12･15 の一部と 13

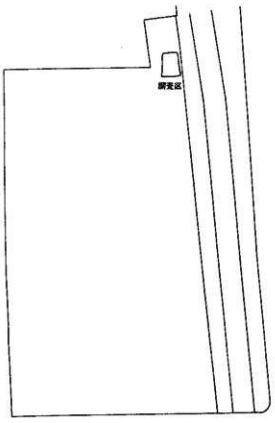
２．調査日　平成７年８月２日～４日

３．調査方法　施工予定地内の防火水槽設置部分について、重機と人力を併用して地表下 4.4 m付近まで調査を行った。

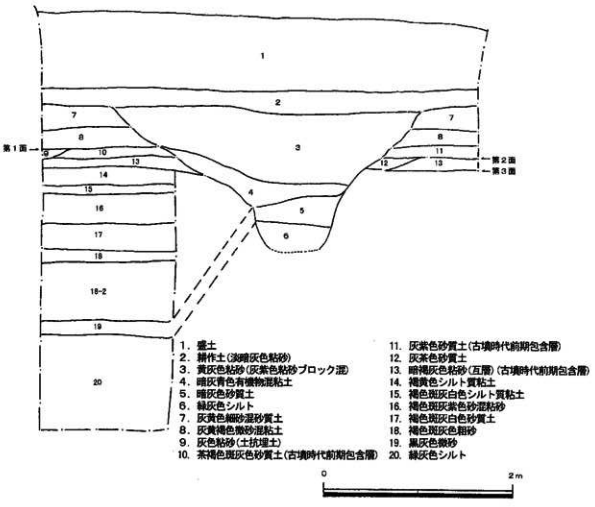
４．調査概要　調査区の中央には耕作土直下の層を切り込む幅３m程度の近世期の溝状遺構があり、さらに調査区南側は現代の撹乱坑があり、遺構面はわずかにしか残存していなかった。地表下 1.4 mの茶褐色斑灰色砂質土層上面で、土坑状遺構３基、溝状遺構１基を検出した。埋土は灰色粘砂層等である。またその下の暗褐灰茶色粘砂層上面でピット状遺構３基を検出した。埋土は淡暗灰色粘砂層等である。第１面直上の灰紫色砂質土層には弥生時代後期の土器、庄内式土器の小片が密に含まれていた。また、これらの遺構面で検出した遺構の埋土内にも同期の土器片が密に含まれていた。この下は地表下 4.4 m以下まで確認したところ、地表下 2.4 m以下で自然流路状の堆積とみられる灰白色粗砂層等を確認した。近隣の調査においても同期の遺構・遺物が確認されており、これと密な関係をもつものと考えられる。（吉田）



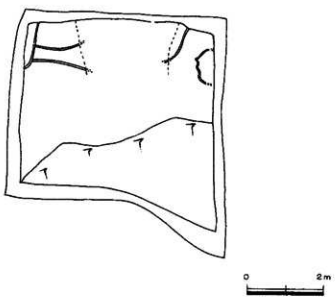

第 70 図　調査地周辺図（１/5000）



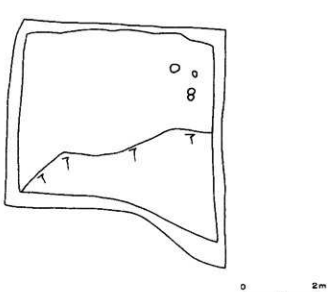

第 71 図　調査区設定図(1/600)




第 72 図　調査区土層断面図(1/40)




第73図　第1・第2面検出遺構平面図(1/100)




第74図　第3面検出遺構平面図(1/100)

# １７．弓削遺跡（９４－６３１）の調査

１．調査地　　志紀町南４丁目 38･39･39-3･40-2

２．調査期間　　平成６年 12 月 14 日

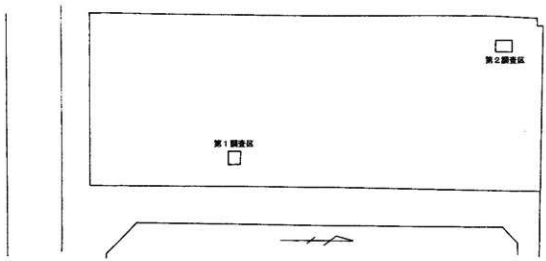
３．調査方法　　宅地造成の排水施設に伴う調査で約 1.5ｍ×1.5ｍの調査区を２ヵ所設定した。調査区南側を第１調査区、北側を第２調査区とし、地表下 1.6～2.1ｍまでを掘削し、調査を行った、

４．調査概要　　第１調査区－現地表より 0.25～0.5ｍには旧建物の基礎が残存していた。以下、灰黒色小礫混粘砂・淡灰色粘砂・黄灰色シルトを挟み地表下１ｍの灰色粘砂を切り込む溝を検出した。溝は東西に伸び、深さ 0.35ｍで埋土は褐色細砂である。遺物が出土しておらず、時期は不明である。遺物が多く包蔵されていたのは地表下 1.35ｍに遺存する灰色粘土層で、弥生時代後期の土器を大量に含んでいる。遺物は主として西壁付近で出土しており、多くは調査区外にかたまっている。完形の土器がみられることから遺構の埋土とみられる。

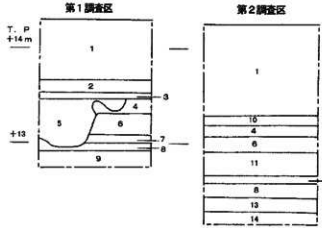
第２調査区－地表下 1.65ｍで須恵器を含む淡灰色砂質土がみられる。そして、1.8ｍ以下で弥生時代後期の遺物を含む青灰色粘土層が確認できた。

５．近隣との調査比較　　第１調査区で確認された弥生時代後期の遺物層はＴＰ＋12.9ｍ前後から検出されているが、第２調査区ではＴＰ＋12.45ｍ前後で検出しており、約 0.45ｍの比高差がある。平成３年度に北隣で実施した調査において、やはり完形の弥生後期の土器が出土した第５調査区ではＴＰ＋12.35 ｍ前後で遺物が包蔵されており、第２調査区とほぼ同レベルであった。

第 75 図　調査地周辺図（1/5000）




第76図　調査区設定図（1/500）




第77図　基本層序模式図（1/40）

また調査地と道路を隔てて南に位置する柏原市の本郷遺跡では1991・1992年の調査でV様式～庄内期にかけて廃棄された小銅鐸が出土しており、弥生中期の土坑、後期の方形周溝墓と溝、古墳前期～中期の住居趾、土坑、溝などが検出されている。この調査における弥生後期の検出レベルはＴＰ＋11.5 m前後でやや低くなっているが、古墳時代の遺構が顕著にみられる点が当調査地と状況が異なっている。

## 6．出土遺物

図化できたのは40点である。各々の詳しい調整については遺物観察表を参照してもらい、ここでは概略について述べる。

甕は口径、最大径、器高のバランスから大甕（1～4）、中甕（5～13）、小甕（14～19）に分類し、また底部（20～25）も掲示した。大甕は最大径が肩にあるが、(3)は他のものに比してやや下がる。頸部は鋭く屈曲し、口縁は薄くタタキメも(3.5/cm)と細い。中甕では内面調整は剥離のため不明なものも多いが、明確なハケ痕跡を残しているものは2点(5.12)しかない。(5)は下半部に穿孔を施し、連続ラセンタタキを行う。また(8)は口縁部を叩き出しによって成形している。(9.10)は粘土継ぎ痕が明瞭である。頸部は「く」の字状に屈曲する。(13)は分割成形がみられ、上半部と下半部ではタタキの太さが異なる。底部は輪台で、器壁は薄いが内面調整は不明。小甕は2分割成形とみられる。口縁が体部径と同等、あるいは凌駕している。体部は球形化が著しく、底部にまでタタキが及んでいる(14.15)。タタキは(4/cm)と細い

(16.17)。(18)は体部の球形化が最も著しく、調整は外面はタタキ後イタナデ、内面はイタナデを行うなど、他の甕と若干異なるものである。突出した底部をもたず、体部から続くものも(22,23,24)ある。

壺は広口壺が主体であり、頸部から口縁がすぐに外反しているもの(26,27,30)と、やや直上にのびた後に外反するもの(29)がある。(30)は体部が下膨れで底部も円盤状で突出しないタイプである。(31)は短頸壺。

高杯(32～39)は口縁部の長さが受部に匹敵するものがある。また脚柱部の中実化の進行も確認できる。

手焙形土器(40)は鉢部が浅く、刻目突帯を施すもので、内外面をハケ調整を行う。覆い部についても一部ハケが残る。

7．出土遺物からの2.3の問題点　本調査地出土の資料は(1)中位に最大径をもつ小型甕の存在(2)細筋の叩きの使用(3)内面調整にハケを用いるものが少ない等の特徴から河内の土器編年では上六万寺式から北鳥池下層式に併行するものと考えられる。特に甕体部の球胴化は著しいものがあり、高杯においても杯口縁部の発達からみてその大半は北鳥池式下層[注3]に包括されるものである。北鳥池下層式は第Ⅴ様式の範疇に留まる技法を保ちながらも、その指向する形態は庄内甕で、芋本氏他が述べておられるように第5様式の最終末段階であるとともに庄内甕出現以降の一群であるとする説がある[注4]。

また近年の庄内～布留期の資料の増加から、土器組成を中心とした中河内の編年案を提示した原田氏は最古型式の河内型庄内甕は体部三分割のタタキ成形、体部最大径が上位にある点で北鳥池下層式とは「直接的の系譜上にはのるものではなく・・・」としたうえで、その甕A1・鉢A1・高杯A1の存在など器種構成の違いから庄内式古相に先行するものとされている[注5]。

今回の資料は調査面積も小さく、明確な遺構に伴うものではないのでこの議論の俎上にのるものではない。ただ得られたデータをもとに2・3の問題点を提示してみたいと思う。

最初に北鳥池下層式と当遺跡資料との胎土の相違を考えてみたい。北鳥池下層資料63点中、中河内あるいは南河内からの搬入品として捉えられている明確な庄内～布留式土器を除いた56点のなかで生駒西麓以外の胎土をもつとされているのは3点のみである。すなわち北鳥池下層式を構成する土器群は在地周辺で製作されたものと考えられている。

しかし、本調査資料は奥田先生に行って頂いた胎土分析から単一の材料で製作されたものではないことが判明した。詳細は別稿にゆずるが調査地周辺の材料で製作されたものは僅かであり、表1からわかるように土器の多くは他地域の材料が使用されている。

最も多いものはⅣ類型であり北大和の大阪層群あるいは泉北丘陵の可能性を持ちつつ、岩相的に播磨中部ではないかと分類された土器である。これに次いで恩智川付近の土器が多く、他に生駒西麓の八尾市大窪や神立、柏原市の東山麓の材料を用いている。

第1表　胎土別産地比較表

このように他地域の材料を用いた土器が多く搬入されているのはその立地条件を抜きにしては考えられない。弓削遺跡は奈良からやってくる大和川と南河内からの石川が柏原で合流したものが再度久宝寺川と玉串川に分かれた分岐点西側に位置している。このため多くの土器が集まったことが推定でき

る。これは山手にある北鳥池遺跡とは全く異なった環境にあり、弥生時代が終わりを迎え時代が動こうとしていたなかで他地域との交通が確立されていたことが伺える。

だが、それでも明確に内面をヘラケズリした庄内甕は入ってきていない。庄内甕古相期における土器の胎土は平野部ものと恩智・水越など媒乱砂礫が混和材として使用されている生駒西麓部ものの2タイプが確認されており、本調査資料においても恩智付近の土器が多く搬入されているにもかかわらずである。しかし、また球胴化が著しいものは恩智付近の土器でもある。このような点から弓削遺跡については次のように考えることができよう。第1に庄内古相併行期であるとするならば、庄内甕の製作集団を持たない地域であり、北鳥池遺跡と同様に若干遅れた地域であったであろうこと。第2に集落というよりも大和川を利用した土器の集積場のような施設があった場所と推定できる。第3に庄内甕出現以前であるとするなら、恩智付近の材料を用いている甕が最も球胴化が進んでいることから最古の河内庄内甕は恩智の材料で製作されたことが考えられる。

次に出土遺物の性格について少し触れたいと思う。何度も述べているように極小さな調査区のため遺物が出土した遺構については不明である。ただ調査区外西側に遺物の密度が高く、完形に近いものも多いことから溝あるいは土坑などの遺構を推定できる。遺物は煮沸器種である甕が大半を占め、次いで高杯が目を引く。破片が多く全体を把握できないが、確実に穿孔を施しているものは2点しかない。こうしたことから一概に祭祀によって廃棄されたものとはいえない。むしろ日常生活に使用している器具を廃棄している可能性がある。しかし、生産→使用→破損→廃棄という生活サイクルで捉えるには完形品が目立つ。これはこれまで述べてきた弥生終末期と庄内期という時代の動きのなかで検討すべき課題かも知れない。

以上のいくつかの問題点を挙げてきた。今後の同時期の資料増加が期待されるが、最後に弓削遺跡内で行われた調査における興味ある結果について書いておこう。(財)八尾市文化財調査研究会によって昭和59年に実施された第1次調査では同時期の溝が検出されており、溝内より大量の土器が出土している。[注6] そして最上層には庄内古相の遺物が確認されている。これはこれまで述べてきた多くの問題を解く可能性をもつものである。資料の整理が待たれるところである。(潤)

注1　八尾市教育委員会『八尾市内遺跡平成三年度発掘調査報告Ⅰ』1992年
注2　北野重『本郷遺跡1991・1992年度』柏原市教育委員会1993年
注3　花園高校地歴部「河内古代遺跡の研究」昭和45年
注4　芋本隆裕「北鳥遺跡出土遺物の再整理」『東大阪遺跡保護調査会年報1979年』東大阪遺跡保護調査会　1980年
注5　原田昌則「東弓削遺跡（4次調査）」「久宝寺遺跡（1次調査）」『八尾市文化財調査報告1993年』(財)八尾市文化財調査研究会1993年
注6　(財)八尾市文化財調査研究会の西村公助氏の御教示による。

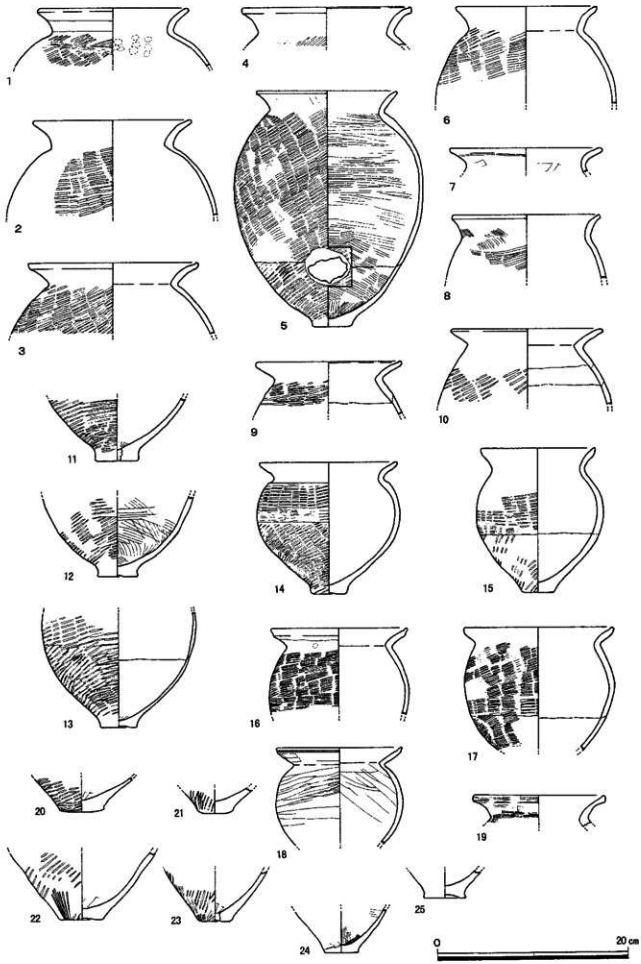
| 遺物番号 | 器種<br>部位 | (cm) 口径<br>法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 15.3<br>残 5.8 | 頸部は緩やかに屈曲する。口縁部内外面はハケ。体部外面はタタキ（4本／cm）内面はナデで指頭痕がみられる。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 2<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 16.6<br>残10.0 | 口縁内外面はナデ。体部外面は右上がりタタキ（3本／cm）。内面はハケ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 3<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 17.8<br>残 7.5 | 口縁端部はややつまみ上げる。頸部は「く」字状に近い。口縁内外面はナデ。体部外面は右上がりタタキ(3.5 本／cm)。内面は不明だが、砂粒の動きは見られない。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 4<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 18.0<br>残 4.0 | 口縁部外面はナデ。体部は右上がりタタキ（3本／cm）。内面はナデ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 5<br>弥生土器 | 甕 | 14.6<br>24.8<br>体部最大径<br>19.5 | やや突出する平底。口縁部外面タタキ後ナデ。体部外面は右上り連続ラセン状タタキ（3本／cm）。体部内面ハケメ。下半部に外面より穿孔を行う。 | 淡橙灰色 | 良 | |
| 6<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 14.8<br>残10.2 | 口縁部内外面ナデ。体部外面は右上がりタタキ（2.5 本／cm）。内面は不明。 | 淡乳褐色 | 良 | |
| 7<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 16.0<br>残 2.7 | 口縁部外面はナデで、ハケが残る。頸部はナデ。内面はイタナデ。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 8<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 15.6<br>残 6.8 | 口縁は叩き出し成形。口縁部外面はナデ。頸部から体部はタタキ。内面調整は不明。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 9<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 14.0<br>残 3.3 | 口縁端部は上方に小さく拡張する。外面はタタキ（2.5 本／cm）。内面はナデ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 10<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 16.0<br>残 7.9 | 頸部は「く」字状に屈曲する。口縁部内外面はナデ。体部外面は右上がりのタタキ（3本／cm）。内面は不明。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 11<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径4.6<br>残 6.5 | 突出する平底。体部外面は右上がりタタキ（3.5 本／cm）。内面底部はナデ。 | 暗橙褐色 | 良 | |
| 12<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径4.4<br>残 8.4 | 突出するドーナツ状の平底。体部外面は右上がりタタキ（4本／cm）。内面はハケ。 | 暗茶褐色 | 良 | |
| 13<br>弥生土器 | 甕<br>体～底部 | 底径4.0<br>残12.0 | やや突出する平底。体部最大径は中位。外面は右上がりタタキ（3本 ／cm）。内面底部はヘラナデ。体部内面は剥離しているが器壁は薄い（2.5 mm） | 淡茶褐色 | 良 | |
| 14<br>弥生土器 | 甕 | 14.4<br>13.8 | やや突出する平底。体部最大径は中位。2分割成形。口縁部内外面はナデ。体部外面下位右上がりタタキ（3.5 本 ／cm）が底部までおよぶ。中位以上は横方向。体部内面はナデ。 | 暗茶褐色 | 良 | |
| 15<br>弥生土器 | 甕 | 12.0<br>15.1 | やや突出する平底。体部最大径は中位。2分割成形。口縁部内外面ナデ。体部外面下位は右上がりタタキ（3本 ／cm）が底部までおよぶ。中位以上は横方向のタタキ（4本／cm）。体部内面はナデ。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 16<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 14.4<br>残 9.0 | 口縁部は貼り付けており、端部はややつまみ上げる。頸部は「く」字状に近い。体部外面下位は横方向のタタキ。中位以上は右上がりのタタキ（4本／cm）。内面は不明だが、砂粒の動きは見られない。 | 淡乳褐色 | 良 | |
| 17<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 15.8<br>残12.9 | 最大径は中位より上。体部3分割成形。口縁部外面はタタキ後ナデ。体部外面右上がりタタキ（4本 ／cm）。口縁部内面ナデ体部内面はナデ。 | 淡茶灰色 | 良 | |

# 出土遺物観察表 (2)

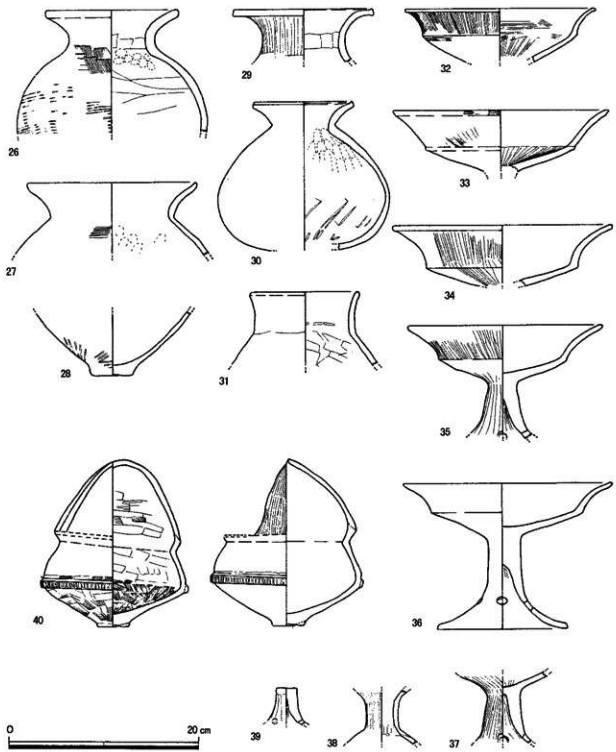
| 遺物番号<br>図版番号 | 器種<br>部位 | (cm) 口径<br>法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 18<br>弥生土器 | 甕<br>口～体部 | 13.2<br>残10.2 | 球形に近い体部をもち、口縁端部外面に沈線を施す。頸部は「く」字状に屈曲する。口縁外面はイタナデ、内面はナデ。体部外面はタタキ後イタナデ。内面は頸部までイタナデ。 | 暗茶褐色 | 良 | |
| 19<br>弥生土器 | 甕<br>口～頸部 | 14.0<br>残 3.3 | 口縁は外上方にのびた後内湾し、内傾する面を成す。内外面ハケ。 | 暗橙灰色 | 良 | |
| 20<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径4.7<br>残 3.5 | 自重で潰れているが、やや突出する平底。外面は右上がりタタキ(3.5本／cm)で底部までおよぶ。内面底部はイタナデ。 | 暗橙褐色 | 良 | |
| 21<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径3.8<br>残 2.7 | 例立不能と思われる平底。外面はタタキ(3.5本／cm)角を潰す。内面調整は不明。 | 明茶褐色 | 良 | |
| 22<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径4.6<br>残 7.0 | 体部から続く平底。体部外面はタタキ。底部はタタキ後ヘラミガキ。内面はイタナデ | 明茶褐色 | 良 | |
| 23<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径3.7<br>残 5.3 | 穿孔を施した平底の底部をもつ。外面は右上がりタタキ(3.5本／cm)で底部までおよぶ。内面底部はイタナデ。 | 明橙褐色 | 良 | |
| 24<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底部3.6<br>残 4.5 | 平底の底部をもつ。外面はナデ。内面はハケ。 | 暗橙褐色 | 良 | |
| 25<br>弥生土器 | 甕<br>底部 | 底径4.5<br>残 3.0 | 上げ底の底部。内外面調整は不明。 | 黒色 | 良 | |
| 26<br>弥生土器 | 広口壺<br>口～体部 | 14.0<br>残12.8 | 頸部は短く外反する。口縁内外面はナデ。頸部～体部はハケ。中位以下はタタキ(3.5本／cm)後ナデ。頸部内面は上位はイタナデ、下位は指頭痕。体部はナデ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 27<br>弥生土器 | 広口壺<br>口～体部 | 8.9<br>残 7.4 | 頸部は短く外反する。体部はタタキ(4本／cm)後ナデ。内面頸部付近に指頭痕。 | 灰褐色 | 良 | |
| 28<br>弥生土器 | 壺<br>底部 | 底径4.5<br>残 6.5 | 平底の底部から上外方にのびる体部をもつ外面はタタキ(4本／cm)。内面には指頭痕跡が残る。 | 乳褐色 | 良 | |
| 29<br>弥生土器 | 広口壺<br>口縁部 | 7.8<br>残 5.5 | 口頸部は外反しながら大きく伸び、端部は上下に小さく拡張する。外面はヘラミガキ内面はイタナデ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 30<br>弥生土器 | 短頸壺<br>口～底部 | 10.4<br>残15.4 | 下膨れの体部から口縁部は斜め上方にのび端部は小さく上方につまむ。口縁部内外面はナデ。体部下半はイタナデ。中位以上は不明。内面下半はイタナデ。中位以上は指ナデ。 | 暗橙褐色 | 良 | |
| 31<br>弥生土器 | 直口壺<br>口～頸部 | 11.5<br>残 7.9 | 斜め上方にのびる体部から口縁は短く直立する。外面はイタナデ。口縁部内面はナデ体部はイタナデ。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 32<br>弥生土器 | 高杯<br>杯部 | 19.9<br>残 5.6 | 杯部は斜め上方に内湾気味にのび、口縁部は外反する。口縁部外面はナデ後ヘラミガキ。杯部の一部にハケ。口縁部内面は横方向のヘラキガキでハケが残る。杯部は縦方向のヘラミガキ。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 33<br>弥生土器 | 高杯<br>杯部 | 22.6<br>残 6.4 | 杯部は斜め上方にのび、口縁部は角度をかえてのびる。口縁外面はハケ。杯部は不明口縁内面は不明。杯部はヘラミガキ。 | 橙褐色 | 良 | |
| 34<br>弥生土器 | 高杯 | 23.0<br>残 6.3 | 杯部はやや斜め上方にのび、口縁部は短く直立した後外反する。外面は縦方向のヘラミガキ。内面調整は不明。 | 明橙褐色 | 良 | |

出土遺物観察表 (3)

| 遺物番号<br>図版番号 | 器種 | (cm) 口径<br>法量 器高 | 形態・調整等の特徴 | 色調 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 35<br>弥生土器 | 高杯<br>杯～脚部 | 20.3<br>残12.0 | 杯部は斜め上方に内湾気味にのび、口縁部は外反する。脚柱部ゆるやかに裾部にいたる。脚柱部は上端近くまで中空。外面はヘラミガキ。内面調整は不明。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 36<br>弥生土器 | 高杯 | 22.8<br>13.6 | 杯部は斜め上方にのび、口縁部は外反する。脚柱部は直立し、ゆるやかに裾部にいたる。脚柱部は半分はつまり、裾部に4孔を穿つ内外面調整不明。 | 淡橙褐色 | 良 | |
| 37<br>弥生土器 | 高杯<br>脚部 | 残 7.5 | 中空の脚柱部で4孔を穿つ。杯部内外面はヘラミガキ。脚柱部外面はハケ。内面はイタナデ。 | 淡茶褐色 | 良 | |
| 38<br>弥生土器 | 高杯<br>脚部 | 残 5.7 | 中空の脚柱部。外面はハケ。内面はナデで裾部はイタナデ。 | 暗灰色 | 良 | |
| 39<br>弥生土器 | 高杯<br>脚部 | 残 3.6 | 中空の脚柱部。外面はハケナデ。内面はシボリメ。 | 橙褐色 | 良 | |
| 40<br>弥生土器 | 手培形土器 | 底径3.5<br>27.8 | 突出する平底。体部に刻み目をもつ貼り付け突帯をもつ。下半部はハケで、覆い部にもハケが残る。内面もハケ。 | 淡茶褐色 | 良 | |




第78図　出土遺物実測図（1/4）




第79図　出土遺物実測図（1/4）

# 土器の表面に見られる砂礫

奥田　尚

## 1．はじめに

八尾市の東南部に位置する弓削遺跡から出土した弥生時代末～古墳時代初頭にかけての時期を示す土器の表面に見られる砂礫を肉眼で観察した。観察した土器の器種は甕、盌、高杯等である。観察は石種・鉱物種・生物片の色、形、大きさ、量について行った。砂粒を識別する目安としては、石種として花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、流紋岩、安山岩、玄武岩、火山ガラス、砂岩、泥岩、チャート、片岩、蛇紋岩、変輝緑岩、鉱物種として石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石、橄欖石、柘榴石磁鉄石、生物片として海面の骨片、ウニの刺、貝殻、有孔虫、炭質物等である。また火山岩と深成岩とを区別するために鉱物が結晶面で囲まれている自形か結晶面が認められない他形かの判断もした。特に石英、角閃石、輝石について注意をはらった。形については角、亜角、亜円、円の４段階に区別した。粒径については㎜単位で目測した。量については非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅か、ごくごく僅かの６段階とした。岩石片の同定については、鉱物構成で名称が代わり、粒が小さいため判断しにくい場合が多い。そのために、石英、長石、石英、長石、黒雲母、長石、黒雲母が噛み合っていれば花崗岩とし、角閃石が噛み合っていれば閃緑石、輝石や　橄欖石が噛み合っていれば斑糲岩とした。また、自形の石英がみられれば流紋岩に、自形の角閃石、輝石がみられれば安山岩とした。片理が顕著であれば片岩とした。このような岩石区分は岩石全体が判れば名称が異なる場合もある。

## 2．砂礫粒の特徴

識別できた砂礫種は、岩石片として花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、凝灰岩、火山ガラス、鉱物片として石英、長石、黒雲母、角閃石である。各々の特徴について述べる。

花崗岩：色は灰白色で、粒形が角、粒径が最大10㎜である。石英・長石、石英・黒雲母、長石・黒雲母が噛み合っている。片麻状を示すものがある。

閃緑岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角、粒径が最大で７㎜である。長石・角閃石、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。

流紋岩：色は灰白色、灰色、暗灰色、褐色、茶褐色、淡茶色と様々で、粒形が角、亜角である。粒径が最大６㎜である。石基はガラス質で、石英や長石、黒雲母の斑晶があるものがある。

砂岩：色は暗灰色、褐色で、粒形が亜角、亜円である。粒径は最大1.5㎜である。細粒砂である。

泥岩：色が黒色、暗灰色で、粒形が亜角、粒径が最大0.7㎜である。僅かに片理が見られる。

チャート：色は灰色、暗灰色で、粒形が角、亜角、粒径が最大２㎜である。

灰岩：色は白色、楕円形をなし、粒径が７㎜、量がごくごく僅かである。非常に柔らかく、自形の石英が多く含まれる。№26資料にのみみられる。

火山ガラス：無色透明、黒色透明、貝殻状、粒径が最大0.2㎜である。石英：無色透明、粒形が角、粒径が最大６㎜である。複六角錐あるいはその一部がみられるものもある。また赤褐色透明のものもごく僅かにある。

長石：無色透明、灰白色透明、灰白色、白色で、粒形が角、粒径が最大５㎜である。

角閃石：黒色、粒形が角、亜角、粒径が２㎜で、柱状である。柱状で自形をなすものや結晶面があるものがある。

3．砂礫種構成と類型区分

観察した砂礫種構成からみれば、花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とするもの（Ⅰ類型）、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とするもの（Ⅱ類型）、流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とするもの（Ⅳ類型）がみられる。更に主要砂礫以外の砂礫をもとにして細分した（区分の基準は庄内式土器研究Ⅱを参照[1]）。Ⅰ類型は、Ⅰb類型、Ⅰ bd 類型、Ⅰ bg 類型に、Ⅱ類型はⅡa類型、Ⅱ ab 類型に、Ⅳ類型はⅣ abg 類型、Ⅳ an 類型、Ⅳe類型、Ⅳ gn 類型、Ⅳn類型に区分した。各類型の特徴について述べる。

Ⅰ類型：花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰb類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰ bd 類型

花崗岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、チャートが僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅰ bg 類型

Ⅱ類型：閃緑岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

閃緑石質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅱa類型

閃緑石質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・流紋岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅱ ab 類型

Ⅳ類型：流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とする。

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源・閃緑岩質岩起源と推定される砂礫、砂岩が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅳ abg 類

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、花崗岩質岩起源と推定される砂礫、角閃石が僅かにふくまれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅳ an 類

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、安山岩質岩起源と推定される砂礫が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Ⅳe類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、砂岩や泥岩、角閃石が僅かに含まれる・・・Ⅳ gn 類型

流紋岩質岩起源と推定される砂礫を主とし、角閃石が僅かに含まれる・・・・・・・・・・・Ⅳn類型

砂礫種構成をもとに区分すれば上記のようになるが、更に、同じ亜類型のものでも砂礫の見掛け（砂礫相）が異なる。人に例えれば人相と同じである。類型がサルやウシ、ヒト等の区分にあたり、亜類型がサルのなかのニホンザル、テナガザル、オナガザルのような区分に、ヒトであれば日本人、印度人、英利西人のような区分にあたる。更に、日本人であっても一人一人氏名があり、顔に特徴があるため誰々だと人相により判断されている。顔だけから判断して、常に個人を特定しているといえる。人の顔には目や鼻耳、口等が同じ配列で付いているが、その僅かの配列の違い、個々の大きさや形の僅かな違いがある。その違いが特定されて個人が特定されているといえる。砂礫の見た時の様子からの比較も特徴といえよう。亜類型を砂礫相を考慮して区分すれば、Ⅰb類型はさらに大和川・東山麓A・東山麓Bに、Ⅰ bd 類型は東山麓D、他にⅠ bg 類型は大和川、Ⅱa類型は恩智に、Ⅱ ab 類型は東山麓Cに、Ⅳ類型は播磨、他に区分される。

観察した個数的には、Ⅳ類型が16資料と多く、Ⅱ類型が14資料、Ⅰ類型が10資料となる。更に、砂礫相を考慮すれば、Ⅱａ類型の恩智が９個、Ⅰｂ類型の東山麓ＢとⅣｎ類型の播磨としているものがともに６個と多い。この数的比較は観察して破片の数であり、固体数を示しているものではない。

4．砂礫の採取地

弓削遺跡が位置する付近は、大和川が運んできた砂礫からなる沖積地である。当遺跡の東には江戸時代に付け替えられる時まで玉櫛川が流れ、西には長瀬川が流れていた。東方の生駒山麓には段丘が形成されている。八尾市歴史民俗資料館付近の中位段丘付近では、火山灰層も確認されている。段丘は砂礫や粘土層からなる。段丘の東にあたる生駒山地の岩石と谷川の砂礫には密接な関係がある。八尾市恩智や大窪、薬音寺の北方では流出する谷川の上流域に閃緑岩が分布するために比較的角閃石が多い。また大窪東方の閃緑岩には粒状を示す黒雲母が多く含まれるため、大窪付近の砂礫には粒状の黒雲母と角閃石が比較的多く含まれる。大窪の東南に位置する高安山付近には細粒の片麻状黒雲母花崗岩（縞状花崗岩）が分布する。この南の八尾市黒谷から神宮寺にかけては斑状黒雲母花崗岩が分布する。更に、南の柏原市では黒雲母花崗岩が分布する。また、大窪の北では弱片麻状を示す黒雲母花崗岩が暗峠付近まで分布する。

このように岩石分布と谷川や山麓の砂礫とをもとにして、当遺跡を付近を中心に近距離で土器の砂礫相と合う砂礫を求める。Ⅰｂ類型で大和川とした砂礫は石英が多く、比較的、長石と角閃石が少ない。このような砂礫は大和川が合流した下流の砂礫に似ており、遺跡付近の砂礫にも似ている。Ⅰｂ類型で東山麓Ｂとした砂礫は比較的、角閃石が少なく、長石が多いことから八尾市神立付近や柏原市山ノ井から竪下にかけての谷川の砂礫に似ている。Ⅰｂ類型で東山麓Ａとした砂礫は細粒の片麻状花崗岩の礫が含まれ、粒状の黒雲母が含まれ、且つ、角閃石が比較的多いことから八尾市大窪付近の谷川の砂礫に似ている。Ⅰbd類型で東山麓Ｄとした砂礫は、神立か山ノ井から竪下にかけての段丘付近の砂礫と推定される。Ⅰbg類型の大和川とした砂礫は、比較的、長石が少なく、砂岩や泥岩が含まれることから、柏原市船橋よりも下流の砂礫と推定される。当遺跡付近の砂礫でもある。Ⅱａ類型の恩智とした砂礫は、庄内河内型甕のような砂礫相ではなく、媒乱砂礫が水で流され、砂礫粒の表面が洗われているような砂礫であることから、恩智神社付近から流れ出した谷川の砂礫と推定される。恩智遺跡付近の砂礫と推定される。Ⅱａ類型東山麓Ｃとした砂礫には片麻状黒雲母花崗岩粒が含まれることから、大窪付近の段丘の砂礫と推定される。Ⅱab類型の恩智とした砂礫は、恩智遺跡付近の段丘の砂礫であろうか。Ⅳ類型の砂礫は流紋岩質岩起源の砂礫を主とすることから、流紋岩質岩起源の砂礫を主とする奈良市西ノ京から法蓮にかけての大阪層群の一部の砂礫や泉北丘陵の砂礫も挙げられるが、岩相的には播磨地方の市川から損保川にかけての付近の砂礫に似ている。砂礫の詳細な分布が判れば、より詳しいことが判明するであろう。

以上のように土器に含まれる砂礫から砂礫の採取地を推定すれば、当遺跡の東方の恩智付近、八尾市大窪や神立付近、柏原市の東山麓、播磨中央部が推定される。砂礫採取地が土器の製作地とすれば、観察した破片数的には播磨中央部から遥々と運ばれているものが多く、恩智付近や大窪付近から運ばれているものがあり、僅かに在地で製作さているといえる。

註

1）奥田　尚（1992）「河川の砂礫とその類型－大和・河内・伊勢周辺を中心として－」『庄内式土器研究Ⅱ』庄内式土器研究会

土器の表面に見られる砂礫　　その1

| 試料番号 | 器種 | 岩石 花崗岩 肉眼 | 花崗岩 30倍 | 閃緑岩 肉眼 | 閃緑岩 30倍 | 流紋岩 肉眼 | 流紋岩 30倍 | 安山岩 肉眼 | 安山岩 30倍 | 砂岩,泥岩 肉眼 | 砂岩,泥岩 30倍 | チャート 肉眼 | チャート 30倍 | 片岩 肉眼 | 片岩 30倍 | 火山ガラス 肉眼 | 火山ガラス 30倍 | 鉱物 石英 肉眼 | 石英 30倍 | 長石 肉眼 | 長石 30倍 | 雲母 肉眼 | 雲母 30倍 | 角閃石 肉眼 | 角閃石 30倍 | 輝石 肉眼 | 輝石 30倍 | 海綿の骨片 | 類質 型式 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 94-631-U GE No. 5 | 甕 | | | | | L-中 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | S稀 貝 | M-微 | L-僅 E僅 | M-微 | M-微 | | | | M-稀 | | | | IVa [illegible] |
| 94-631-U GE No. 17 | 甕 | L-僅 角 | L-微 角 | L-微 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | M-微 | M-中 | M-中 | M-中 | M-中 板 | L-多 粒板 | M-僅 | L-中 | | | | IIa 東山麓A |
| 94-631-U GE No. 15 | 甕 | L-微 角 | L-微 角 | | | | | | | | | L-稀 角 | | | | | | M-中 | L-多 | L-僅 | L-多 | M-微 板 | M-稀 粒板 | | S微 | | | | Ibe 大和III |
| 94-631-U GE No. 6 | 甕 | L-中 角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-微 | L-中 | M-多 | L-中 | M-稀 粒 | L-稀 粒 | | S僅 | | | | Ib 東山麓A |
| 94-631-U GE No. 13 | 甕 | L-僅 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-中 | L-多 | L-中 | L-多 | M-稀 板 | L-稀 粒板 | | S微 | | | | Ib 東山麓B |
| 94-631-U GE No. 14 | 甕 | L-稀 角 | L-微 角 | L-微 亜角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | | | M-僅 | L-中 | L-中 | L-中 | M-微 板 | M-稀 板 | L-多 | L-中 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 3 | 甕 | L-中 角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-中 | L-多 | M-僅 | L-僅 | M-微 板 | | M-僅 | L-中 EP多 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 10 | 甕 | L-稀 角 | L-稀 角 | L-稀 角 | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | M-稀 | L-微 | L-僅 | L-僅 | M-稀 板 | | L-非 | L-非 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 16 | 甕 | L-稀 角 | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-多 | L-多 E稀 | L-中 | L-中 | S稀 板 | S微 粒 | | S微 | | | | Ibd 東山麓D |
| 94-631-U GE No. 18 | 甕 | | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | | | | L-僅 | L-僅 | L-僅 | | S稀 粒 | L-多 | L-非 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 20 | 甕 | | | | | L-中 亜角 | L-中 角 | | | L稀 亜円 | | | | | | | | M-僅 | L-多 E中 | M-中 | L-僅 | M-稀 板 | | | M-稀 | | | | IVan [illegible] |
| 94-631-U GE No. 11 | 甕 | | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | | | L-中 E稀 | L-微 | L-多 | | | L-微 | M-僅 EP僅 | | | | Ibd |
| 94-631-U GE No. 27 | 壺 | L-中 角 | L-稀 角 | L-稀 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | L-僅 | L-中 | L-中 | L-中 | M-僅 板 | M-僅 粒板 | M-僅 | L-中 | | | | IIa 東山麓A |
| 94-631-U GE No. 28 | 壺 | L-僅 角 | L-微 角 | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | M-微 | L-稀 | L-多 | L-多 | L-僅 板 | L-僅 板粒 | M-僅 | L-僅 | | | | Ib 東山麓B |

土器の表面に見られる砂礫　　その2

| 試料番号 | 器種 | 岩石 花崗岩 肉眼 | 花崗岩 30倍 | 閃緑岩 肉眼 | 閃緑岩 30倍 | 流紋岩 肉眼 | 流紋岩 30倍 | 安山岩 肉眼 | 安山岩 30倍 | 砂岩,泥岩 肉眼 | 砂岩,泥岩 30倍 | チャート 肉眼 | チャート 30倍 | 片岩 肉眼 | 片岩 30倍 | 火山ガラス 肉眼 | 火山ガラス 30倍 | 鉱物 石英 肉眼 | 石英 30倍 | 長石 肉眼 | 長石 30倍 | 雲母 肉眼 | 雲母 30倍 | 角閃石 肉眼 | 角閃石 30倍 | 輝石 肉眼 | 輝石 30倍 | 海綿の骨片 | 類質 型式 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 94-631-U GE No. 26 | 壺 | L稀 角 | | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-僅 | L-僅 | L-微 | S稀 板 | M-稀 板 | L-多 | L-非 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 29 | 壺 | L-稀 角 | L稀 角 | L-僅 角 | L-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | L-微 | L-中 | L-僅 | M-微 板 | | L-多 | L-非 EP僅 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 1 | 甕 | L-微 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | | | M-僅 | L-多 | M-稀 | M-僅 | | | | M-稀 | | | | Ib 大和III |
| 94-631-U GE No. 9 | 甕 | | | | | L-微 亜角 | L-僅 亜角 | | | | | | | | | | | L-微 | L-中 E中 | L-微 | M微 | | | | S稀 E中 | | | | IVa [illegible] |
| 94-631-U GE No. 7 | 甕 | | L-微 角 | L-稀 角 | L-微 角 | | | | | | | | | | | | | | L-中 E稀 | M-僅 | L-中 | S稀 板 | M-微 板粒 | M-僅 | M-中 EP僅 | | | | IIad 東山麓C |
| 94-631-U GE No. 19 | 甕 | | | | | | M稀 角 | | | | | | | | | | | M-微 | M-非 E多 | L-中 | L-僅 | | | | S稀 E中 | | | | IVe [illegible] |
| 94-631-U GE No. 24 | 甕 | | | | | L-僅 亜角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | M-僅 | L-多 E中 | M-稀 | M-僅 | M-僅 板 | L-稀 板 | | S稀 EP中 | | | | IVa [illegible] |
| 94-631-U GE No. 23 | 甕 | L-稀 角 | L-微 角 | L稀 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-中 | L-僅 | L-多 | M-稀 板 | | L-多 | L-中 EP僅 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 25 | 甕 | L-稀 角 | L-稀 角 | | M-稀 角 | | | | | | | | | | | | | | | L-僅 | M稀 | | | M-非 | L-非 EP僅 | | | | IIa 恩智 |
| 94-631-U GE No. 21 | 甕 | | | | | L-僅 角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | | L-僅 | L-多 E中 | L-僅 | L-僅 | | | | S微 E多 | | | | IVa [illegible] |
| 94-631-U GE No. 32 | 高坏 | | | | | L-稀 角 | L稀 角 | | | | | | | | | | | | S中 E多 | | | | | | S稀 | | | | IVa [illegible] |
| 94-631-U GE No. 34 | 高坏 | | | | M稀 角 | L-中 角 | L-僅 角 | | | | | | | | | | S稀 貝 | M-僅 | L-中 E中 | M-微 | M-微 | | L-稀 板 | | | | | | IVb [illegible] |
| 94-631-U GE No. 38 | 高坏 | | | | | L-中 角 | L-中 角 | | | | M稀 亜円 | | | | | | | M-僅 | L-中 E中 | M-中 | M僅 | L-稀 板 | | | S稀 | | | | IVan [illegible] |
| 94-631-U GE No. 35 | 高坏 | | | | | L-中 角 | L-中 角 | | | | | | | | | | | L-中 | L-中 E僅 | M-中 | L-僅 | | M-僅 板 | M-微 | M-僅 | | | | IVa |

土器の表面に見られる砂礫　　その 2

| 試料番号 | 色調 | 岩石 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 鉱物 | | | | | | | | | | 礫の特徴 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 花崗岩 | | 閃緑岩 | | 緑泥岩 | | 安山岩 | | 砂岩 | | チャート | | 片岩 | | 火山ガラス | | 石英 | | 長石 | | 雲母 | | 角閃石 | | 磁石 | | | | | |
| | | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | 2002 | 30倍 | | | | |
| 94-631-C GE No. 30 | 黒斑 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | S-微 | L-中 E-中 | S-微 | S-中 | L-微 | S-被板 | S-微 | S-被板 | | S-神 好多 | | IVa 縄多 |
| 94-631-E GE No. 3 | 黄 | | | L-神角 | L-神角 | L-神角 | L-微角 | | | | | | S-神 亜角 | | | | | | | S-微 E-神 | L-多 E-中 | L-中 | L-微 | S-神板 | S-神板 | | | S-神 | | | IVabc 縄文 |
| 94-631-E GE No. 31 | 淡黄 | L-微角 | | L-微角 | L-微角 | L-微角 | L-微角 | | | | | | | | | | | | | S-微 | L-中 E-神 | S-中 | L-多 | S-神板 | S-微板 | S-中 | L-多 好多 | | | | II ad 加曽? |
| 94-631-E GE No. 12 | 黄 | | | | | | L-微角 | L-微角 | | | | | | | | | | | | S-微 | L-中 E-中 | S-微 | L-神 | L-神板 | | | S-神 | | | | IVa 縄多 |
| 94-631-E GE No. 22 | 黄 | L-微角 | | L-微角 | | | | | | | | | | | | | | | | L-微 | L-微 | S-微 | L-微 | | | | S-神 | | | | I b 大和II |
| 94-631-E GE No. 4 | 黄 | | | | | | L-微角 | L-微角 | | | | | | | | | S-神 貝 | S-微 E-微 | L-多 E-微 | S-微 | S-微 | | | | | | S-神 | | | | IVa 縄多 |
| 94-631-E GE No. 40 | 茶褐斑土器 | L-微角 | L-微角 | | | | | | | | | | | | | | | L-微 | L-中 | L-微 | L-微 | L-神板 | L-神板 | | | | S-神 | | | | I b 東山道B |
| 94-631-E GE No. 41 | 黄 | | | L-神角 | | | L-微角 | L-微角 | | | | | | | | | | S-微 | L-微 E-微 | S-微 | S-神板 | | | | | | S-神 | | | | IVm 縄多? |
| 94-631-E GE No. 39 | 黒斑 | L-微角 | | L-微角 | | | | | | | | | | | | | | S-微 | L-多 | S-中 | L-微 | | | | | | S-神 | | | | I b 東山道A |
| 94-631-E GE No. 28 | 黒斑 | S-神角 | | L-神角 | | L-神角 | | | | | | | | | | | | S-神 | S-微 | S-神 | | S-神板 | | S-多 | | S-多 | S-微 砂礫 | | | | II a 並行 |
| 94-631-E GE No. 37 | 黒斑 | | | | | | L-中 亜角 | L-中角 | | | S-神 亜円 | S-神 亜円 | | | | | | L-中 | L-中 E-微 | L-微 | L-神 | | S-微板 | | | | S-神 | | | | IVm 縄多 |
| 94-631-E GE No. 38 | 赤褐斑 | L-微角 | | L-神角 | L-神角 | | | | | | | | | | | | | S-微 | L-微 | L-中 | L-微 | | | | | | L-神 亜経 | L-中 | S-多 砂礫 | | | II a 並行 |

微粒～顆粒組織　粗粒による組織：L＝粒径 2 mm以上　M＝粒径 2 mm未満0.5mm 以上　S＝粒径0.5mm 未満　非＝量が非常に多い　多＝量が多い　中＝量が中　僅＝量がごく僅か　微＝量がごく僅か　神＝量がごくごく僅か　30倍＝実体鏡の倍率が30倍　実体鏡による観察：L＝粒径が1 mm以上　M＝1 mm未満0.3mm 以上　S＝粒径が0.3mm 未満　－＝以下の粒径がある　E＝自形　EF＝結晶面がある　W＝白雲母が含まれる　板＝板状　貝＝貝殻状　亜＝亜状　フナブシ＝状　バー＝棒石状　球＝球状　図は報告書等の番号に同じ　時代区分は奥田の区分（1992、『埼内式土器研究 I』を参照）

# 報告書抄録

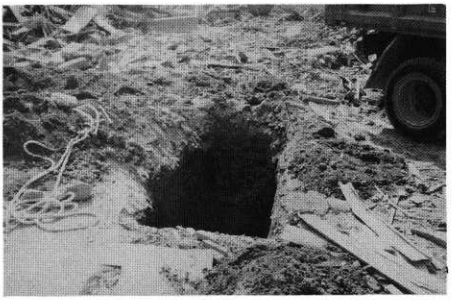
| | |
|---|---|
| ふりがな | やおしないいせきへいせい7ねんどはっくつちょうさほうこくしょ |
| 書名 | 八尾市内遺跡平成7年度発掘調査報告書Ⅰ |
| 副書名 | 平成7年度国庫補助事業 |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 八尾市文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | 33 |
| 編著者名 | 米田敏幸・溝畑斎・吉田野乃 |
| 編集機関 | 八尾市教育委員会 |
| 所在地 | 〒581　大阪府八尾市本町1丁目1番1号　℡0729−91−3881 |
| 発行年月日 | 西暦　1996年　3月　31日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 ° ′ ″ | 東経 ° ′ ″ | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 跡部遺跡 | 大阪府八尾市東太子堂 | 27212 | | 34° 36′ 50″ | 135° 35′ 25″ | 19950530 | 11．44 | ガソリンスタンド建設に伴う遺構確認調査 |
| 恩智遺跡 | 八尾市　恩智中町 | 27212 | | 34° 36′ 50″ | 135° 38′ | 19950801, 07 | 6 | 分譲住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 小阪合遺跡 | 八尾市　青山町<br>南小阪合町 | 27212 | | 34° 37′ 15″ | 135° 37′ 00″ | 19950606, 22<br>19950623, 27<br>19950628～30<br>19950707, 10<br>19950711, 12<br>19951121 | 12．5<br>12．5 | 診療所及び住宅建設に伴う遺構確認調査<br>共同住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 佐堂遺跡 | 八尾市　佐堂町 | 27212 | | 34° 37′ 50″ | 135° 35′ 37″ | 19950301 | 8 | 共同住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 高安古墳群 | 八尾市　山畑 | 27212 | | 34° 36′ 45″ | 135° 38′ 25″ | 19950418<br>19950511 | 6．25 | 専用住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 竹渕遺跡 | 八尾市　竹渕<br>竹渕 | 27212 | | 34° 36′ 45″ | 135° 34′ 20″ | 19950425, 26<br>19950818 | 45<br>18 | 共同住宅建設に伴う遺構確認調査<br>共同住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 東郷遺跡 | 八尾市　光町<br>荘内町 | 27212 | | 34° 37′ 40″ | 135° 36′ 25″ | 19950313<br>19951127 | 6．25<br>12 | 共同住宅建設に伴う遺構確認調査<br>共同住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 東郷廃寺 | 八尾市　桜ヶ丘 | 27212 | | 34° 37′ 35″ | 135° 36′ 45″ | 19950323, 24 | 20 | 店舗建設に伴う遺構確認調査調査 |
| 中田遺跡 | 八尾市　中田<br>刑部 | 27212 | | 34° 36′ 45″ | 135° 37′ 10″ | 19950731<br>19951018 | 8<br>18 | 共同住宅建設に伴う遺構確認調査<br>共同住宅建設に伴う遺構確認調査 |
| 水越遺跡 | 八尾市　服部川 | 27212 | | 34° 36′ 45″ | 135° 37′ 10″ | 19951030 | 18 | 老人ホーム建設に伴う遺構確認調査 |
| 八尾南遺跡 | 八尾市　西木の本<br>若林町 | 27212 | | 34° 35′ 30″ | 135° 35′ 10″ | 19950207<br>19950802, 03<br>19950804 | 18<br>25 | 共同住宅建設に伴う遺構確認調査<br>遊技場建設に伴う遺構確認調査 |
| 弓削遺跡 | 八尾市　志紀町 | 27212 | | 34° 35′ 30″ | 135° 37′ 00″ | 19941214 | 4．5 | 宅地造成に伴う遺構確認調査 |

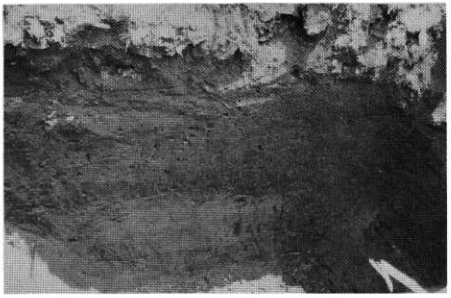
| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主　な　遺　構 | 主　な　遺　物 | 特　記　事　項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 跡部遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 土坑　ピット | 須恵器　土師器 | |
| 恩智遺跡 | 集落 | 弥生～古墳時代 | 包含層　落ち込み状遺構 | 弥生式土器　石器 | |
| 小阪合遺跡 | 集落 | 鎌倉時代 | 井戸　溝　ピット | 玉未製品　鉄滓　瓦器 | |
| | | 古墳時代 | 溝　土坑 | 須恵器　土師器　韓式土器 | |
| | | 弥生時代 | 溝　ピット | 弥生式土器 | |
| | 集落 | 鎌倉時代 | ピット | 瓦器　土師器 | |
| | | 平安時代 | 曲物井戸 | 土師器 | |
| | | 古墳時代 | 土坑状遺構 | 埴輪 | |
| 佐堂遺跡 | 集落 | 鎌倉時代 | ピット | 瓦器　須恵器 | |
| 高安古墳群 | 集落 | 鎌倉時代 | 土坑状遺構 | 瓦器　土師器　埴輪 | |
| 竹渕遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 包含層 | 土師器 | |
| | 集落 | 古墳時代 | 包含層 | 須恵器　土師器　製塩土器<br>韓式系土器 | |
| 東郷遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 溝状遺構 | 土師器 | |
| | 集落 | 古墳時代 | 包含層 | 土師器 | |
| 東郷廃寺 | 集落 | 鎌倉時代 | 包含層 | 瓦器 | |
| | | 奈良時代 | 土坑 | 平瓦　丸瓦 | |
| | | 古墳時代 | 土坑　ピット | 製塩土器　須恵器　土師器 | |
| 中田遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 土坑 | 須恵器　土師器 | |
| | 集落 | 弥生時代 | 包含層　小穴状遺構 | 弥生式土器　須恵器 | |
| 水越遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 溝状遺構 | 弥生式土器 | |
| 八尾南遺跡 | 集落 | 古墳時代 | 包含層 | 須恵器 土師器 弥生式土器<br>土師器 弥生式土器 | |
| | 集落 | 古墳時代 | 土坑　溝 | | |
| 弓削遺跡 | 集落 | 弥生時代 | 溝 | 弥生式土器 | |

# 図　　版

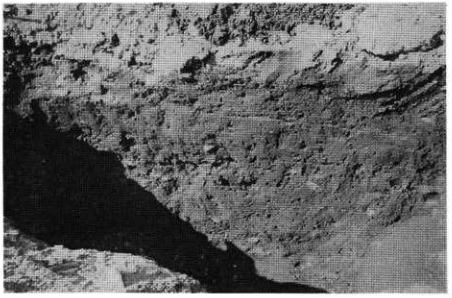
第３調査区全景



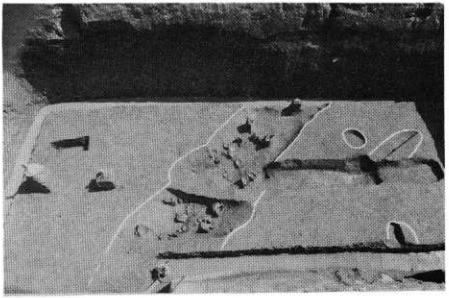
第２調査区断面状況



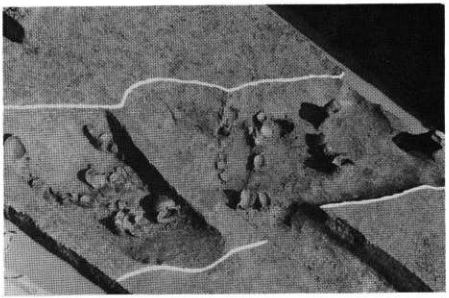
第３調査区断面状況



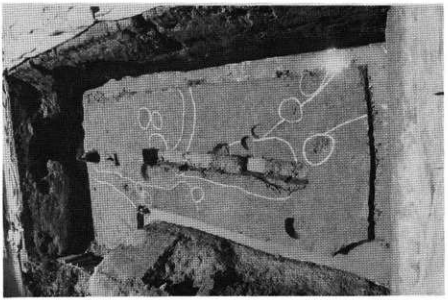
弥生時代末期遺構面
（北より）



SD-13 検出状況
（北西より）



古墳時代中期遺構面Ⅱ
（西から）

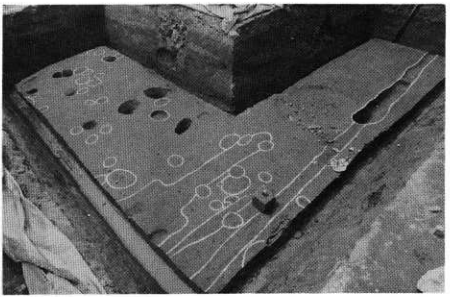


古墳時代中期遺構面Ⅱ遺構面，B·C区（南より）

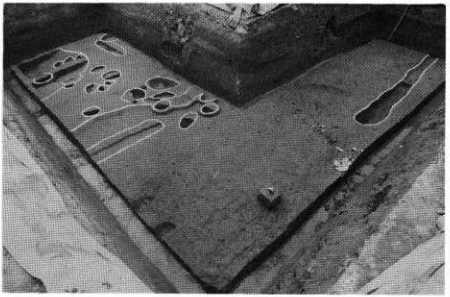
SD-9上面検出状況（北より）

SD-9下面検出状況

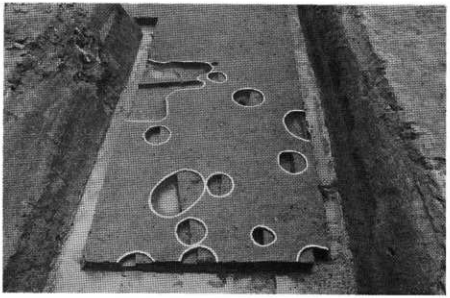
鎌倉時代Ⅱ遺構面
（東南より）



鎌倉時代Ⅰ遺構面
（東南より）

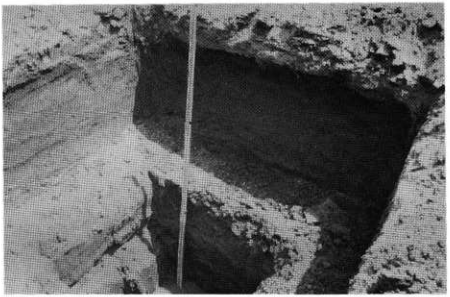


中近世遺構面
（西より）

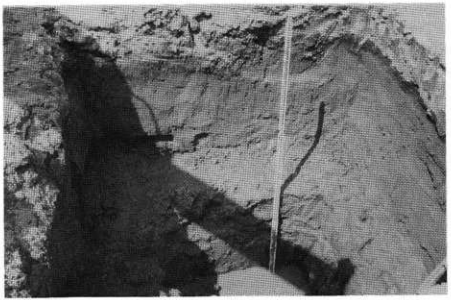


第１調査区調査状況

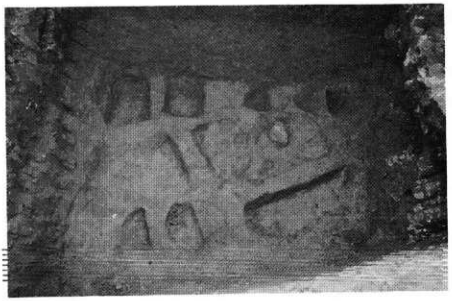
第１調査区全景



第２調査区全景

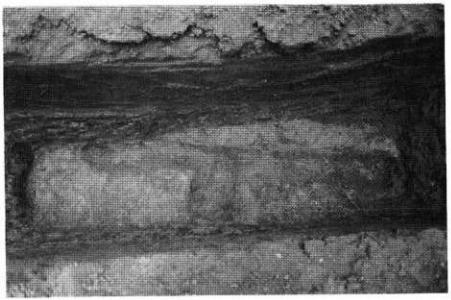


第１調査区遺構検出状況（西より）

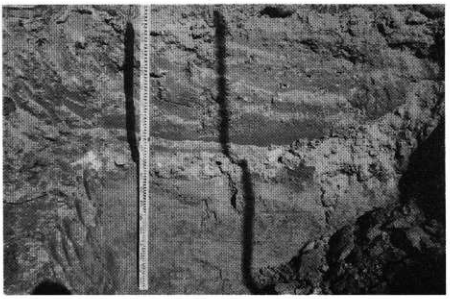


第３調査区遺構検出状況（西より）

第５調査区遺構検出状況（東より）



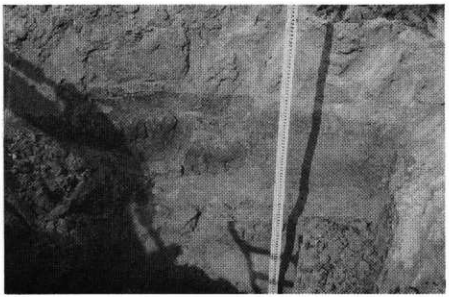
第1調査区断面状況



第2調査区調査状況

第2調査区
遺物出土状況

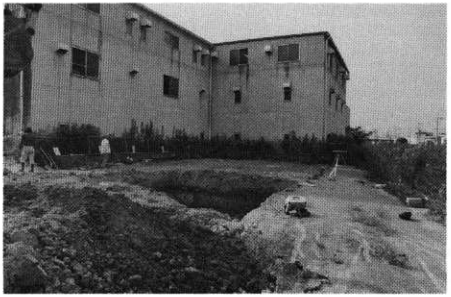
第1調査区断面状況



第2調査区
遺物取上げ状況

第2調査区
遺物検出状況

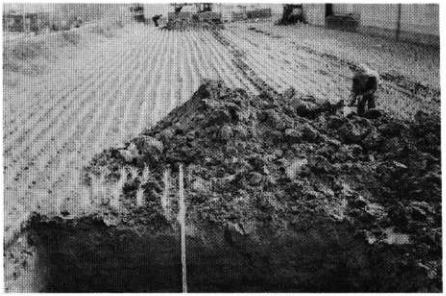
八尾南遺跡
調査区遠景（南より）



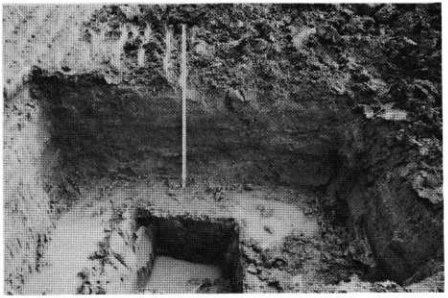
八尾南遺跡
遺構検出状況（南より）

小阪合遺跡
遺構検出状況（北より）

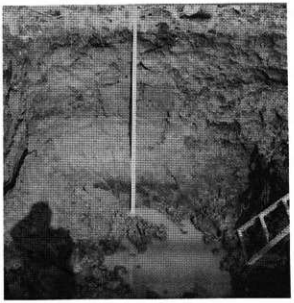
調査地全景



第１調査区全景

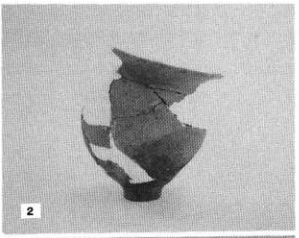


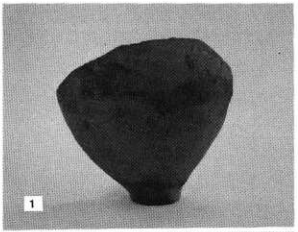
第２調査区全景

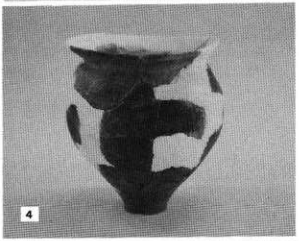


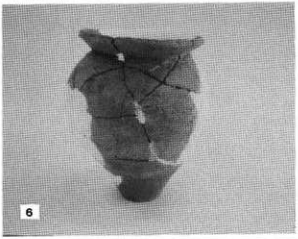
弓削遺跡
遺物出土状況

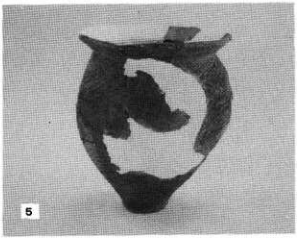
中田遺跡
須恵器杯身出土状況

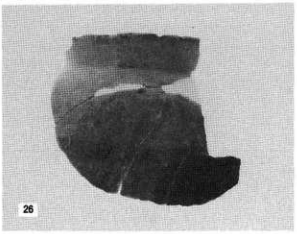


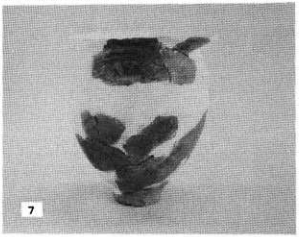





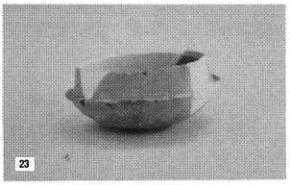



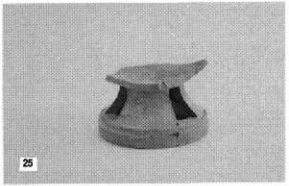



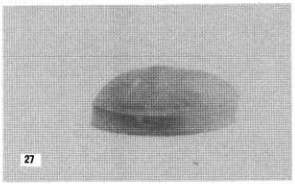

SD13　弥生土器　(26 を除く)

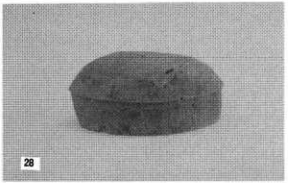
22


23

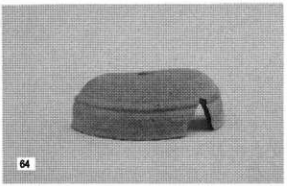
24

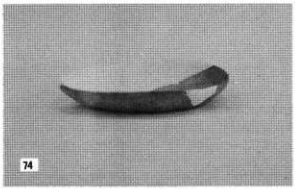

25

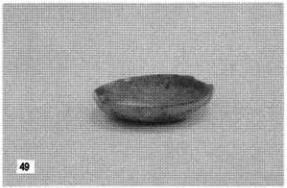

27


28

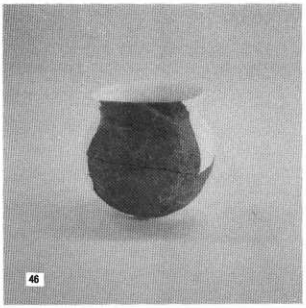
42

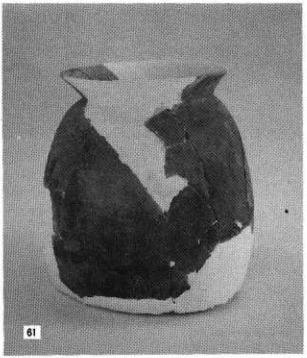

64

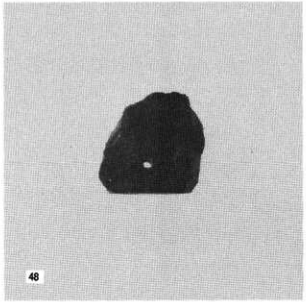

74

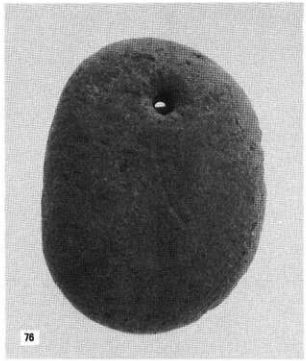

49

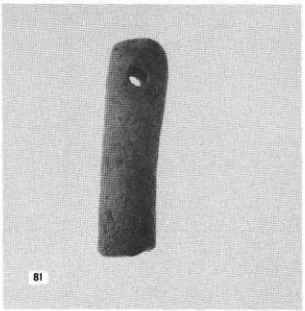
出土遺物



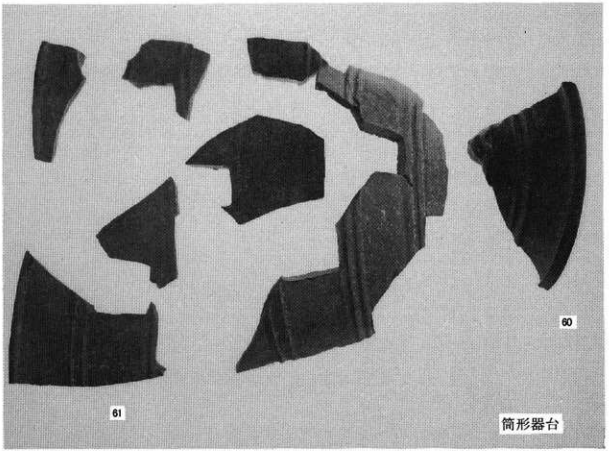



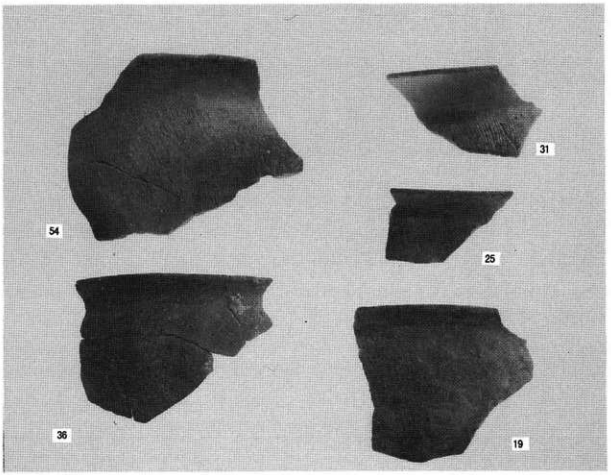





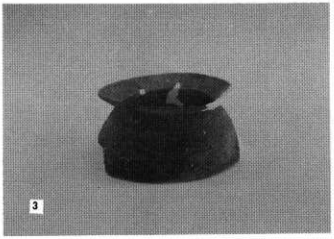



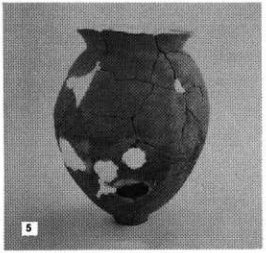

出土遺物

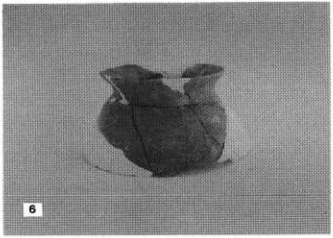


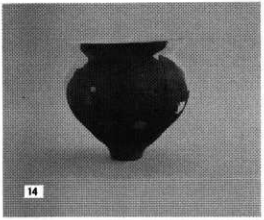



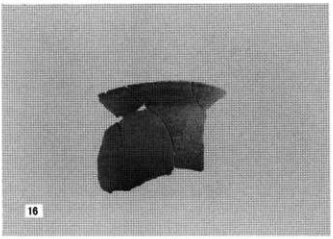

土師器

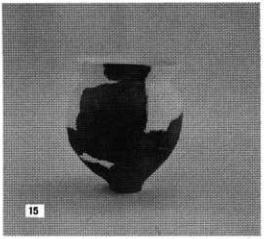


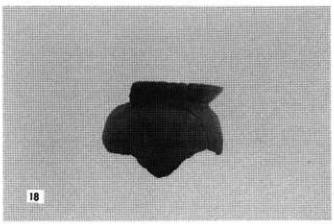



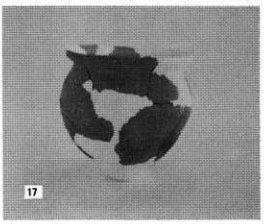



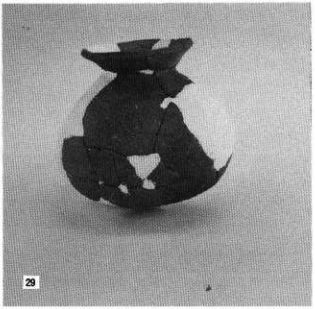



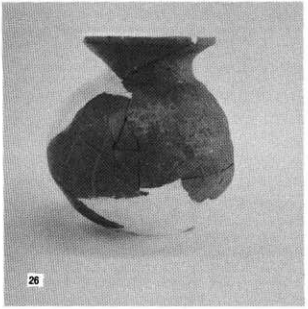



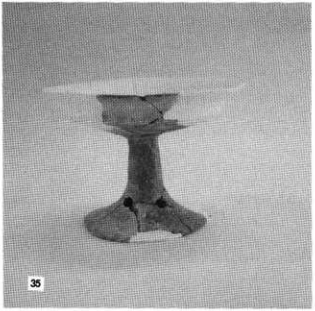



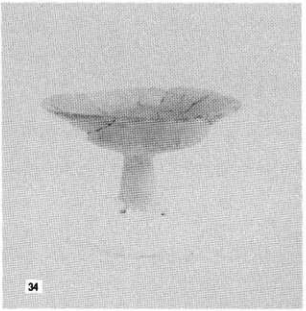



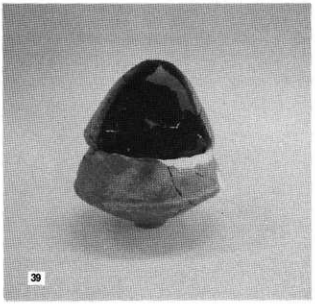

出土遺物

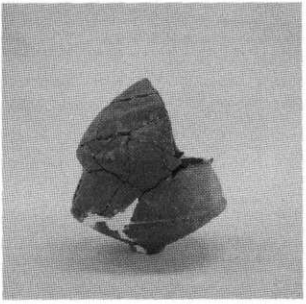


出土遺物

八尾市文化財調査報告33
平成７年度国庫補助

八尾市内遺跡平成７年度発掘調査報告Ⅰ

発行日　1996年３月
発行所　八尾市教育委員会
印　刷　旭堂印刷(株)